兵庫県文化財調査報告　第426冊

洲 本 市

馬　木　遺　跡

県営洲本物部住宅建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２４（２０１２）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

洲 本 市

馬　木　遺　跡

県営洲本物部住宅建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成２４（２０１２）年3月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

洲本川河口付近から見た遺跡遠景（中央付近）

遺跡遠景（西から）

弥生前・中・後期出土土器

弥生後期　出土土器

弥生中期　出土土器

巻頭図版 4

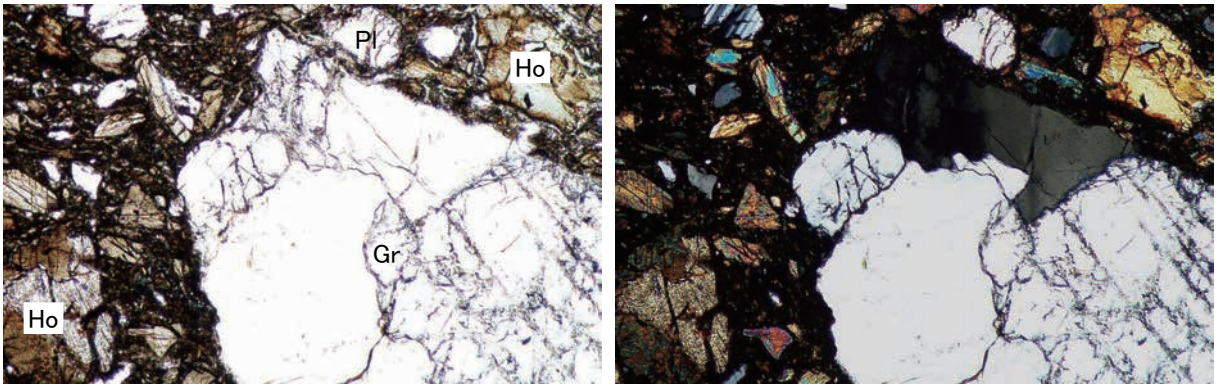
弥生前期　出土土器

弥生前期　溝出土土器

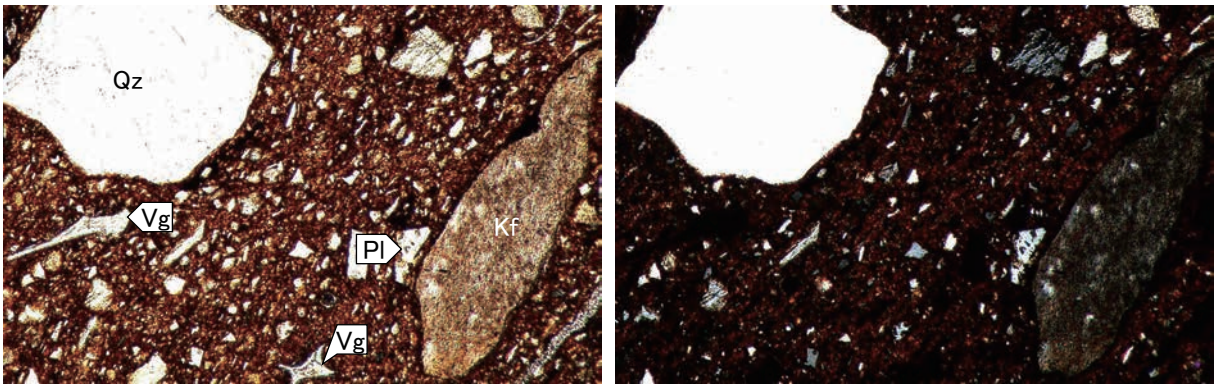
ＳＫ 201　出土土器

ＳＸ 203　出土土器

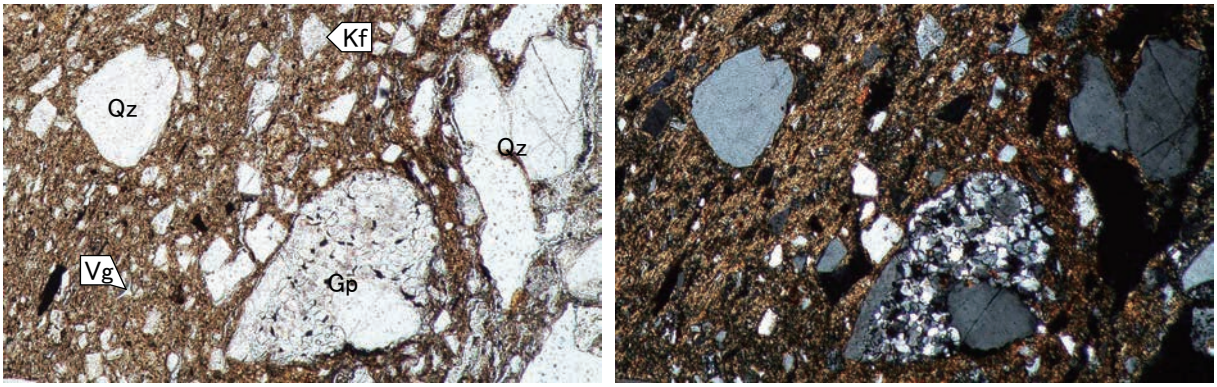
胎土薄片(1)



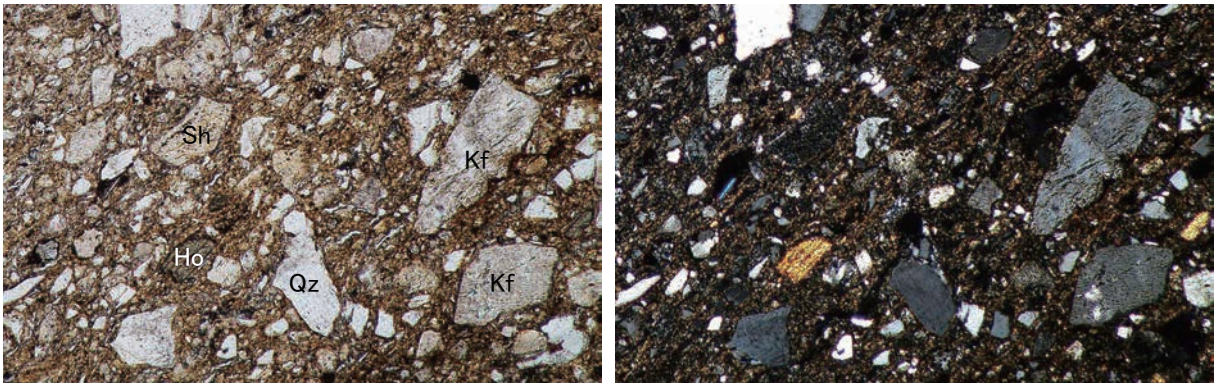
1.試料番号1(報41　SR001　第2面　弥生時代後期　壺)



2.試料番号2(報8　　SD007　pot2　弥生時代中期　高杯)



3.試料番号3(報118　SD202　第2面　弥生時代前期　甕)

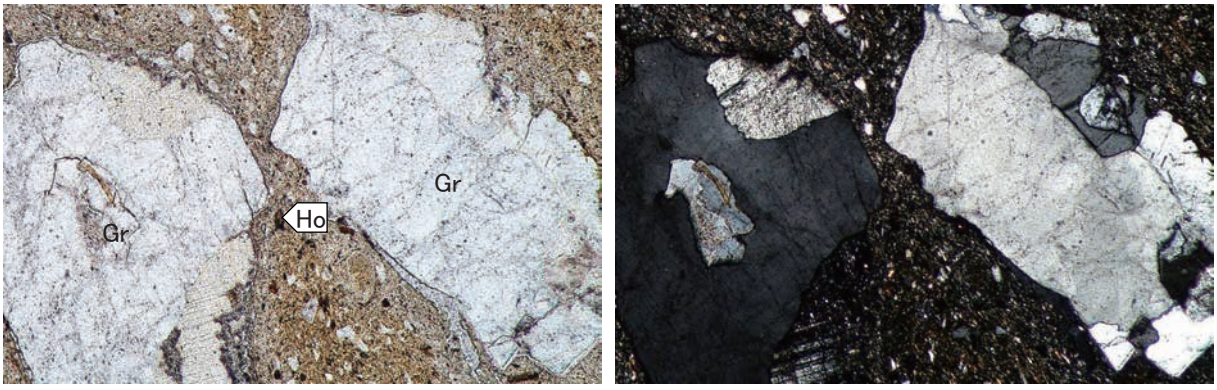


4.試料番号4(報7　　SD007　pot1　弥生時代中期　水差し)

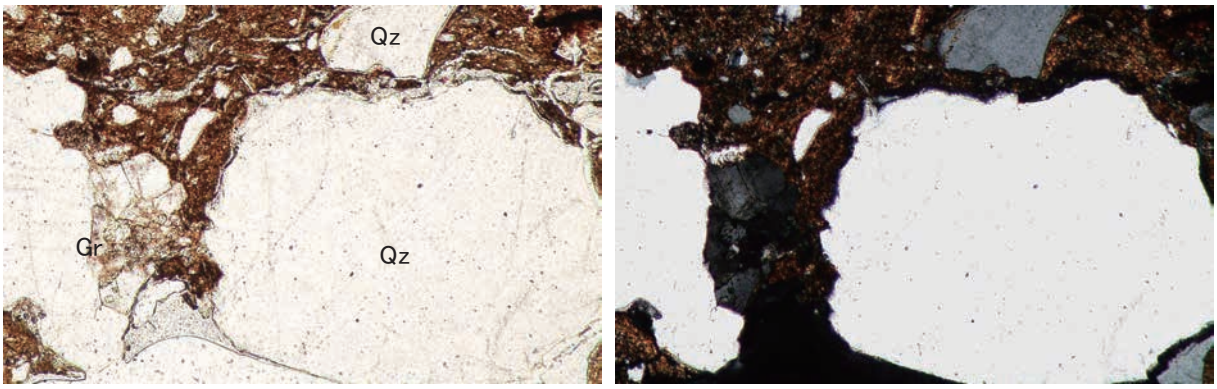
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Sh:頁岩. Gp:花崗斑岩. Gr:花崗岩.
Vg:火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

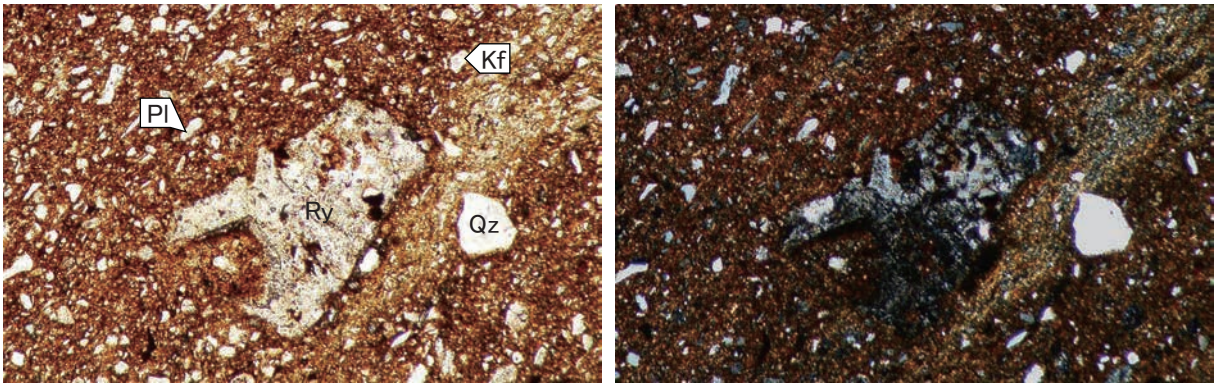
胎土薄片(2)



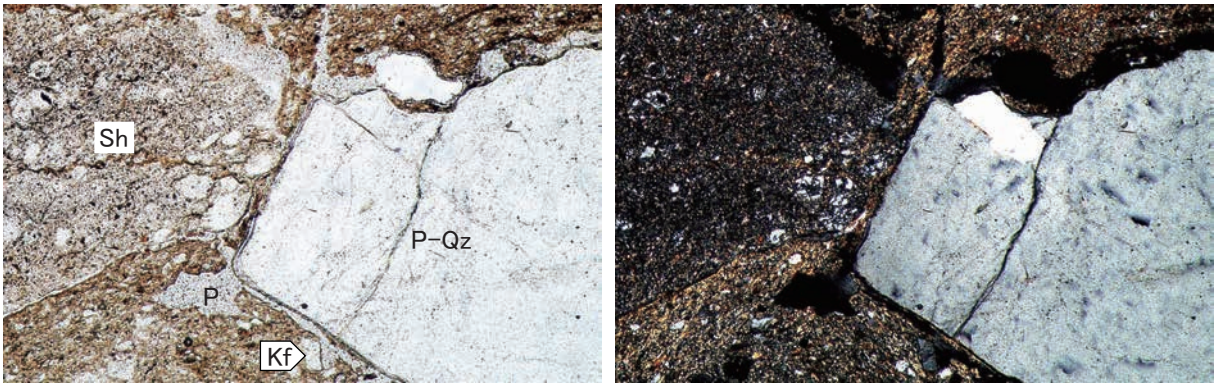
5.試料番号5(報77　SK201　弥生時代前期　壷)



6.試料番号6(報96　SK201　弥生時代前期　甕)



7.試料番号7(報106　SK205　弥生時代前期　壷)

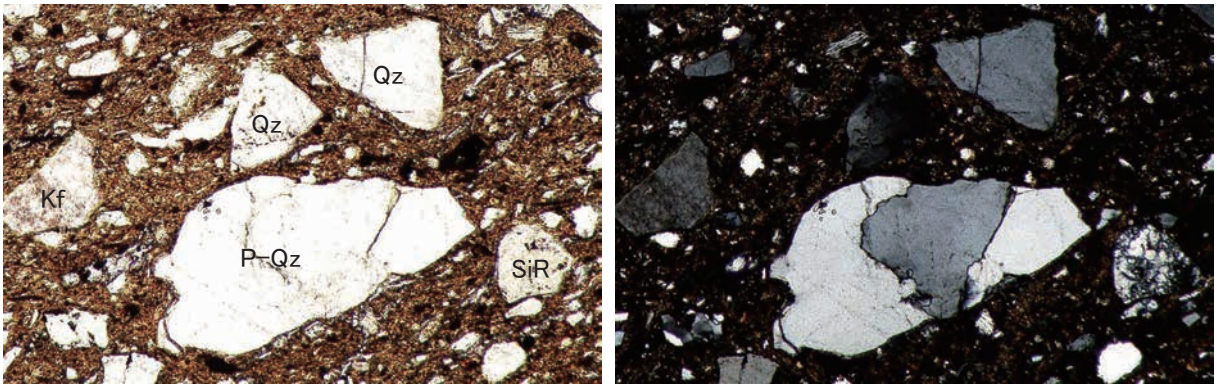


8.試料番号8(報109　SK205　弥生時代前期　甕)

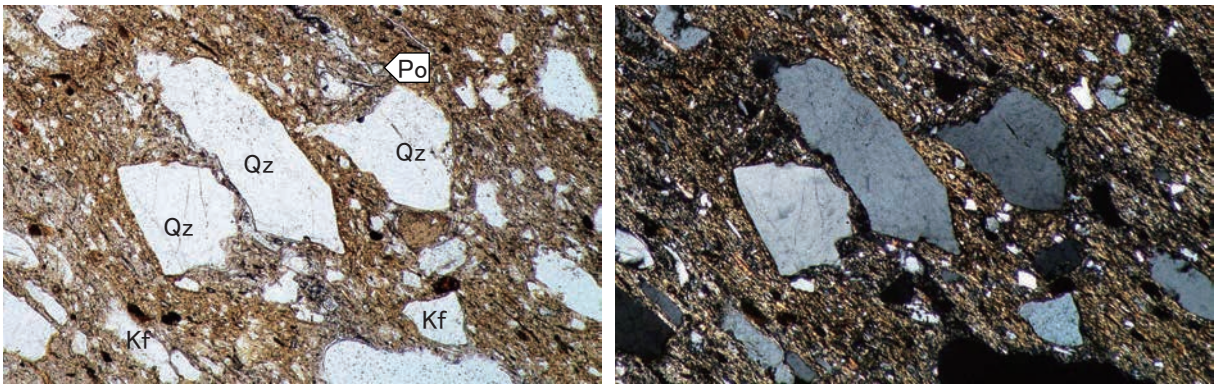
0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Pl:斜長石. Ho:角閃石. Sh:頁岩. Ry:流紋岩.
P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩. P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

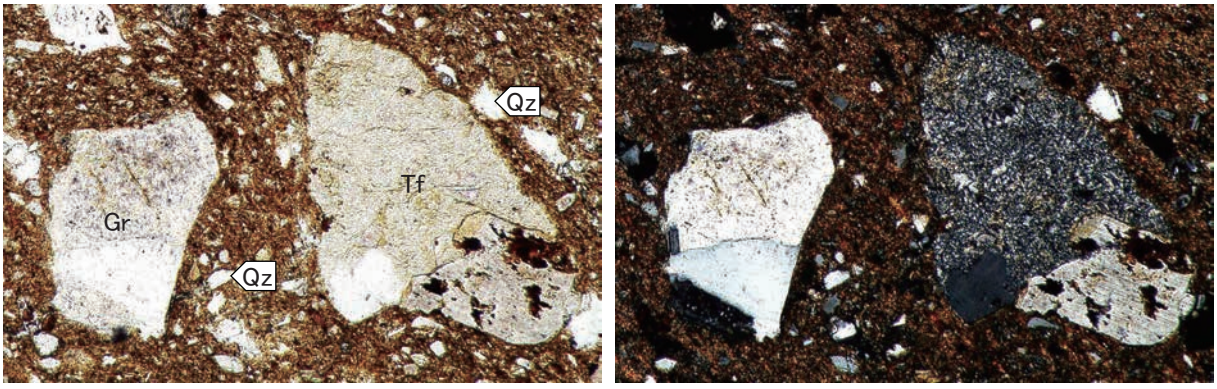
胎土薄片(3)



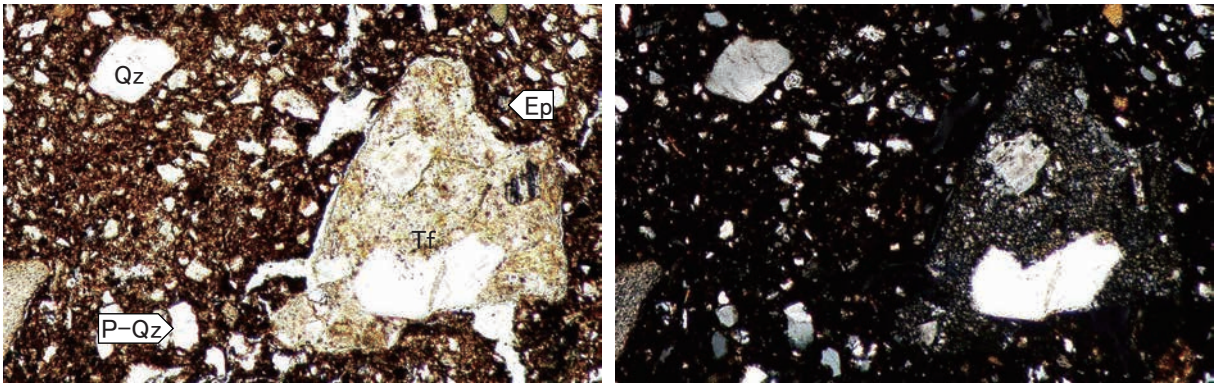
9.試料番号9(参考1　SD203　弥生時代前期　甕)



10.試料番号10(参考2　SX203　弥生時代前期　甕)



11.試料番号11(参考3　SK201　弥生時代前期　壷)



12.試料番号12(参考4　SD205　弥生時代前期　壷)

0.5mm

Qz:石英. Kf:カリ長石. Ep:緑レン石. Tf:凝灰岩. P-Qz:多結晶石英. Gr:花崗岩.
SiR:珪化岩. Po:植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

例　言

1．本書は兵庫県洲本市物部3丁目に所在する、馬木遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は県営洲本物部住宅建替に伴うもので、兵庫県住宅供給公社の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成21年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は、県土整備部住宅建築局の依頼を受けて平成23年度に兵庫県立考古博物館が実施した。

4．発掘調査時の写真測量は株式会社日建技術コンサルタントに委託して実施した。

5．写真は、遺構については調査員が撮影し、遺物については（株）地域文化財研究所に委託した。

6．本書の執筆は渡辺・長濱が分担し、編集は長濱が佐伯純子の補助を得て行った。

7．本書にかかる写真・図面、遺物は兵庫県立考古博物館および魚住分館に保管している。

8．発掘調査および報告書作成にあたり下記の方々にご教示、ご指導を頂いた。記して感謝の意を表します。（敬称略）

洲本市教育委員会　浦上雅史

凡　例

1．本書に使用した方位は、国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

2．遺構は種類ごとに以下の略号を用い、番号は遺構ごとに第1面は001～、第2面は201～の通し番号としている。

ＳＡ：柱穴列　ＳＤ：溝・溝状遺構　ＳＥ：井戸　ＳＫ：土坑　ＳＲ：河道　ＳＸ：落ち込み　Ｐ：柱穴・柱穴状遺構

3．土層色調名および土器の色調名は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』1999年度版によった。

4．遺物番号は、本文・図版・写真図版とも同一として通し番号としている。

本文目次

例言

第１章　調査にいたる経緯 ……長濱誠司…… 1
　第１節　調査の契機 …… 1
　第２節　発掘調査の経過と体制 …… 1
　第３節 出土品整理作業の経過と体制 …… 2

第２章　遺跡をとりまく環境 ……長濱…… 3
　第１節 地理的環境 …… 3
　第２節 歴史的環境 …… 4

第３章　調査の結果 ……長濱…… 7
　第１節 基本層序 …… 7
　第２節 第１面 …… 7
　第３節 第２面 …… 9

第４章　出土遺物 ……渡辺　昇・山本　誠…… 12
　第１節　土器 ……渡辺…… 12
　第２節　石器 ……山本…… 20

第５章　自然科学的分析
　１．馬木遺跡出土土器の胎土分析　パリノ・サーヴェイ株式会社 …… 31
　２．馬木遺跡出土材の樹種同定　株式会社パレオラボ …… 41
　３．馬木遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）　株式会社加速器分析研究所 …… 44
　４．馬木遺跡の地形環境……青木哲哉…… 48

報告書抄録

挿図目次

第１図　馬木遺跡の位置 …… V
第２図　調査位置図 …… 3
第３図　周辺の遺跡 …… 5
第４図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1) …… 35
第５図　胎土中の砂の粒径組成(1) …… 35

第 6 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2) …… 36
第 7 図　胎土中の砂の粒径組成(2) …… 36
第 8 図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3) …… 37
第 9 図　胎土中の砂の粒径組成(3) …… 37
第 10 図　砕屑物・基質・孔隙の割合 …… 37
第 11 図　馬木遺跡出土材の走査型電子顕微鏡写真 …… 43
第 12 図　［参考］暦年較正年代グラフ …… 47
第 13 図　調査区周辺の地形分類図 …… 49
第 14 図　調査区付近における微地形の分布 …… 49
第 15 図　調査区における遺構検出面付近以深のトレンチ断面図 …… 51
第 16 図　調査区における遺構検出面付近より上位の堆積物 …… 52

表目次

第 1 表　出土石器観察表 …… 21
第 2 表　出土土器観察表 …… 22
第 3 表　試料一覧および胎土分類結果 …… 31
第 4 表　薄片観察結果(1) …… 33
第 5 表　薄片観察結果(2) …… 34
第 6 表　樹種同定結果一覧 …… 41
第 7 表　測定結果(1) …… 45
第 8 表　測定結果(2) …… 46

図版目次

図版 1　南・西壁断面図
図版 2　遺構　第 1 面全体図
図版 3　遺構　第 1 面遺構
図版 4　遺構　第 2 面全体図
図版 5　遺構　ＳＫ２０１
図版 6　遺構　第 2 面遺構(1)
図版 7　遺構　第 2 面遺構(2)
図版 8　遺物　第 1 面遺構出土遺物(1)
図版 9　遺物　第 1 面遺構出土遺物(2)
図版 10　遺物　第 1 面遺構出土遺物(3)
図版 11　遺物　第 2 面遺構出土遺物(1)
図版 12　遺物　第 2 面遺構出土遺物(2)

図版 13　遺物　第 2 面遺構出土遺物(3)
図版 14　遺物　第 2 面遺構出土遺物(4)
図版 15　遺物　第 2 面遺構出土遺物(5)
図版 16　遺物　第 2 面遺構出土遺物(6)
図版 17　遺物　包含層出土遺物(1)
図版 18　遺物　包含層出土遺物(2)
図版 19　遺物　出土石器（打製）
図版 20　遺物　出土石器（磨製）

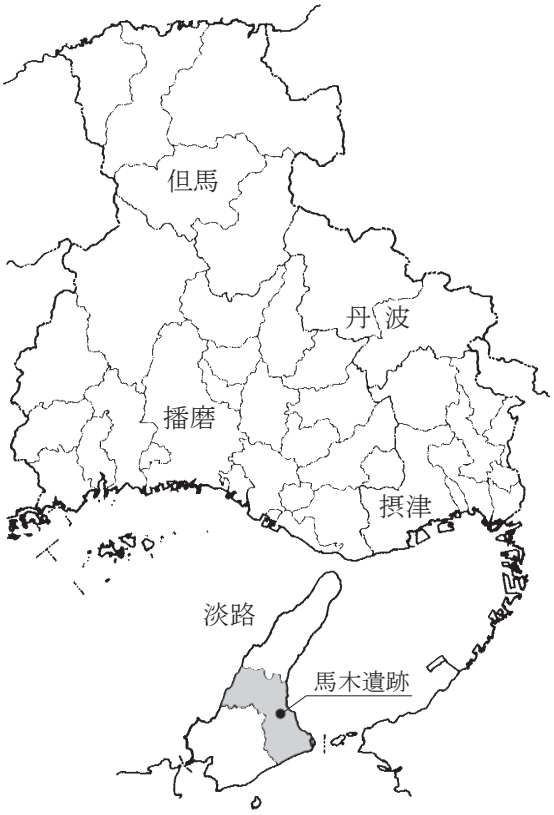
巻頭図版目次

巻頭図版 1　洲本川河口付近から見た遺跡遠景 / 遺跡遠景
巻頭図版 2　弥生前・中・後期出土土器
巻頭図版 3　弥生後期　出土土器 / 弥生中期　出土土器
巻頭図版 4　弥生前期　出土土器 / 弥生前期　溝出土土器
巻頭図版 5　ＳＫ２０１出土土器 / ＳＸ２０３出土土器
巻頭図版 6　胎土薄片 (1)
巻頭図版 7　胎土薄片 (2)
巻頭図版 8　胎土薄片 (3)

写真図版目次

写真図版 1　遺跡　遺跡周辺　調査対象地　調査対象地から見た馬木遺跡
写真図版 2　遺構　第１面：全景　調査区東半部　調査区南壁断面　調査区南壁断面（部分）
写真図版 3　遺構　第１面：野井戸　柱穴列　Ｐ７断面　Ｐ８断面
写真図版 4　遺構　第１面：Ｐ００４断面　Ｐ００５断面　ＳＫ００１断面　ＳＫ００２断面　ＳＫ００３断面　ＳＫ００４断面　ＳＲ００１（上層）
写真図版 5　遺構　第１面：ＳＲ００１（上層）断面　ＳＲ００１（上層）土器出土状況　ＳＤ００１断面　ＳＤ００１土器出土状況　ＳＤ００３断面　ＳＤ００４断面　ＳＤ００５土器出土状況　ＳＤ００９断面　ＳＤ０１３断面
写真図版 6　遺構　第２面：全景　東半部
写真図版 7　遺構　第２面：南壁東半部断面　西壁断面　ＳＲ００１（下層）　ＳＲ００１（下層）断面　ＳＲ００１（下層）断面　ＳＲ００１（下層）流木出土状況
写真図版 8　遺構　第２面：ＳＫ２０１　ＳＫ２０１断面　ＳＫ２０１土器出土状況　ＳＫ２０１炭の散布状況①　ＳＫ２０１炭の散布状況②　ＳＫ２０１底部断割断面①　ＳＫ２０１底部断割断面②

写真図版９　遺構　第２面：ＳＫ２０２断面　ＳＫ２０３断面　ＳＫ２０４・２０５　ＳＫ２０４断面
ＳＫ２０５断面　ＳＫ２０５土器出土状況　ＳＫ２０８断面　ＳＫ２０８土器出土状況
ＳＫ２０９断面　ＳＫ２０９土器出土状況
写真図版 10　遺構　第２面：ＳＫ２１０　ＳＫ２１１断面　ＳＫ２１２断面　ＳＫ２１３断面　西半部の遺構　ＳＲ０１（下層）東岸付近の遺構
写真図版 11　遺構　第２面：炭土坑群　ＳＸ２０１断面　ＳＸ２０２断面　ＳＸ２０３　ＳＸ２０３土器出土状況　ＳＤ２０１・２０２　ＳＤ２０１断面　ＳＤ２０２断面
写真図版 12　遺構　第２面：ＳＤ２０３断面　ＳＤ２０３土器出土状況　ＳＤ２０４断面①　ＳＤ２０４西半部粘土塊検出状況　ＳＤ２０４断面②噴砂検出状況　ＳＤ２０４噴砂断割断面　ＳＤ２０５断面　ＳＤ２０６断面
写真図版 13　遺構　調査区東西断割南壁断面　調査区南北断割西壁断面　調査風景
写真図版 14　遺物　第１面遺構出土遺物（１）
写真図版 15　遺物　第１面遺構出土遺物（２）
写真図版 16　遺物　第１面遺構出土遺物（３）
写真図版 17　遺物　第１面遺構出土遺物（４）
写真図版 18　遺物　第１面遺構出土遺物（５）
写真図版 19　遺物　第１面遺構出土遺物（６）
写真図版 20　遺物　第２面遺構出土遺物（１）
写真図版 21　遺物　第２面遺構出土遺物（２）
写真図版 22　遺物　第２面遺構出土遺物（３）
写真図版 23　遺物　第２面遺構出土遺物（４）
写真図版 24　遺物　第２面遺構出土遺物（５）
写真図版 25　遺物　第２面遺構出土遺物（６）
写真図版 26　遺物　第２面遺構出土遺物（７）
写真図版 27　遺物　第２面遺構出土遺物（８）
写真図版 28　遺物　第２面遺構出土遺物（９）
写真図版 29　遺物　包含層出土遺物（１）
写真図版 30　遺物　包含層出土遺物（２）
写真図版 31　遺物　包含層出土遺物（３）
写真図版 32　遺物　出土石器



第１図　馬木遺跡の位置

第１章　調査にいたる経緯

第１節　調査の契機

兵庫県住宅供給公社（当時）が計画した県営洲本物部住宅建設は、既存の鉄筋高層棟となっている１号棟以外の低層住宅を解体撤去し、新たな高層住宅を建設するものである。

平成18年度に分布調査を実施した。事業地内では遺物の散布状況は明らかにできなかったが、周辺の田畑で遺物の散布が認められたこと、地形観察では事業地西側の貴船神社付近から東側にやや高く、弥生時代および奈良時代の遺物散布地である馬木遺跡の所在する川南側との比高差がないことなどを確認した。以上の理由から事業地内に遺跡の所在する可能性が考えられた。

第２節　発掘調査の経過と体制

確認調査の概要

グリッド６箇所を設定し、調査を行った。

盛土が厚いため、いずれも現地表から２ｍ以上掘削した。うち北半の２箇所についてはシルトあるいは砂層が続き、残る１箇所も後述するグリッドの遺物包含層の広がる可能性が考えられたが、遺物の出土はみなかった。事業地南端にあたる２箇所については、上下２層の遺物包含層とそれらの直下で遺構面を検出した。

種　別　　確認調査
事業者　　兵庫県住宅供給公社
事業名　　県営物部住宅建設事業
調査担当者　企画調整班　深江英憲
調査年月日　平成19年６月13日
調査面積　　24㎡

本発掘調査の概要

確認調査で遺物包含層などが確認された箇所について、事業が進捗することから本発掘調査に移行した。組織改正により事業者は県土整備部住宅建築局となった。

発掘調査工事は橋詰建設株式会社に、写真測量は株式会社日建技術コンサルタントに委託して行った。なお写真測量は通常航空写真撮影を行うが、諸般の事情によりヘリコプターの低空飛行が困難なため、クレーンによる撮影を行った。

調査区内は厚い盛土がなされているため、機械により除去し、さらに遺物包含層直上まで掘削した。これらにより発生した残土はダンプカーにより処分場まで搬出したが、調査対象地が住宅地であることや近隣に学校が所在するため、ダンプカーの運行については細心の注意をはらった。

遺物包含層以下は人力掘削を行った。調査対象とした遺構面は２面であり、各面まで掘り下げ後に面の精査を行った。遺構は必要に応じて平・断面の写真撮影、実測を行い記録した。各面の調査の最終として写真測量を実施し、記録した。

調査に先行して掘削したサブトレンチの調査により、第２面および遺物包含層は当初調査対象とした建物本体部分からさらに東側に続くことが判明した。この部分については、基礎工事において機械など

の搬入を行うための掘削を伴い、遺構面および遺物包含層に影響が及ぶことから、追加して調査を行うこととなった。

第2面の調査終了後、立命館大学青木哲哉氏により遺跡周辺の地形について現地において指導を得た。これにより得られた成果については玉稿を賜り、第5章に掲載した。

種　別　本発掘調査
事業名　県営物部住宅建替
事業者　県土整備部住宅建築局
調査期間　平成21年12月21日～平成22年2月26日
調査面積　756㎡
調整担当　企画調整課　小川弦太
総括監督員　調査第1課　吉田　昇
調査担当　調査第1課　渡辺　昇・長濱誠司

第3節　出土品整理作業の経過と体制

遺物整理作業は、調査時に現地において遺物の洗浄を行うことから開始したが、本格的な作業は平成23年度に出土遺物を県立考古博物館に搬入して開始した。

平成23年度

水洗い・ネーミングから報告書刊行までの諸作業を行った。遺物写真撮影は（株）地域文化財研究所に委託して撮影した。また自然科学的分析として、放射性炭素年代測定（AMS測定）、出土土器胎土分析、炭化材の樹種同定を下記の機関に委託して行った。

出土土器胎土分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
炭化材の樹種同定	株式会社パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定（AMS測定）	株式会社加速器分析研究所

出土品整理作業の体制

事務担当　篠宮　正
管理担当　整理保存課　山本　誠・深江秀憲
整理担当　調査第1課　渡辺　昇・長濱誠司
非常勤嘱託員
水洗い・ネーミング：西口由紀・小林陽子
接合・補強・復元：眞子ふさ恵・三好綾子・嶺岡美見・吉村あけみ・佐々木愛・平宮可奈子・吉田優子
実測・トレース・写真整理・遺構図補正・レイアウト：佐伯純子

第２章　遺跡をとりまく環境

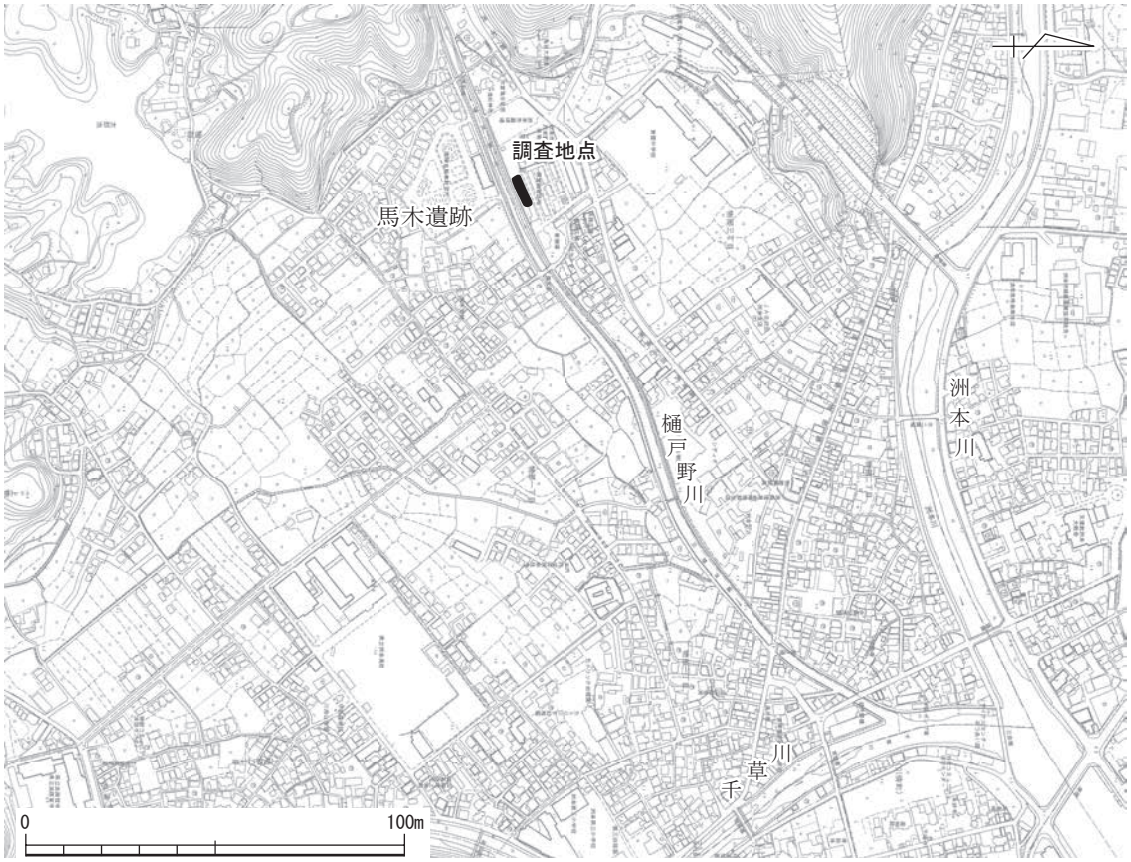
第１節　地理的環境

淡路島は瀬戸内海東部に所在する面積約596㎢の瀬戸内海最大の島である。兵庫県南部に位置し、北は明石海峡、東は紀淡海峡、西は鳴門海峡によって本州、四国と分かたれている。諭鶴羽山地の南端は和泉山脈から四国にかけて東西にのびる中央構造線によって急な斜面となり太平洋に面する。

現在、島内は「平成の大合併」により３市よりなっているが、その中で洲本市は淡路島の政治・経済の中心である。洲本には四国にいたる主要街道である古代南海道、四国街道、今日では国道28号、神戸淡路鳴門縦貫道が通過する。かつては島内唯一の鉄道であった淡路鉄道の起点でもあった。

洲本平野は洲本川沿いに形成され東西に細長くその北西側に先山（標高448m）があり、秀麗な山容から地域の信仰の対象となっている。

調査対象地は洲本市街の西部に位置する。東流する洲本川に支流の千草川が合流する。千草川は洲本市南部の諭鶴羽山地を水源とする竹原川、猪鼻川などと合流し、北流する。洲本川との合流点の手前で東流する樋戸野川と合流する。樋戸野川は本調査対象地と周知の遺跡である馬木遺跡を分断するように流れるが、もとは調査対象地北側の道路が本来の河道であったものを付け替えたものとされる。



第２図　調査位置図

第２節　歴史的環境

旧石器～縄文

島内において旧石器の発見例は少なく、洲本市域では遺跡は知られていない。武山遺跡では縄文前期の土坑と土器が確認され、周囲に集落の存在が想定される。

弥生時代

前期では武山遺跡が知られ、前期前半の土器が出土している。波毛遺跡では土坑から中段階頃の甕が出土した。下内膳遺跡では前期末の溝を検出、多条沈線化した壺・甕が出土する。下加茂遺跡では前期の水田が検出された。

中期に入ると遺跡の分布は拡大する。武山遺跡ではⅡ期の方形周溝墓が検出されているが、この時期の集落は少ない。下内膳遺跡は中期後半に最盛期を迎える。下加茂遺跡では後半期の円形周溝墓を検出する。寺中遺跡、森遺跡、波毛遺跡でも集落が展開する。

淡路島では青銅器の出土が顕著である。大阪湾型銅戈が旧三原町で、中広形銅剣が旧西淡町で出土している。中でも銅鐸の出土は島内から20口と顕著であり、このうち洲本平野からは３口出土している。その中の１点である中川原出土銅鐸（中川原銅鐸）は菱環鈕式２区横帯文銅鐸である。

中期末から後期初頭に丘陵や山間部に集落が展開する状況が見られる。二ツ石戎ノ前では多くの住居跡が検出され、住居内から石杵など赤色顔料の消費に関連する遺物が出土した。中川原銅鐸出土地とは至近距離にあり両者の関連が指摘される。

後期初頭の集落としては大森谷遺跡、中津原遺跡などがあり、丘陵上や狭い尾根上に立地するいわゆる高地性集落である。これらの集落は短期間で断絶し、後期を通じて存続するものはない。下内膳遺跡では小区画水田などの遺構が検出されている。

古墳時代

前期古墳としては、洲本側下流域に所在するコヤダニ古墳、宇山牧場古墳があるのみである。コヤダニ古墳からは三角縁三神五獣鏡が出土、宇山牧場１号墳からは五朱銭、素文鏡が出土する。これら古墳に続く中期の古墳は現状では確認されておらず、首長墓的な大型古墳もみられない。後期に入ると横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築造される。群集墳としては下加茂岡古墳群があるのみで他に大規模な群集墳はみられない。また古墳の分布も疎らである。曲田山古墳は島内最大規模の石室を有する。このような古墳の少なさは島内全般の傾向であるが、近年発掘調査により未周知の古墳が検出される例があり、今後この状況は変わるかもしれない。

集落遺跡は、前期では下内膳遺跡、中～後期では森遺跡がある。山下町居屋敷遺跡は後期の製塩遺跡である。

１．**馬木遺跡**　２．脇遺跡　３．武山遺跡　４．亀谷山遺跡　５．尾崎遺跡　６．下加茂遺跡　７．下加茂岡古墳　８．下加茂岡遺跡　９．下加茂岡古墳群　10．コヤダニ古墳　11.二ツ石戎ノ前遺跡　12.中川原遺跡（銅鐸出土地）　13.三木田池遺跡　14.清間遺跡　15.西の下遺跡　16.大谷遺跡　17.毛次遺跡　18.由良木遺跡　19.中津原遺跡　20.曇華池遺跡　21.西の森遺跡　22.下内膳遺跡　23.大森谷遺跡　24.尾筋丸山遺跡　25. 尾筋岡遺跡　26.向上遺跡　27.ハタ遺跡　28.森遺跡　29.大西遺跡　30.寺中遺跡　31.波毛遺跡　32.桑間ナカダ遺跡　33.太郎池遺跡　34.深田遺跡　35.丁遺跡　36.中村遺跡　37.曲田山古墳　38.居屋敷遺跡　39.山下町遺跡　40。山下町居屋敷遺跡

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
2000m

第３図　周辺の遺跡

古代

律令期に入ると淡路島は淡路国として南海道に編入される。南海道は、詳細なルートは不明であるが、和歌山から洲本市由良付近に上陸し、南淡路市福良を経て四国にいたるルートが想定される。下内膳遺跡は官衙的な遺構・遺物が出土し駅家の可能性が指摘されている。また洲本市周辺では須恵器生産も行われる。

参考文献

兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』　2011年

兵庫県教育委員会『大森谷遺跡』　1985年

兵庫県教育委員会『森遺跡』　1988年

兵庫県教育委員会『下内膳遺跡』　1996年

兵庫県教育委員会『波毛遺跡　川添遺跡』　2000年

兵庫県教育委員会・洲本市教育委員会『二ツ石戎ノ前遺跡』　2003年

兵庫県教育委員会『中津原遺跡』　2003年

兵庫県教育委員会『下加茂遺跡Ⅱ』　2009年

兵庫県教育委員会『下加茂遺跡』　2010年

第３章　調査の結果

第１節　基本層序

調査区は全域にわたって住宅建設に際しての盛土が１ｍ弱の厚さで行われている。盛土前は水田であり、断面観察では少なくとも２面の耕土・床土層が確認できる。このうち下層の水田は中世までさかのぼる可能性がある。調査区中央には弥生時代の河道があるが、水田化される中世までは凹地として残存している。東半部は地形が１段下がりその境界付近に野井戸が掘り込まれる。西半部では弥生土器とともに須恵器を包含する遺物包含層（５層）がほぼ水平に堆積する。調査区全域に堆積する６層の直上が第１面となる。

この面は出土遺物から、弥生時代中期後半から中世に相当するものと考える。西半部には６層の下に弥生土器のみ包含する遺物包含層（７層）があり、その下層の第14層は水平な堆積をみせ、その直上が第２面となる。ただし遺構検出は土壌化層をやや削り込んで行っている。遺構面は西から東へ傾斜をもつ。東半部は堆積が不安定となり、炭粒が混じるシルト層（22・23・25層）の直上が14層上面に対応するものと考える。なお東半部の第２面検出面は28層直上である。第２面は出土遺物から、弥生時代前期に相当すると考える。

第２面以下となる15・22・23・25層には炭粒とともに弥生土器片を包含している。これ以下の層には土壌化が認められる堆積層はあるものの、遺物の出土はなく、生活域として利用されなかったと推定する。

第２節　第１面

１．概要

検出した遺構は、柱穴列、土坑、溝、河道などである。

柱穴列や土坑はＳＲ001より西にまとまり、遺物の出土も多いが、住居などの遺構は検出していない。ＳＲ001の東側では中世以降の野井戸と思われる遺構（SE001～004）や水田に伴うと考える複数の鋤溝を検出した他は、遺構は疎らである。SE001～004は南東から北西方向に並び、鋤溝も同方向にのびる。これらの遺構の所属時期は、出土遺物がなく明確ではないが、埋土の状況などから中世と推定する。

２．遺構

溝

ＳＤ001

調査区西半で検出した。ＳＤ013も同一の溝と考えられる。その場合本溝はＳＲ001が埋没した後に掘り込まれる。南半部は東西方向にのび、調査区西端付近で北側に屈曲する。さらに調査区北端で東側へ向きを変える。幅２ｍ、検出面からの深さ15㎝である。断面形は逆台形を呈する。

ＳＤ002

南北方向にのびる。南側はＳＤ001に合流し、北側は調査区内で消滅する。検出長は2.6ｍである。検出面からの深さは５㎝程度であり断面は逆台形を呈する。埋土はラミナ状を呈する。

ＳＤ003

ＳＲ001西側に所在する。南北方向にのび、両端ともに調査区内で消滅する。検出長は1.5ｍである。検出面からの深さは３㎝を測る。

ＳＤ004

調査区西半部で検出した。南半はＳＤ001と切合い、または分岐する。幅60㎝、検出面からの深さ５㎝である。

ＳＤ009

調査区東半部に位置する南北方向にのびる溝である。埋没後に鋤溝が掘り込まれる。検出面からの深さは３㎝程度と浅く、断面は皿状を呈する。

ＳＤ013

調査区西半で検出した。ＳＤ001も同一の溝と考えられ、ＳＲ001の埋没後に掘り込まれる。東西方向にのびる。幅65㎝、検出面からの深さ10㎝を測る。断面は皿状を呈する。

土坑

ＳＫ001

調査区北西隅で検出した。柱穴と重複し、本遺構が切られる。平面は南北に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.2ｍ、短径0.95ｍを測る。断面は台形を呈する。黒褐シルト質極細砂を埋土とし、埋土内には土器片を包含する。

ＳＫ002

調査区中央付近で検出した。ＳＲ001、ＳＤ013と重複し、本遺構がこれらを切っている。平面は東西方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.75ｍ、短径0.65ｍを測る。検出面からの深さは10㎝であり、断面は皿状を呈する。

ＳＫ003

調査区西半部で検出した。ＳＤ001に南接しその一部である可能性がある。平面は東西に主軸をもつ不整方形を呈し長さ1.6ｍ、幅0.8ｍを測る。検出面からの深さは６㎝を測り断面は皿状を呈する。

ＳＫ004

ＳＲ001西側に位置し、ＳＫ003に東接する。平面は南北に主軸をもつ楕円形を呈し、南北80㎝、東西70㎝を測る。検出面からの深さは５㎝であり、断面形は皿状を呈する。

柱穴列

ＳＡ001

調査区南西隅で検出した。1.8ｍの距離をおいて２基の柱穴が並ぶ。柱穴は平面が不整な円形を呈する。掘方の規模は径50㎝を測る。黒褐系の極細砂またはシルト質極細砂を埋土とし、検出面からの深さは40㎝である。断面形はU字状を呈する。柱穴列としたが調査区の制約から遺構の全容や規模は明らかにしえない。

河道

ＳＲ001（上層）

調査区中央で検出した。南北方向にのび、両端ともに調査区外へ続く。幅７ｍ、検出面からの深さは

25㎝である。埋土最上層（最終埋土）には須恵器片も包含する。

第３節　第２面

１．概　要

検出した遺構は、土坑、溝、河道などである。

土坑はＳＲ001東肩より西側にまとまり、遺物の出土も多いが、住居などの遺構は検出しておらず、分布も疎らである。調査区東半部では溝を検出したのみである。

２．遺　構

溝

ＳＤ201

調査区東半部の南壁際で検出した。攪乱や調査区の制約で全容は明らかにしえないが、南北方向にのび、北側は調査区内で終結する。グライ化したシルトを埋土とし、上層には炭粒が少量混じる。幅45㎝、検出面からの深さは20㎝である。

ＳＤ202

調査区東半部の南壁際で検出した。ＳＤ201東側に位置し並列する。南側は調査区外へ続き、北側は調査区内で終結する。幅80㎝、深さ30㎝である。埋土には炭粒が混じる。

ＳＤ203

ＳＲ001東側に位置する。ＳＸ203から東側へのびる。幅1.5ｍ、深さ0.8ｍを測り断面は逆台形状を呈する。埋土の中層はラミナ状を呈し、炭粒が多く混じり、土器を包含する。また下層も炭粒が少量混じり有機物を含む。

ＳＤ204

調査区東半部に位置する。調査区の制約により全容は明らかにしえないが、平面はＬ字状にのびる。東端は調査区内で消滅するが、その延長上に溝状のくぼみが残存し、本来はさらに東側にのびると推定する。東西方向の部分は幅1.4ｍ、深さ20㎝、南北部分は幅0.6ｍ、深さ25㎝をを測る。砂混じりのシルトを埋土とし炭粒と土器を包含する。南北方向部分の断面観察では、本遺構埋没後噴砂により埋土が断ち切られている状況を見ることができた。

ＳＤ205

調査区南東隅で検出した。検出長は約３ｍで南北方向にのび、南側は調査区外へ続く。北側は調査区内で終結しているが、さらにその延長上に不定形な溝があり、さらに北側へ続くものと考える。ＳＤ204とは重複する可能性があるもののその先後関係は明らかにしえない。幅55㎝、深さ40㎝を測り断面は逆台形を呈する。

ＳＤ206

調査区調査区南東隅で検出しＳＤ205と並列する。ＳＤ205同様南側は調査区外へ続き、北側は調査区内で終結するが、さらに北へのびる可能性がある。幅75㎝、深さ12㎝を測る。断面は逆台形を呈する。

土坑

ＳＫ201

調査区北西隅で検出した。東西方向に主軸をもつ長楕円の溝状を呈する。検出長4.5m、幅1.15～1.25mを測る。縦断面は皿状、横断面はU字状を呈する。埋土は炭・灰混じりで出土した。中・下層に2面の炭層が確認できる。多量の土器片や炭化材が出土した。土器はいずれも破片で出土した。完形の状態のものはなく、完形に復元しうるものもない。

ＳＫ204

調査区西半部で検出した。平面は南北に主軸をもつ不整な長楕円形を呈する。長径4.4m、短径1.2mを測る。検出面からの深さは4㎝であり断面は皿状を呈する。

ＳＫ205

調査区西半部で検出した。平面は東西方向に主軸をもつ不整な長楕円形である。長径2.7m、短径1.5mを測り検出面からの深さは10㎝である。断面は皿状を呈する。埋土内には土器片を包含する。

ＳＫ208

ＳＲ01東岸で検出した。平面は南北に主軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は長径1.3m、短径0.6mを測る。検出面からの深さは15㎝を測り断面はU字状を呈する。埋土上層は炭粒が混じり土器片を包含する。

ＳＫ209

ＳＲ01東岸で検出した。平面は東西に主軸をもつ長楕円形を呈する。規模は長径1.7m、短径0.7mを測る。検出面からの深さは10㎝を測り断面は皿状を呈する。埋土上層は炭粒が混じり、西半には土器片を包含する。

ＳＫ210

調査区東半部で検出した。ＳＫ211と並び平面は東西に主軸をもつ長楕円形を呈する。規模は長径1.3m、短径0.8mを測る。検出面からの深さは8㎝を測り断面は皿状を呈する。埋土上層は中砂とともに炭粒が混じり、下層には灰白細砂が混じる。

ＳＫ211

調査区東半部で検出した。ＳＫ210と並び、平面は南北に主軸をもつ楕円形を呈する。規模は長径1m、短径0.8mを測る。検出面からの深さは15㎝を測り断面はU字状を呈する。埋土上層は粗砂とともに炭粒が混じる。

ＳＫ212

調査区東半部で検出した。ＳＫ213と並び平面は南北に主軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は長径0.85m、短径0.7mを測る。検出面からの深さは15㎝を測り断面はU字状を呈する。埋土上層は少量の粗砂とともに炭粒が混じる。

ＳＫ213

調査区東半部で検出した。ＳＫ212と並び平面は東西に主軸をもつ不整楕円形を呈する。規模は長径1.05m、短径0.95mを測る。検出面からの深さは10㎝を測り断面はU字状を呈する。埋土下層には炭化物が多く混じる。

落ち込み

ＳＸ201

ＳＲ001東岸で検出した不整形の落ち込みであるが調査区の制約により全容は明らかでない。検出面

からの深さは10㎝程度である。断面は浅い皿状を呈し、底部は起伏する。

ＳＸ202

調査区北東半部で検出した。南西から北西方向にのびる溝状を呈するが、調査区の制約により全容は明らかではない。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは15㎝を測る。

ＳＸ203

ＳＲ01東岸で検出した不整形の落ち込みである。平面は不整な溝状を呈し、東側はＳＤ203となるが、本来は一体のものであろう。検出面からの深さは25㎝程度である。東半は遺構面からなだらかに傾斜する。埋土は炭粒が混じり、上層に土器を包含する。

河道

ＳＲ001（下層）

調査区中央付近を南北に延びる。南北両側ともに調査区外へ続く。幅５ｍ、検出面からの深さは１ｍである。埋土は細砂からなる上層、ラミナ層の中層、シルト層と砂層の下層に大別できる。うち最上層および中層には土器を包含する。特に中層には残存状況のよい土器を多量に包含している。また下層からは土器の出土はみないが、流木などの自然遺物を多量に包含している。

第４章　出土遺物

第１節　土　器

１．第１面出土土器

第１面の包含層からの遺物の出土はほとんどなく、遺構出土の遺物も大半は旧河道（SR001）からのものである。それ以外の遺構からの出土は、SK001とSD001などの８点である。これらはすべて弥生土器である。

遺構出土土器（１～８）

1 はSK001出土の甕底部である。平底から外傾する体部になるが、磨滅している。内面は灰でﾅﾃﾞ仕上げ、外面は浅黄橙で細砂含む。

2 はSD001出土の壺底部である。底面の３分の１が残存しており、中央部を欠いている。平底から外傾する体部に続く。比較的緩やかで大形壺になる。器表は磨滅しており、内面は灰白、外面は橙、器肉は灰褐を呈しており、細砂多く含む。

3 はSD001出土高杯筒部である。僅かに外反ぎみのもので外面は全体に凹線になっている。現状で14条認められるが、すべてであろうかと思われる。上は杯部との接合部で、粘土塊の継ぎ目が見られる。下も裾部に開きかかっている。内面橙、外面にぶい橙である。内面には絞り目が見られ、下側はﾅﾃﾞ調整を行う。

4 はSD005出土長頸壺口縁部である。破片の一部がSD001からも出土している。稜線を持たない頸部は緩やかに湾曲し外傾する口縁部となり、端部は内外特に内側につまみ出すように肥厚している。端面は凹線が施されていたかもしれない。内面は縦方向のﾊｹ整形で端部周辺は横方向のﾊｹ整形ののちﾖｺﾅﾃﾞで仕上げる。内外とも浅黄を呈し細砂含んでいる。

5 はSD005出土甕口縁部である。外反しており、端部は角張っておりやや内側に肥厚している。頸部は丸く稜線を有さない。体部内面はﾊｹ整形で、他はﾖｺﾅﾃﾞ仕上げである。口縁部を折り曲げて作っている。内面にぶい黄橙、外面灰黄褐～灰で細砂含んでいる。

6 はSD005出土壺底部である。*4* の長頸壺の底部かもしれない。平底から緩やかに内湾している。灰～にぶい黄橙で細砂含んでいる。*4* 同様破片の一部がSD001から出土している。表面磨滅顕著で底部に黒斑が認められる。

7 はSD007出土の水差し形土器である。底部を欠いている。球形の体部上半で外面はﾊｹ整形で、内面には粘土紐継ぎ目が見られる。肩部に断面方形の把手が横方向に付いている。口縁部は直線的に広がっており、端部近くで４条の凹線が施されている。端部は四角になる。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙～浅黄橙で砂粒含んでいる。表面磨滅している。

8 もSD007出土土器で高杯裾部である。長い筒部は広がり外反するが、余り径は大きくならない。端部は丸く、径12.6㎝と小さく。残存高は14㎝と背の高い製品である。色調はにぶい橙で砂粒を少し含んでいる。内面には絞り目が見られ、下半は板ﾅﾃﾞで下げ裾端部周辺はﾖｺﾅﾃﾞ仕上げである。端部上に１条の凹線が認められ、外面は縦方向のﾍﾗﾐｶﾞｷで整えられている。裾部には３方透孔の円孔が存在する。

遺構の弥生土器は一部後期を指向する要素もあるが、全体的に中期後半のなかでも中期末と捉えられる。*3* の高杯筒部などは新しい要素がなく中期後半と考えられる。

SR001出土遺物（9～75）

遺構の堆積状態から上下2面に分けて調査を行い、出土遺物も各面で分けて取り上げている。*9～27*までは第1面検出として取り上げたものである。その後、第2面で下層として取り上げたものが*8～75*である。

第1面で図化したもののうち須恵器3点は最終埋土中から出土したものである。それ以外の遺物はすべて弥生土器である。

*9～11*は須恵器である。*9*は甕口縁部で外反し折り曲げて面にしている。内面灰オリーブ、外面灰白で全体に自然釉がかかっている。ﾛｸﾛﾅﾃﾞで細砂僅かに含む。*10*は壺底部で、断面方形のやや外に広がる高台が付き、平底から外傾する体部になる。比較的緩やかに広がっているので大きめのものになりそうである。高台貼付のﾅﾃﾞ以外はﾛｸﾛﾅﾃﾞで、高台内側に工具痕見える。青灰で細砂含む。*11*は外反する体部で波状文と2条の沈線が施される。灰を呈しﾛｸﾛﾅﾃﾞで、**瓶**であろうか。

*12～15*は後期の弥生土器である。*12*は小さな平底から倒卵形の体部になり、くの字口縁で頸部内面の稜線鋭く口縁部外反し端部角張る。外面はにぶい橙～灰白でﾀﾀｷ成形である。最大腹径までは右上がりから水平方向のﾀﾀｷを行い、この部分で分割成形している。上半は水平方向のﾀﾀｷである。内面は灰で磨滅しているが下半は工具痕が残り板ﾅﾃﾞである。口縁部はﾖｺﾅﾃﾞで仕上げている。底部と肩部に黒斑が認められる。底面はﾅﾃﾞ仕上げで不安定な平底でドーナツ状になっている。*13*は甕口縁部の小片でくの字に外傾する口縁部の外側に肥厚させ、端面に2条の凹線を施している。ﾖｺﾅﾃﾞで、体部内面はﾅﾃﾞである。内面褐灰、外面灰白で砂粒含んでいる。*14*は内傾する体部から外反する口縁部の甕で端部はﾊﾞﾁ形になる。口縁部折り曲げて作っており、色調は浅黄橙で砂粒少し含む。体部内面はﾍﾗｹｽﾞﾘ、外面はﾊｹ整形、口縁部はﾖｺﾅﾃﾞである。ﾖｺﾅﾃﾞによって端面中央は凹んでいる。*15*は甑で小さな平底中央に焼成前に内外から穿孔している。体部は内湾ぎみに延びており、内面はﾕﾋﾞ成形から板ﾅﾃﾞ、外面はﾀﾀｷである。鉢に近い形態かもしれない。*12・15*の2点は後半期のもので新しい。

*16～27*は中期の土器である。*16*は底部で高台状になっている。外傾する体部で外面はﾐｶﾞｷか。底には木葉痕があったかもしれない。にぶい黄橙で砂粒含む。*17～20*は壺である。*17*は外傾する口縁部で端部内外に肥厚するものと思われるが上端を欠く。ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げで内面橙、外面灰白である。端面に円形の痕跡があり円形浮文が付いていた可能性が高い。*18*は外反する口縁部で端部肥厚する。ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げで端面に1条の凹線がある。灰白を呈し外面はﾐｶﾞｷ。*19*は内傾する肩部から直立する頸部になり肩部にﾍﾗ先刺突文が施されている。にぶい黄橙で外面はﾊｹ整形である。*20*は直口壺でﾊﾞﾁ形に広がっている。2条の貼付突帯を付け口唇部も含めて刻み目が巡らされている。外面は橙、内面はにぶい黄橙でﾖｺﾅﾃﾞ仕上げ。*21*も直口壺口縁部で外傾し端部角張る。2条の凹線を有しﾖｺﾅﾃﾞである。鉢かもしれない。内面にぶい黄橙で外面黄灰～黄白である。*22*は甕底部で平底から内湾する。灰を呈し、外面ﾐｶﾞｷである。底面はﾅﾃﾞで黒斑がある。*23*は壺底部で平底から外傾している。内面暗灰、外面にぶい黄橙でﾅﾃﾞ仕上げである。外面だけﾐｶﾞｷが施されているかもしれないが、磨滅している。*24*は外反する器台で両端を欠いている。径4㎝以上の円孔があり、3方と思われる。15条以上の幅広い凹線が全体に認められる。赤色顔料塗布されている。*25*は高杯筒部で円板充填である。灰白で内面には絞り目が見られる。26は高杯脚部で外反し端部肥厚している。筒部に近い位置に径5㎜前後の円孔が2個1対で焼成前に開けられている。端部内側に小さなﾍﾗ先刺突文が巡っている。内面は灰黄褐～にぶい橙、外面はにぶい黄橙～赤橙で砂粒少し含んでいる。内面は絞り目があり、外面は磨滅しているがﾐｶﾞｷと思われる。*27*は高杯で裾部は

低く外傾し筒部は直に延びる。橙～浅黄橙で砂粒少し含む。筒部には4方透孔の円孔があり、内面には絞り目あり、ﾅﾃﾞ仕上げ。外面は磨滅しているが、ﾐｶﾞｷと思われ赤色顔料を塗布している。裾部は内外面ﾊｹ整形で円孔が5個認めら、黒斑がある。灰部は外傾するが、底は残っていない。

第2面で調査して図化したものは38点で、すべて弥生土器である。

28～*40*・*43*は壺口縁部である。*28*は外反し端部肥厚している。端面に4条凹線があり、にぶい橙である。*29*は外傾し端部下側に肥厚させ、端面には2本の凹線を描き、上に竹管文の付いた円形浮文を加える。剥がれた痕跡があり、全周せず離れて付加したようである。にぶい黄橙で内外面ともﾐｶﾞｷで仕上げ、端部周辺はﾖｺﾅﾃﾞである。*30*は外傾し端部肥厚する。3条凹線があり、竹管文を持つ円形浮文を付ける。1個のみ残存しており単位不明である。内面灰黄、外面にぶい黄橙でﾖｺﾅﾃﾞ仕上げ。*31*は外反する口縁部で端部がやや垂れており肥厚する。端面には3条凹線で円形浮文が付く。灰黄で砂粒少し含んでいる。内面はﾐｶﾞｷ、端部はﾖｺﾅﾃﾞである。*32*は直立する頸部から外反し端部内外に肥厚している。端面中央に凹線があったようであるが磨滅している。にぶい橙で、端部はﾖｺﾅﾃﾞで内外はﾐｶﾞｷである。*33*は大きく外反し下方につまみ出すもので下端は尖っている。端部は丸く面にならず上下2段に細い刺突文を施す。内面にぶい赤橙、外面褐灰を呈する。*34*は外反する長い頸部から直立して面をなす口縁部となる。端面には3条の凹線があり、端部角張る。内外面とも粗いﾐｶﾞｷで仕上げる。内面は橙、外面はにぶい黄橙である。*35*は外反する頸部から屈曲して直立する口縁部になり端部角張る。1条の幅の広い凹線がありその下に幅の広い刺突文を巡らす。ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げで色調はにぶい黄橙、細砂多く含む。*36*は外傾してから端部近くで外反し端部肥厚している。頸部には突帯を付け、端面には波状文が施される。灰白～黄灰を呈し、外面はﾊｹ、内面はﾅﾃﾞ、端部周辺はﾖｺﾅﾃﾞである。*37*は外反する口縁部で端部内外に肥厚する。外面ﾊｹ、内面ﾅﾃﾞで端面には2条凹線ありﾖｺﾅﾃﾞ仕上げ。にぶい橙で、細砂含む。*38*は外傾しさらに広がり端部肥厚する。端面下半には凹線3条あり、上には竹管文を配するが数個単位で全周しない。橙で細砂少し含み、端部周辺はﾖｺﾅﾃﾞ、外面はﾐｶﾞｷである。*39*は外反し端部肥厚ぎみに角張り、端面に1条の凹線がある。内面は橙で、外面はﾊｹ整形でにぶい橙である。*40*も外反し端部角張る口縁部で端面に凹線1条ある。表面剥離顕著で浅黄橙を呈する。*43*も外傾し端部角張るもので3条凹線がある。ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げで内面はﾐｶﾞｷの可能性がある。内面はにぶい黄橙で外面は橙～暗灰黄で細砂多く含む。

41・*42*は壺頸部である。*41*は外傾しており、にぶい黄褐を呈する。角閃石含み搬入品かと思われる。42は外反する頸部から緩やかに肩部に続き、肩部に大きな刺突文を施す。にぶい黄橙で砂粒少し含む。

44～*49*は文様片である。*44*は外傾し頸部近くに2条突帯を置き、その上に2本の棒状浮文を付加している。肩部に向かって波状文―直線文―波状文と装飾している。内面褐灰、外面橙で赤色顔料塗られている。*45*は刻み目を有する3条突帯が巡った内湾ぎみの体部である。内面は灰でﾊｹ整形、外面は浅黄橙で砂粒少し含む。*46*は外反する頸部で幅広の突帯に指頭圧痕を付けて文様にしている。浅黄橙で外面はﾊｹ整形である。*47*も頸部で3条突帯を付け棒状浮文が2個付いている。橙で砂粒少し含む。*48*は内湾する体部から外反する頸部で、幅広の刺突文を巡らせている。内面は灰でｹｽﾞﾘ、外面はにぶい橙で上はﾖｺﾅﾃﾞ、下はﾅﾃﾞである。*49*は指頭圧痕を付けた突帯を有する頸部で、内面はにぶい橙、外面はﾅﾃﾞ仕上げで橙である。

*50*は壺口縁部で外反し端部角張る。内外面ともﾐｶﾞｷで頸部に突帯がある。内面灰黄褐、外面黄灰で砂粒少し含む。*51*・*52*は蓋である。*51*の天井部は水平で外傾している。つまみ部周辺のみﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞで他はﾐｶﾞｷである。内面にぶい橙、外面にぶい黄橙で砂粒含む。52のつまみ部は中央が凹んでおり、端

部が突出している。体部はゆるやかに開き裾近くで外反し、端部丸く納め薄くなっている。内面はﾅﾃﾞと思われ、灰白～灰黄褐をしている。外面はﾕﾋﾞｵｻｴからﾅﾃﾞでﾕﾋﾞ痕跡明瞭で橙～にぶい橙を呈する。内面端部周辺には煤と吹き零れと思われる有機質が付着している。

*53*は無頸壺で、内湾する口縁部で端部角張っている。強いﾖｺﾅﾃﾞで3条の凹線のようになっている。下に刺突文があり、色調はにぶい橙で細砂多く含む。台付鉢かもしれない。

54～*58*は甕である。*54*は外反する口縁部で端部肥厚し端面に刺突文を入れる。にぶい橙で外面はﾊｹ整形である。*55*はくの字になり端部肥厚する。頸部に指頭圧痕の付く貼付突帯を回す。橙で砂粒少し含む。*56*もくの字の大形品で端部内外に肥厚し、端面に2条凹線がある。ﾖｺﾅﾃﾞで外面はﾊｹ整形、内面ﾅﾃﾞである。にぶい橙で砂粒少し含む。*57*は内傾する体部から外反する口縁部で端部角張る。頸部内面の稜線は鋭い。内外面ともﾊｹ整形からﾖｺﾅﾃﾞである。にぶい黄橙で砂粒含む。*58*は内湾する体部から外反し端部肥厚する。にぶい橙で内面ｹｽﾞﾘ、外面ﾊｹ整形で口縁部強いﾖｺﾅﾃﾞで端面に凹線2条ある。

59～*67*は底部である。*59*は平底から内湾し大形品である。外面には縦方向のﾀﾀｷがありﾅﾃﾞで仕上げている。底面もﾅﾃﾞで籾痕が見られ、黒斑がある。内面は暗灰黄で板ﾅﾃﾞである。外面は灰黄で砂粒含む。*60*は不安定な突出平底から外反する。底部周辺には指頭圧痕が見られ、黒斑がある。内面はにぶい橙でﾅﾃﾞ、外面は灰黄でﾅﾃﾞである。*61*は焼成後に穿孔された可能性があり、平底から外傾する。橙で磨滅しており、砂粒僅かに含む。*62*は僅かな上げ底から内湾し、外面は右上がりのﾀﾀｷ、内面は板ﾅﾃﾞ、底面はﾅﾃﾞである。橙で砂粒少し含む。*63*は底面を欠くが平底から外傾し黒斑が認められる。にぶい黄橙で外面はﾀﾀｷ、内面はﾅﾃﾞである。底部成形の指頭圧痕が残る。*64*は焼成前に穿孔されており甑である。平底から外傾し黒斑がある。外面はﾀﾀｷで上下に1本のｸｼ描きがあり、記号であろうか。内面は粗いﾊｹ整形で貝殻施文の可能性がある。にぶい黄橙で砂粒少し含む。*65*は低い脚台を有する底部で外側に開いている。ﾕﾋﾞ成形で脚台を作り、高台周辺はﾅﾃﾞで仕上げる。内面は暗灰でｹｽﾞﾘ、外面はにぶい黄橙でﾅﾃﾞ。強く被熱している。*66*は突出平底から外傾している壺で底面はﾊｹからﾅﾃﾞで籾痕が見られる。側面には再成形の指頭圧痕があり、内面はﾅﾃﾞである。橙で砂粒少し含む。*67*は上げ底の突出平底から外傾する。底部には黒斑があり、ﾕﾋﾞｵｻｴからﾅﾃﾞ仕上げ。底面には工具痕が見える。内面はﾅﾃﾞで色調は内外ともにぶい黄橙～暗灰である。

68・*69*は製塩土器である。*68*は小さな筒状の脚台で僅かに上げ底になっている。外面にはたたきが認められ、ﾅﾃﾞ仕上げである。橙で砂粒少し含む。*69*は上げ底で底は薄めである。端部は角張り、ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ仕上げである。灰白で砂粒含む。内面に絞り目残る。

71～*73*は高杯である。*71*は外反する脚部で端部角張り、端部上に1条凹線がある。にぶい黄橙で砂粒少し含む。*72*は外反する脚部で端部肥厚している。内面ｹｽﾞﾘ、外面ﾅﾃﾞで4条凹線がある。端部周辺はﾖｺﾅﾃﾞで、にぶい黄橙をし砂粒少し含む。*73*は筒部の細いもので脚台も小さめである。垂下してから外傾し端部は反りぎみに丸い。中空で丁寧に仕上げている。杯部は内湾しており、全体に磨滅している。内面はにぶい黄橙、外面は浅黄橙で、砂粒少し含む。

70・*74*・*75*は器台である。*70*は器台下台部で外傾し、端部角張りやや肥厚する。端面には2条凹線があり、黒斑認められる。体部は直線的で6条凹線があり、にぶい黄橙をしている。磨滅顕著で砂粒少し含む。*74*は外反する上台端部で大形である。端部は肥厚し端面に羽状の刺突文を施す。にぶい黄橙で磨滅しているが、ﾖｺﾅﾃﾞ仕上げであろう。*75*は筒形の器台で上台上半を欠いている。外反し上下2段に円孔を有す。ともに4方透孔で、大きめの孔である、端部は上につまみ上げるように反っている。端部上

に波状文が見られるが磨滅著しい。外面はﾐｶﾞｷで内面はﾅﾃﾞ、色調は赤橙～にぶい黄橙で砂粒少し含んでいる。

２．第２面出土土器

SK201出土遺物（上層76～96　下層97～102）

焼土坑であるSK201は土器が集中して出土している。上層と下層に分けて取り上げたので、それに合わせて報告する。

壺（76～90）

*76*は外反する口縁部で端部は角張る。外面はにぶい黄橙でﾅﾃﾞ、内面から端部にかけてはにぶい褐を呈しﾐｶﾞｷで仕上げられている。砂粒少し含む大形品である。*77*は今回調査資料中、唯一前期壺で全体像がわかる資料である。平底からやや扁平な球形の体部から外反する口縁部で端部は丸い。内面は灰白で磨滅しているがﾅﾃﾞであろう。外面は灰白～淡橙で、ﾊｹ整形からﾐｶﾞｷで仕上げている。肩部に４条ずつの沈線が２帯見られ、頸部にも３条沈線がある。端部下に径５㎜の円孔が焼成前に開けられており、１個しか残存していないが、本来２個あり蓋との接合用のものであろう。砂粒多く含む。*78*は内傾する肩部から短く外反する口縁部で端部は丸い。頸部は大きくすぼまないタイプで３条沈線が認められる。内外面ともﾐｶﾞｷで仕上げられている。内面はにぶい黄橙～にぶい橙で外面は灰白～灰で、砂粒少し含む。黒斑がある。*79*は外傾する口縁部で端部角張る。浅黄橙を呈しﾅﾃﾞ調整で砂粒少し含む。*80*は外反する口縁部で端部一部を欠くが丸いと思われる。内面は浅黄橙でﾅﾃﾞ、外面はにぶい橙でﾊｹ整形、砂粒少し含む。*81*は内湾する体部から直立ぎみの頸部になり、頸部には断面三角形の突帯が付く。灰黄褐で、内面には炭付着しておりﾅﾃﾞ仕上げ、外面はﾊｹ整形からﾐｶﾞｷである。肩部に３条沈線があり、突帯には刻み目が施される。*82*は外反する頸部に断面三角形の突帯が付き上に刻み目を行う。外傾し端部近くで外反し端部角張る。端部下端にも刻み目を施し、端部周辺はﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞである。にぶい黄橙で砂粒少し含む。ﾊｹ整形ののち、口縁部内面と体部外面はﾐｶﾞｷで仕上げる。*83・84*は似たタイプの壺で同一個体かもしれない。外反する口縁部で端部は肥厚ぎみに丸い。内面に突帯を有するが、*84*は２ヶ所に突帯が付き波状になっている。橙で砂粒少し含んでいる。*85～90*は壺底部である。すべて砂粒少量含んでいる。*87・90*には焼成後の穿孔が底面に認められる。85は平底から外反し、にぶい黄橙で外面はﾐｶﾞｷである。底面はﾅﾃﾞ。*86*は平底であるが部分的に上げ底にもなっている。内湾する体部に続き、ﾊｹ整形から内外面ともﾐｶﾞｷで仕上げる。内面は灰、外面はにぶい黄橙。*87*は平底から外傾する。内面は黄灰で板ﾅﾃﾞ、外面はにぶい黄橙～灰でﾊｹ整形からﾐｶﾞｷ、底面は強いﾅﾃﾞで黒斑がある。*88*は平底から外傾し、内面は板ﾅﾃﾞで、外面はﾅﾃﾞからﾐｶﾞｷ、底はﾅﾃﾞである。にぶい黄橙で黒斑が認められる。*89*は上げ底から外傾する。内面暗灰で板ﾅﾃﾞ、外面はにぶい褐～灰褐でﾐｶﾞｷ、底面ﾅﾃﾞである。内面には炭化物が付着している。*90*はにぶい黄橙で平底から外傾する。内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、底面ﾅﾃﾞである。

甕（91～96）

*91*は内湾する体部から短く外反する口縁部で端部は丸い。内面はにぶい黄橙～にぶい赤褐で磨滅している。ﾅﾃﾞであろうか。外面は褐灰でﾊｹ整形、口縁部はﾅﾃﾞで端部に刻み目が施される。*92*は直立ぎみの体部から短く大きく外反する口縁部である。端部は丸く刻み目が見られる。にぶい黄橙でﾊｹ整形からﾅﾃﾞている。２条沈線があり、さらに下にも存在したかもしれない。砂粒少し含む。*93*は緩やかに内湾する体部から短く外傾する口縁部で端部丸く刻み目を有する。端部下に１条の沈線、肩部に４条の沈線があ

る。内面は板ﾅﾃﾞ、外面はﾊｹ整形である。にぶい黄橙で外面の一部は褐灰で砂粒少し含む。*94*は直立する体部から短く外反する口縁部で端部は丸く刻み目を施す。ﾅﾃﾞ仕上げで3条沈線がある。にぶい黄橙で磨滅顕著。*95*は直立する体部から短く外傾する口縁部。端部下端には刻み目を入れ、内面にかけてﾅﾃﾞ調整である。外面はﾊｹ整形からﾅﾃﾞで3条沈線がある。にぶい黄橙で砂粒含む。*96*は全体像のわかる甕である。平底から内湾し肩部付近で直立し短く外傾する口縁部になる。端部は角張り刻み目を入れる。肩部には3条沈線があり、底面は欠損しているが焼成後に破砕もしくは穿孔された可能性がある。外面下半はﾊｹ整形で内外面とも板ﾅﾃﾞで仕上げている。灰黄褐～褐灰で砂粒少し含む。

下層出土遺物（*97*～*102*）

97～*99*は壺で*100*～*102*は甕である。*97*は外反する口縁部で端部は丸い。内面に文様となる突帯を巡らす。橙で砂粒少し含む。磨滅している。*98*は波状口縁の小形品である。端部はﾕﾋﾞｵｻｴによって波状にしており、端部下に蓋と結着するための小円孔が穿たれている。頸部には3条沈線が認められる。内面は灰黄褐でﾐｶﾞｷ、外面はにぶい黄橙で縦方向の粗いﾐｶﾞｷを施している。焼成良好でやや古相を示す土器で西側からの影響を受けた土器である。*99*は内湾する体部で頸部近くまで残存している。頸部近くに2条沈線があり、その下に断面方形の突帯が1条付ける。突帯は上面をﾕﾋﾞｵｻｴによって文様化している。にぶい黄橙～にぶい橙で外面はﾊｹ整形からﾐｶﾞｷ、内面はﾅﾃﾞである。*100*は内傾する体部から短く外傾し端部丸い。端部には刻み目を施し肩部には3条沈線が見られる。内面はにぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面は灰白～灰でﾊｹ整形からﾅﾃﾞで端部近くはﾐｶﾞｷも見られる。*101*は内湾する体部で黒を呈している。内面はﾅﾃﾞ、外面はﾊｹ整形からﾅﾃﾞで4条沈線がある。*102*も内湾する体部で内面にぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面灰でﾊｹ整形からﾅﾃﾞで2条沈線を施す。黒斑が認められ、砂粒を少し含んでいる。

上層と下層で明瞭な時期差は認められなかった。

SK208出土遺物

*103*は平底から内湾する体部に続く。浅黄で砂粒多く含む。内面の表面は凹凸がありﾅﾃﾞ仕上げ、外面・底面はﾐｶﾞｷで黒斑がある。

SK210出土遺物

*104*は内湾すら体部から短く外反する口縁部で端部は丸く納め刻み目が施される。内面灰黄褐でﾅﾃﾞ、外面にぶい黄橙～灰を呈しﾊｹ整形で肩部に沈線が2条ある。砂粒少し含み、黒斑認められる。

SK205出土遺物（*105*～*117*）

105～*108*は壺、*109*・*110*は甕、*111*～*117*は底部である。*105*は外反する口縁部で端部は丸い。橙で頸部には4条の沈線がある。磨滅しており、砂粒少し含んでいる。*106*は内傾する体部から短く外反する口縁部で端部角張る。肩部下に4条、頸部に3条の沈線がある。内外面ともにﾐｶﾞｷで仕上げられており、浅黄橙で砂粒少し含む。*107*は外反する口縁部で端部は丸い。頸部に沈線2条あり、内面はﾐｶﾞｷである。内面にぶい橙、外面橙で砂粒少し含む。*108*は内湾する体部で肩部に3条の沈線がある。内面灰でﾅﾃﾞ、外面板ﾅﾃﾞでにぶい黄橙。*109*は内湾ぎみに直立する体部から短く外傾する口縁部で端部は肥厚ぎみに丸い。端部には刻み目が巡らされる。内面にぶい黄橙、外面褐灰で、全体にﾅﾃﾞである。*110*は内湾する体部から短く外反する口縁部で端部角張り刻み目を有する。灰褐～にぶい橙で内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹである。*111*は平底から内湾する。内面にぶい黄橙、外面にぶい橙～灰褐でﾐｶﾞｷ、底ﾅﾃﾞである。*112*は平底から外傾する。内面にぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面灰黄褐でﾐｶﾞｷ。*113*は平底から内湾ぎみに延びる。内外面ともにﾐｶﾞｷでにぶい黄橙である。*114*は上げ底ぎみから外傾する。内面橙、外面褐灰でﾐｶﾞｷである。

*115*は上げ底から外傾し器表に凹凸がある。にぶい黄橙で外面はﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞである。*116*は平底から外傾する。にぶい黄橙で外面はﾐｶﾞｷ、内面・底面はﾅﾃﾞである。*117*は平底から外傾する。全体に磨滅顕著で砂粒多く含む。内面灰白、外面にぶい黄橙である。

SD202出土遺物

*118*は甕である。直立する体部から短く大きく外反する口縁部で端部尖りぎみ。頸部に2条沈線あり、にぶい黄橙～灰黄褐を呈する。

SD205出土遺物（*119*～*121*）

*119*は内傾する体部から短く外反する口縁部になる甕である。端部は丸く刻み目がある。肩部には5条沈線があり、内外面ともにﾅﾃﾞ、にぶい黄橙～褐灰である。*120*は蓋で外傾しており端部は上へつまみ上げている。端部周辺には煤が付着している。内外面ともにﾐｶﾞｷで、内面はにぶい褐～褐灰、外面にぶい橙である。*121*は大形壺底部で平底から外傾している。灰で内面はﾐｶﾞｷである。粘土の接合痕が看取される。接合面にもﾅﾃﾞ認められる。

SD208出土遺物（*122*・*123*）

2点とも壺底部である。*122*は平底から外傾し、内外面ともにぶい黄橙でﾐｶﾞｷである。*123*は平底から外反する体部である。底面はﾅﾃﾞで籾痕が見られる。内面は灰黄でﾅﾃﾞ、外面は黄灰～灰褐でﾐｶﾞｷ、黒斑認められる。砂粒少し含む。

SD203出土遺物（*124*～*133*）

124～*127*は壺、*128*～*130*は甕、*131*～*133*は底部である。*124*は外反すし端部丸く刻み目を持つ。頸部には3条沈線でにぶい黄橙である。*125*は外反する頸部で3条沈線があり内外面ともﾐｶﾞｷ。にぶい黄橙で砂粒含む。*126*は外反する頸部で沈線4条。ﾊｹ整形からﾐｶﾞｷで内面にぶい黄橙、外面にぶい褐である。*127*は内湾する肩部で頸部に1条の沈線がある。内面灰黄でﾐｶﾞｷ、外面褐灰でﾊｹ整形からﾐｶﾞｷで体部にも3条の沈線が施される。128は内湾する体部から短く外反する口縁部で端部丸く刻み目がある。内面は灰黄褐でﾅﾃﾞ、外面はにぶい褐でﾊｹ整形からﾅﾃﾞで3条沈線が肩部にある。*129*は直立する体部から短く外傾する。ﾕﾋﾞ成形で口縁部作り出し指頭圧痕残る。端部角張り、頸部下に4条沈線。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙でﾐｶﾞｷ。*130*は内湾する肩部から外反する口縁部で端部角張る。肩部に2条沈線があり、磨滅顕著。内面灰白～浅黄橙、外面橙。*131*は平底から内湾する。にぶい黄橙で砂粒少し含む。外面ﾊｹ、内面・底はﾅﾃﾞ仕上げ。*132*は僅かな上げ底から外傾する。内面ﾅﾃﾞでにぶい黄橙、外面ﾐｶﾞｷで褐灰。*133*は平底から外傾する。内面と底面はﾅﾃﾞで灰白、外面はﾊｹ整形でにぶい黄橙である。

SD207出土遺物（*134*～*141*）

*134*は甕で上げ底から内湾し短く外反する口縁部で端部丸い。磨滅しているが、全体にﾅﾃﾞ仕上げで端部には刻み目が施される。内面灰黄、外面にぶい黄橙である。*135*も甕で内傾する体部から短く外反する口縁部になり端部丸く刻み目を有する。ﾕﾋﾞ成形で口縁部作り出し指頭圧痕明瞭である。肩部に4条沈線あり、浅黄橙で磨滅している。*136*～*138*は壺底部である。*136*は器壁の厚い上げ底から外傾する。内面灰白、外面橙でﾅﾃﾞである。*137*は平底から内湾ぎみに延びる。にぶい橙で磨滅している。*138*は平底から外傾する。粘土の接合痕残りﾅﾃﾞが残る。にぶい黄橙～にぶい橙で2次焼成受けている。*139*～*141*は甕底部で表面磨滅している。*139*は平底から内湾する。橙で砂粒多く含む。*140*は平底から外傾する。粘土の接合面にもﾅﾃﾞ見られる。内面にぶい黄橙、外面ﾊｹ整形で灰黄褐。*141*は平底から外傾し、内面灰白、外面にぶい黄橙でﾊｹ整形。

SD204出土遺物（*142～163*）

*142～147*は壺である。*142*は外反する口縁部で端部角張る。内面はにぶい橙でﾐｶﾞｷ、外面はにぶい黄橙で縦方向のﾐｶﾞｷである。*143*は外反する頸部で3条沈線がある。灰黄褐で砂粒多く含み、内面ﾅﾃﾞである。*144*は内湾する体部から外傾する口縁部になる。頸部下に3条沈線ありﾅﾃﾞ仕上げである。にぶい黄橙で砂粒含む。*145*は平底から内湾する。浅黄で内面は板ﾅﾃﾞ。*146*は平底から内湾する。内面灰黄でﾐｶﾞｷ、外面明褐灰でﾊｹからﾅﾃﾞ。*147*は外傾する体部で3条沈線とその間に刺突文を入れる。黒斑ありﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷが施される。

*148～152*は甕である。*148*は内湾する体部から短く外傾する口縁部。端部は角張り刻み目がある。内面は灰白でﾅﾃﾞ、外面はにぶい黄橙でﾅﾃﾞ、3条沈線がある。*149*は外傾する体部から短く外反する口縁部で端部丸く刻み目がある。にぶい黄橙を呈し、内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹである。*150*は内湾する体部から外反する頸部である。細砂多く含み、金雲母も含まれ色調からも搬入品と思われる。内面褐灰でﾅﾃﾞ、外面黒褐でﾊｹ整形に3条沈線あり煤付着している。*151*は内湾する体部に短く外傾する口縁部で端部丸い。内面淡橙、外面にぶい橙でﾅﾃﾞ仕上げ。*152*は内湾する体部に短く外反する口縁部で端部丸い。内面灰黄橙で板ﾅﾃﾞ、外面にぶい橙でﾅﾃﾞ。内面には有機質付着している。

*153～163*は底部である。*153*は僅かな上げ底から外傾している。内外面ともに工具痕が付いており、板ﾅﾃﾞか。内面浅黄橙～にぶい黄橙、外面灰白～にぶい黄橙である。*154*は平底から外傾する。内面浅黄でﾅﾃﾞ、外面にぶい黄橙でﾊｹ整形。*155*はミニチュアかと思われる底部である。平底から湾曲ぎみに延びる。内面橙、外面にぶい橙～灰白でﾅﾃﾞ仕上げ。*156*は平底から外傾し底面はﾅﾃﾞである。にぶい黄橙をしており磨滅顕著である。*157*は平底から外傾する。浅黄橙で2次焼成受けている。*158*は底面の一部を欠くが外反ぎみの体部で外面ﾐｶﾞｷである。色調はにぶい黄橙で砂粒少し含んでいる。*159*は平底から内湾する。内外面ともにぶい黄橙を呈しﾐｶﾞｷで仕上げる。*160*は平底から外傾する。内面にぶい橙で炭化物付着している。外面浅黄でﾅﾃﾞ仕上げ。*161*は上げ底から外傾する。にぶい黄橙で内外ともﾐｶﾞｷである。黒斑認められる。*162*は凹凸のある平底から外傾する。内面ﾅﾃﾞで褐灰、外面ﾊｹ整形で灰黄褐。*163*は平底から内湾し底面はﾅﾃﾞ、内面は板ﾅﾃﾞでにぶい黄橙、外面はﾊｹ整形で褐灰～にぶい橙である。

SX203出土遺物（*164～186*）

*164～167*は遺構上層出土遺物で4点とも甕である。*164*は内湾する体部から短く外傾する口縁部で端部に刻み目を入れ丸く納める。にぶい黄橙で板ﾅﾃﾞで調整している。肩部に2条沈線。*165*は内湾する体部に短く外反する口縁部で端部丸く刻み目入れる。内面にぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ整形で灰である。*166*は平底から外傾する体部で強く被熱し器表ボロボロである。にぶい黄橙でﾅﾃﾞ仕上げ。*167*は平底から内湾する体部で細身である。底中央は焼成後穿孔している可能性がある。内面はにぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面は褐灰で、ﾅﾃﾞで黒斑がある。

*168～186*は下層の遺物で、*168～174*は壺である。*168*は外反する口縁部で橙を呈し磨滅している。*169*は外反する口縁部で端部丸みがある。頸部に断面方形の貼付突帯を付ける。浅黄橙で内外面ともﾐｶﾞｷである。端部近くに黒斑がある。*170*は外反し端部角張る。内面灰白、外面灰黄褐でﾊｹ整形からﾐｶﾞｷ、頸部に3条の削り出し突帯を作る。*171*は外反する頸部で灰黄褐～にぶい黄橙を呈し、内面はﾐｶﾞｷ、外面はﾊｹからﾅﾃﾞである。3条1対の沈線の間に刺突文を施す。*172*は内湾する肩部で、上に3条以上の沈線、下に1条以上の沈線があり、その間に斜行の3条単位の沈線で装飾する。*173*は内湾する体部で最大腹径近くに3条沈線がある。内面灰白、外面にぶい黄橙で、内外ともﾐｶﾞｷである。*174*は内湾する球

形の体部で灰黄褐を呈し内面はﾅﾃﾞ、外面はﾐｶﾞｷで肩部に4条沈線がある。口縁部は外反し端部は角張る。頸部にも 4 条沈線あり外面はﾊｹ整形からﾐｶﾞｷで仕上げ、内面はﾐｶﾞｷである。細砂含むが比較的緻密である。

175～*179*は甕である。*175*は薄手で内湾する体部から短く外反し端部丸い。頸部下に 3 条沈線があり橙を呈す。*176*は内湾する体部から短く外反する口縁部で端部は丸いと思われ、刻み目がなされる。灰黄褐～灰白を呈し外面はﾊｹ整形からﾅﾃﾞている。頸部下に 2 条沈線がある。*177*も内湾する体部から外反する頸部になり端部を欠いている。内面は灰褐でﾅﾃﾞ、外面は灰黄褐～黒褐でﾊｹ整形を行い肩部に 4 条沈線があり、煤付着している。*178*は内傾する体部から短く外反する口縁部で端部丸く刻み目を付ける。体部には 1 本ずつ施文する沈線 4 条があり、にぶい黄橙をしている。*179*は直立する体部から短く外傾する口縁部で端部角張りした端に刻み目を入れる。内面浅黄橙、外面暗灰で内外面とも板ﾅﾃﾞ仕上げで砂粒多く含む。大きい黒斑が 2 ヶ所にある。

180～*186*は底部である。平底から外傾するものが多く、甕の方が多い。*180*は 2 次焼成を受けており灰黄褐～灰褐で砂粒多く含む。*181*はやや上げ底で 2 次焼成を受け、外面はﾊｹ整形、底面はﾅﾃﾞである。灰黄褐で砂粒少し含む。*182*は内面灰白、外面にぶい黄橙、底面ﾅﾃﾞ仕上げである。*183*は内面にぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面灰白でﾅﾃﾞ調整である。*184*は内湾する体部でにぶい黄橙を呈しﾅﾃﾞ仕上げ。*185*は内湾する体部で底面には木葉痕があり焼成後の穿孔がある。内面灰白～にぶい黄橙で板ﾅﾃﾞ、外面橙～褐灰である。*186*は内面にぶい黄橙でﾅﾃﾞ、外面灰黄褐でﾊｹ整形、底面ﾅﾃﾞ仕上げ。

３．包含層出土土器

187～*189*は須恵器である。*187*は小形椀口縁部で内湾ぎみで端部反って丸い。灰で細砂含み焼成良好である。平安時代後半であろうか。*188*は杯身で外傾する体部に短い受部になり端部丸い。反りは外反し比較的鋭い。灰白で外面はザラっとしている。*189*は壺底部で外側に開く高台で体部は内湾する。高台外面と体部内面に自然釉が付いている。内面灰白、外面灰を呈する。

190～*192*は弥生後期で*190*は甕底部で平底から外傾する。外面ﾀﾀｷで浅黄橙、内面橙。黒斑がある。*191*は脚台Ⅲ式の製塩土器で短い筒部となり脚台は内湾し端部丸い。橙で砂粒少し含む。*192*は灰黄で外面ﾐｶﾞｷ。

*195*は中期の高杯裾部である。内湾し端部外側に肥厚する。内面にぶい黄橙、外面灰白でﾖｺﾅﾃﾞ。

それ以外は前期の弥生土器である。ﾕﾋﾞ成形からﾐｶﾞｷ仕上げの土器が多い。器種は壺・甕・蓋で高杯は認められない。*194*は沈線とハの字状刻線があり、*203*にも文様が施されている。特徴的なことは紀伊型甕が存在しないことである。洲本市内の他の前期遺跡では保有しているのに全く入っていないのは興味深い。

第２節　石　器

出土した石器のうち、13点図化した。S01～S08はサヌカイト製の打製石器である。S01は基部が平基の石鏃である。S02は一部に尖状の加工を認めたため、錐とした。S03～05は削器類である。S03・04は素材剥片の長辺（２側縁）に刃部を設定している。S05は表面右側縁に抉状の加工を認める。S06・07は楔形石器である。２点とも上下２側縁に連続した微細剥離痕を認める。S08は分割原石である。分割前

の原石を考慮すると、四国（香川県国分台周辺）から当遺跡に持ち込まれた可能性が高い。S09・10は石棒である。S09の石材は結晶片岩であることから、四国（徳島県吉野川流域）から持ち込まれたと推定した。S10は全ての面が良く磨かれている。S11はすり石であるが、中央部に凹みが認められる。S11・12はともに砂岩製の台石である。なお、砂岩原石は洲本市由良の海岸で容易に見つけることができるため、当遺跡が立地する淡路島で採取できる石材の可能性が高い。

第１表　出土石器観察表

報告番号	図版番号	写真図版番号	石材	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
S01	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	石鏃	1.95	1.50	0.40	1.1	第２面包含層
S02	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	錐	3.65	4.70	0.80	12.6	第２面包含層
S03	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	削器類	6.40	3.15	0.80	16.1	第２面 SR001（下層）
S04	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	削器類	7.25	4.05	0.80	25.9	第２面 SD203
S05	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	削器類	8.95	6.05	2.10	84.0	第２面 SR001（下層）
S06	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	楔形石器	3.15	2.95	0.80	7.2	第２面 SK201
S07	図版 19	写真図版 32	サヌカイト	楔形石器	4.15	2.95	0.65	8.2	第２面 SR001（下層）
S08	図版 20	写真図版 32	サヌカイト	分割原石	12.70	10.00	1.55	175.9	第２面包含層
S09	図版 20	写真図版 32	結晶片岩	石棒	18.80	3.40	6.15	412.8	第２面 SR01（下層）
S10	図版 20	写真図版 32	砂岩	石棒	7.25	2.40	2.95	89.5	第２面包含層
S11	図版 20	写真図版 32	砂岩	すり石	10.50	9.35	3.80	509.1	第２面 SR001（下層）
S12	図版 20	写真図版 32	砂岩	台石	27.85	11.70	7.50	3860.0	第２面 SR001（下層）
S13	図版 20	写真図版 32	砂岩	台石	10.70	13.00	7.50	1261.0	第２面包含層

第２表－１　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
1	弥生土器	底部	SK001	内面ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(3.3)		(4.4)	底部 1/4	
2	弥生土器	壺	SD001		平底から外傾する		(6.6)		(10.1)	底部 1/3	
3	弥生土器	高杯	SD001	絞り目、ﾅﾃﾞ、凹線 14 条	外反する		(10.8)			脚部 1/4	
4	弥生土器	長頸壺	SD005、SD001	内面ﾊｹ整形からﾅﾃﾞ、口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、	外反する頸部から外傾し端部肥厚	(12.0)	(14.2)			口縁部 2/3	
5	弥生土器	甕	SD005	ﾕﾋﾞ成形からﾊｹ、ﾖｺﾅﾃﾞ	外反し端部角張る	(16.2)	(3.1)			口縁部 1/4	
6	弥生土器	壷	SD005、SD001	不明、黒斑	平底から内湾する		(3.9)		(6.0)	底部 1/2	
7	弥生土器	水差し	SD007	内面ﾕﾋﾞ成形、ﾅﾃﾞ、粘土紐残る、外面ﾊｹ整形、口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 4 条凹線	球形の体部に外反する口縁部付き端部角張る、断面方形の把手付く	(13.2)	(20.1)	(19.6)		口縁部 1/2、体部 1/6	胎土分析試料④
8	弥生土器	高杯	SD007	内面絞り目、板ﾅﾃﾞ、端部ﾖｺﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、1 条凹線、透孔 3 ヶ所	直立ぎみの長い筒部から外傾し端部丸い		(14.0)		(12.6)	底部 1/2、脚部 1/2	胎土分析試料②
9	須恵器	甕	SR001	回転ﾅﾃﾞ	外反し端部肥厚面になる	(22.8)	(4.3)			口縁部 1/10	自然釉
10	須恵器	壺	SR001中央付近	回転ﾅﾃﾞ、高台貼り付けﾅﾃﾞ、高台内側に工具痕	平底から外傾する体部、高台は方形で開く		(6.8)		(11.5)	底部 1/4、高台 1/10	
11	須恵器	頚部	SR001	回転ﾅﾃﾞ、外面回転ﾅﾃﾞのち波状文、沈線 2 条	外反する		(3.9)			小片	
12	弥生土器	甕	SR001	内面板ﾅﾃﾞ、口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ、外面平行ﾀﾀｷ、ﾅﾃﾞ、黒斑	平底から倒卵形の体部で外反する口縁部、端部外に引く	(14.4)	(22.4)	19.0	4.3	口縁部若干 、体部 1/2、底部完形	
13	弥生土器	甕	SR001(下層)	内面ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ、端面 2 条凹線	外傾し端部内側に肥厚	(12.4)	(2.4)			口縁部 1/10	
14	弥生土器	甕	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、内面ｹｽﾞﾘ、外面ﾊｹ、端面凹む	僅かに外反する口縁部で端部角張る	(19.6)	(2.8)			口縁部 1/12	
15	弥生土器	甑	SR001(下層)	内面ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、外面ﾀﾀｷ	小さな平底から外傾、中央に穿孔		(5.5)		2.5	底部完形	
16	弥生土器	鉢	SR001(下層)	外面ﾐｶﾞｷ、底面木葉痕、工具痕、斜行ｸｼ描き	底面高台状になる、体部外傾		(4.3)		(7.9)	底部 1/6	
17	弥生土器	壷	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、円形浮文の痕跡	外傾し端部肥厚する		(3.5)			口縁部若干	
18	弥生土器	壺	SR001	ﾖｺﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、凹線 1 条	外反し端部肥厚	(15.4)	(3.4)			口縁部 1/6	
19	弥生土器	壺	SR001北半	外面ﾊｹ整形、肩部に刺突文	直立する頸部から直線的に開く体部		(6.3)			小片	
20	弥生土器	壷	SR001北半	ﾖｺﾅﾃﾞ、口縁部・突帯に刻み目	外傾し端部肥厚する	(12.6)	(3.2)			口縁部 1/8	
21	弥生土器	壷	SR001北半	凹線 2 条、ﾖｺﾅﾃﾞ	外傾し端部角張る	(13.8)	(3.8)			口縁部 1/10	
22	弥生土器	甕	SR001北半	外面ﾐｶﾞｷ、底面ﾅﾃﾞ、黒斑	平底から内湾する		(5.2)		4.0	底部完存	
23	弥生土器	底部	SR001下層	ﾅﾃﾞ（もしくはﾐｶﾞｷ）	突出平底から外傾する		(4.8)		(4.7)	底部 2/3、体部若干	
24	弥生土器	器台	SR001下層	外面 15 条以上凹線、円形透孔、赤色顔料塗布か	外反する		(15.0)			体部若干	
25	弥生土器	高杯	SR001南半	絞り目	外反する、円板充填		(7.3)			脚部若干	
26	弥生土器	高杯	SR001北半	絞り目、焼成前円孔 4 個、刺突文	外反し端部肥厚		(6.4)		10.8	底部 1/2	
27	弥生土器	高杯	SR001北半東肩	内面ﾅﾃﾞ絞り目、外面ﾊｹかﾐｶﾞｷ、焼成前穿孔筒部 4 個裾部 5 個、赤色顔料塗布	直立する筒部から緩やかに開く裾部、杯部も外傾		(12.2)	脚径 4.8	14.0	脚部ほぼ完、杯なし	
28	弥生土器	壺	SR001(下層)	凹線 4 条、ﾖｺﾅﾃﾞ	外反し端部肥厚	(18.0)	(1.85)			口縁部 1/4	

第２表－２　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
29	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	内外面ﾐｶﾞｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線２条、竹管文付き円形浮文	外傾し端部肥厚する	(19.0)	(2.4)			口縁部1/8	
30	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線３条、円形浮文、竹管文	外傾し端部肥厚する	(26.1)	(2.5)			口縁部1/12	
31	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	内面ﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、外面ﾅﾃﾞ、凹線３条、円形浮文	外反し端部肥厚	(30.0)	(1.8)			口縁部1/14	
32	弥生土器	壷	SR001(下層)	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾐｶﾞｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線磨滅	直立する頸部から外反し端部肥厚	(29.3)	(6.3)			口縁部1/8	
33	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	上下２段の刺突文	外反し垂下する端部	(18.0)	(2.4)			口縁部1/8	
34	弥生土器	壺	SR001(下層)	内外面ﾐｶﾞｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ、端面凹線３条	外反し端部面となり直立し角張る	(24.1)	(7.5)			口縁部1/12	
35	弥生土器	壺	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線、刺突文	外傾する頸部から屈曲して上方に延びる、端部角張る	(19.4)	(4.9)			口縁部1/18	
36	弥生土器	壺	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、突帯、波状文の痕跡	頸部には突帯が付き外傾してから大きく屈曲し端部肥厚	(19.2)	(7.6)			口縁部1/6	
37	弥生土器	壺	SR001(下層)	内面ｹｽﾞﾘ、ﾅﾃﾞ、ﾖｺﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、凹線２条	外反し端部肥厚	(17.9)	(6.4)			口縁部1/8	
38	弥生土器	壺	SR001(下層)	外面ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、凹線３条、竹管文、内面ﾅﾃﾞ	外傾してからさらに広がり端部肥厚する	(14.2)	(3.8)			口縁部1/8	
39	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	外面にﾊｹの痕跡、端面凹線１条	外反し端部僅かに肥厚し角張る	(16.0)	(7.8)			口縁部1/4	
40	弥生土器	壺	SR001(下層)	凹線	外反し端部僅かに肥厚し角張る	(15.5)	(8.3)			口縁部1/4	
41	弥生土器	壺	SR001(下層)	不明	外傾する頸部		(6.0)			頚部若干	胎土分析試料①
42	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	ﾖｺﾅﾃﾞ、刺突文、ﾅﾃﾞ	外反する肩部		(4.6)			小片	
43	弥生土器	壺	SR001（下層）	内面ﾐｶﾞｷ、ﾖｺﾅﾃﾞ、凹線３条	外傾し端部角張る	(18.0)	(4.3)			口縁部1/6	
44	弥生土器	壷	SR001(下層)南半	内面ﾅﾃﾞ、外面波状文、直線文、２本の突帯の上に棒状浮文	直立する		(7.1)			小片	赤色顔料
45	弥生土器	壺	SR001(下層)南半	内面ﾊｹ、外面突帯３条の上にクシ状工具による刻み目	内湾ぎみ		(5.9)			小片	
46	弥生土器	壺	SR001(下層)	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、貼り付け突帯指頭圧痕	外反する		(5.1)			頚部若干	
47	弥生土器	壺	SR001 TR1第2面	内面ﾅﾃﾞ、外面突帯３条の上に棒状浮文２本	外反する		(4.0)			頚部若干	
48	弥生土器	壺	SR001(下層)	内面ｹｽﾞﾘ、外面ﾖｺﾅﾃﾞ、刺突文	内湾する体部から外傾する頸部		(5.3)			頚部若干	
49	弥生土器	壺	SR001(下層)	ﾅﾃﾞ、貼り付け突帯指頭圧痕	外反する		(2.9)			小片	
50	弥生土器	壺	SR001(下層)ラミナ層(底付近)	内外面ﾐｶﾞｷ、頸部突帯	外反し端部角張る	(16.6)	(4.0)			口縁部1/8	
51	弥生土器	蓋	SR001(下層)	蓋部ﾕﾋﾞ成形、ﾅﾃﾞ、内外面ﾐｶﾞｷ	平坦な天井部から外傾		(3.4)		(3.5)	底部ほぼ完形	
52	弥生土器	蓋	SR01西側　第2面以下	ﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞｵｻｴ、煤・炭化物付着	僅かに外反し端部薄く丸い、つまみ部は丸く尖る	(23.6)	10.2		6.2	口縁部1/4、底部1/2	

第２表－３　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
53	弥生土器	壷	SR001(下層)	内面ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、強いﾖｺﾅﾃﾞで突帯状に、刺突文	内湾し端部角張る	(35.0)	(4.1)			口縁部1/16	
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
54	弥生土器	甕	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹ、刺突文	内傾する体部から短く外反する口縁部で端部肥厚	(32.0)	(3.8)			口縁部1/16	
55	弥生土器	甕	SR001(下層)	貼り付け突帯指頭圧痕	くの字に外傾し端部肥厚	(35.0)	(4.5)			口縁部1/8	
56	弥生土器	甕	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、端面凹線２条	ﾊﾁ形に開き端部肥厚	(33.3)	(4.7)			口縁部1/12	
57	弥生土器	甕	SR001(下層)南半	ﾊｹ整形、ﾖｺﾅﾃﾞ	外反する口縁部	(16.6)	(4.1)			口縁部1/10	
58	弥生土器	甕	SR001(下層)	内面ｹｽﾞﾘ、外面ﾊｹ、強いﾖｺﾅﾃﾞ、擬凹線２条	内湾する体部から外反する口縁部、端部肥厚	(22.0)	(5.9)			口縁部1/10	
59	弥生土器	壷	SR001(下層)ラミナ層(底付近)	外面ﾀﾀｷ、ﾅﾃﾞ、内面板ﾅﾃﾞ、底面籾痕、黒斑	平底から内湾する体部		(8.2)		9.5	底部完形	
60	弥生土器	壷	SR001(下層)	ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、黒斑	突出平底から外反する		(3.4)		3.5	底部完形	
61	弥生土器	甕	SR001(下層)	焼成後穿孔	平底から外傾		(3.0)		3.6	底部ほぼ完形	
62	弥生土器	甕	SR001(下層)	外面ﾀﾀｷ、底面ﾅﾃﾞ、内面板状工具痕	平底から外傾		(3.3)		2.8	底部完形	
63	弥生土器	甕	SR001(下層)	外面ﾀﾀｷ、指頭圧痕、内面ﾅﾃﾞ、	平底から外傾		(5.2)		(3.7)	底部ほぼ完形	
64	弥生土器	甑	SR001(下層)南半	外面ﾀﾀｷ、内面粗いﾊｹ、ﾅﾃﾞ、中央部に焼成前突孔、底面ﾅﾃﾞ	平底から外傾		(4.4)		4.8	底部完形	
65	弥生土器	底部	SR001(下層)南半	内面ｹｽﾞﾘ、底面・外面ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、	高台状の外に開く底部で体部は外傾する		(4.2)		(6.5)	底部1/4	
66	弥生土器	壷	SR001(下層)	ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、籾痕	平底から外傾		(2.6)		(6.6)	底部3/4	
67	弥生土器	底部	SR001(下層)南半	内面ﾅﾃﾞ、ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、底面工具痕、黒斑	上げ底から外傾		(2.8)		(4.4)	底部完形	
68	弥生土器	製塩土器	SR001(下層)	外面ﾀﾀｷ、ﾅﾃﾞ	上げ底		(2.0)		4.0	底部完形	
69	弥生土器	製塩土器	SR001(下層)南半	絞り目、ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ	上げ底から外傾する		(3.4)		4.6	底部完形	
70	弥生土器	器台	第2面SR001(下層)	強いﾖｺﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ、６条凹線、端面にも２条凹線	外に開き端部僅かに肥厚		(7.4)		(18.6)	底部1/10	
71	弥生土器	脚部	SR001(下層)	凹線１条	緩やかに外反し端部肥厚		(3.6)		(12.4)	底部1/8	
72	弥生土器	高杯	SR001(下層)	内面ｹｽﾞﾘ、強いﾖｺﾅﾃﾞ、凹線４条	外反し端部肥厚		(6.1)		(15.0)	底部1/8	
73	弥生土器	高杯	SR001(下層)	不明	筒部細く直立し裾は外反し端部丸い、杯部内湾		(11.1)	3.0	9.4	脚部・底部ほぼ完形	
74	弥生土器	器台	SR001(下層)	ﾖｺﾅﾃﾞ、綾杉状の刺突文	外反し端部肥厚	(30.2)	(3.4)			口縁部若干	
75	弥生土器	器台	SR001(下層)	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、波状文、透孔４個１対２段	外反し裾部端上につまみ上げる		(16.3)	7.6	(17.3)	底部1/3、脚部2/3	
76	弥生土器	壷	SK201	ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ	外反ぎみで端部角張る	(42.6)	(5.3)			口縁部1/6	
77	弥生土器	壷	SK201	内面ﾅﾃﾞ、粘土紐痕、外面ﾐｶﾞｷ、ﾊｹ整形のち沈線４条２帯、頸部沈線３条、口縁部焼成前小円孔	突出平底から算盤玉状の扁平な球形から外反する口縁部で端部丸い	(22.0)	(42.4)	(39.5)	12.2	口縁部1/3、体部1/4、底部完形	胎土分析試料⑤

第２表－４　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
78	弥生土器	壺	SK201	内外面ﾐｶﾞｷ、沈線３条	体部内傾し口縁部外反	(30.6)	(14.7)			口縁部1/8	
79	弥生土器	壺	SK201	ﾅﾃﾞ	外反し端部角張る	(18.1)	(2.6)			口縁部1/6	
80	弥生土器	壺	SK201	ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ	外反し端部丸い	(21.0)	(3.6)			口縁部1/10	
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
81	弥生土器	壺	SK201	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹからﾐｶﾞｷ、突帯に刻み目、ﾊｹ、沈線３条	内湾する肩部から頸部になり頸部に突帯		(8.5)			体部若干	炭付着
82	弥生土器	壺	SK201	内面ﾊｹ、ﾐｶﾞｷ、突帯・端部に刻み目、外面ﾊｹ、ﾐｶﾞｷ、口縁部ﾕﾋﾞ成形	外反する頸部から外傾し変化点を持って外反する口縁部、端部角張る	(20.3)	(9.5)			口縁部1/6	
83	弥生土器	壺	SK201	不明　表面磨滅	外反し端部丸い、内面に突帯	(14.0)	(3.4)			口縁部1/4	
84	弥生土器	甕	SK201	不明　表面磨滅	外反し端部丸い、内面に突帯	(13.5)	(5.1)			口縁部1/4	
85	弥生土器	壺	SK201	外面ﾐｶﾞｷ、底面ﾅﾃﾞ、黒斑	平底から外反する		(5.0)		8.8	底部2/3	
86	弥生土器	甕	SK201	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾊｹ、ﾐｶﾞｷ、底面ﾅﾃﾞ	平底から湾曲ぎみに外傾		(7.6)		8.5	底部完形	
87	弥生土器	壺	SK201	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、ﾐｶﾞｷ、底面強いﾅﾃﾞ、底部穿孔、黒斑	平底から湾曲ぎみに外傾		(7.7)		9.5	底部完形	
88	弥生土器	壺	SK201	内面板ﾅﾃﾞ、外面・底ﾅﾃﾞ　ﾐｶﾞｷ、ﾍﾗ描き直線、黒斑	平底から外傾する		(5.8)		(16.2)	底部1/4	
89	弥生土器	底部	SK201	内面板ﾅﾃﾞ、外面ミガキ、底ﾅﾃﾞ	僅かな上げ底から外傾する		(5.4)		8.5	底部3/4	
90	弥生土器	底部	SK201	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、ﾅﾃﾞ、焼成後穿孔	平底から外傾する		(5.3)		(7.8)	底部1/2	
91	弥生土器	甕	SK201	外面ﾊｹ整形、端部刻み目	内湾する体部に短く外反する口縁部、端部丸い	(28.0)	(9.4)	(27.0)		口縁部1/8	
92	弥生土器	甕	SK201	ﾊｹ、ﾅﾃﾞ、端部刻み目、沈線２条１対、下にもあるか	直立する体部に短く外反する口縁部、端部丸い	(20.2)	(4.3)			口縁部1/8	
93	弥生土器	甕	SK201	内面板ﾅﾃﾞ、外面２方向のﾊｹ、沈線４条、刻み目	緩やかに内湾する体部から短く外傾する口縁部、端部角張る	(23.6)	(15.5)	(24.5)		口縁部1/3	
94	弥生土器	甕	SK201	ﾅﾃﾞ、沈線３条、刻み目	直立する体部に短く外傾する口縁部、端部角張る	(22.0)	(4.4)			口縁部若干	
95	弥生土器	甕	SK201	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、沈線３条、刻み目	直立する体部に短く外傾する口縁部、端部角張る	(20.5)	(5.3)			口縁部1/12	
96	弥生土器	甕	SK201	内面板ﾅﾃﾞ、外面板ﾅﾃﾞ、沈線３条、刻み目、焼成後穿孔	平底から内湾し長胴で直立し短く外傾する口縁部、端部丸い	22.7	22.8	22.0	(8.0)	口縁部1/4、体部・底部ほぼ完形	胎土分析試料⑥
97	弥生土器	壷	SK201	磨滅のため不明	外反し端部丸い、内面に突帯	(14.0)	(3.8)			口縁部1/10	
98	弥生土器	壷	SK201	内面ﾐｶﾞｷ、口縁部ﾕﾋﾞｵｻｴ、外面ﾐｶﾞｷ、沈線３条、	外反し端部角張る、波状口縁	(10.5)	(4.5)			口縁部破片３点	
99	弥生土器	壷	SK201	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、ﾐｶﾞｷ、３条沈線	内湾、沈線の上に突帯		(13.6)	(32.3)		体部若干	
100	弥生土器	甕	SK201	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、ﾐｶﾞｷ、、刻み目、沈線３条	内傾する体部に短く外反する口縁部、端部丸い	(22.8)	(4.2)			1/16	
101	弥生土器	甕	SK201	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾖｺﾅﾃﾞ、ﾊｹのち沈線４条	内湾する		(3.7)			体部若干	
102	弥生土器	甕	SK201	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹのちﾅﾃﾞ、沈線２条	内湾する		(5.8)			体部若干	

第２表－５　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
103	弥生土器	壺	SK208	外面・底面ﾐｶﾞｷ、内面工具痕、ﾅﾃﾞ	僅かに上がる平底から外傾する、内面凹凸あり		(6.0)		9.6	底部 1/2	
104	弥生土器	甕	SK210	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹから沈線２条、刻み目	内湾する体部から短く外反、端部丸い	(18.8)	(10.2)			口縁部 1/4	
105	弥生土器	壺	SK205	沈線４条、ﾅﾃﾞか	外反し端部丸い	(15.6)	(5.5)			口縁部 1/3	
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
106	弥生土器	壺	SK205	内外面ともﾐｶﾞｷ、沈線上３条、下４条	内傾する体部から不明瞭な頸部となり外反する、端部丸い	(12.4)	(11.7)			口縁部 1/4、体部 1/4	胎土分析試料⑦
107	弥生土器	壺	SK205	ﾐｶﾞｷ、沈線２条	外反し端部丸い端部丸い	(18.0)	(5.5)			口縁部若干	
108	弥生土器	壺	SK205	内面ﾅﾃﾞ、外面板ﾅﾃﾞ、沈線３条	内湾する		(5.4)	(21.5)		体部若干	
109	弥生土器	甕	SK205	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、端部刻み目	直立する体部から緩やかに短くＬ字形になり端部丸い	(23.5)	(7.8)			口縁部 1/4	胎土分析試料⑧
110	弥生土器	甕	SK205	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、沈線３条、刻み目	内湾する体部から短く外傾、端部角張る	(26.2)	(11.1)			口縁部若干	
111	弥生土器	壺	SK205	外面ﾅﾃﾞ、ﾐｶﾞｷ、底面ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(8.8)		(9.3)	底部 1/4	
112	弥生土器	底部	SK205	内面・底面ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ	平底から外傾する		(3.3)		3.2	底部完形	
113	弥生土器	壺	SK205	内面ﾅﾃﾞのちﾐｶﾞｷ、外面ﾐｶﾞｷ、ﾅﾃﾞ、底面ﾅﾃﾞ	僅かに上がる平底から外傾する、内面凹凸あり		(4.5)		(9.4)	底部 1/3	
114	弥生土器	甕	SK205	外面ﾐｶﾞｷ、黒斑	僅かに上がる平底から外傾する、		(4.2)		(10.2)	底部 1/3	
115	弥生土器	底部	SK205	底面ﾅﾃﾞ、外面ﾕﾋﾞ成形、工具痕あり	不安定な上げ底から外傾する、体部凹凸あり		(6.1)		(9.4)	底部 1/2	
116	弥生土器	壷	SK205	内面・底面ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ	平底から外傾する		(5.5)		(8.7)	底部 1/6	
117	弥生土器	壷	SK205	不明	平底から外傾する		(5.4)		(7.5)	底部 1/4	
118	弥生土器	甕	SD202	外面ﾅﾃﾞ、沈線２条	直立する体部から緩やかに短く外反し端部丸い	(18.4)	(6.6)			口縁部 1/4	
119	弥生土器	甕	SD205第2面	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、沈線５条、刻み目	内湾する体部から緩やかに短く外傾する、端部丸い	(19.4)	(6.4)			口縁部若干	
120	弥生土器	蓋	SD205	内外面ﾐｶﾞｷ	外傾し端部やや肥厚	(21.8)	(2.3)			口縁部 1/12	煤付着
121	弥生土器	壺	SD205	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾅﾃﾞ、粘土の下にもﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(4.6)		17.3	底部 1/6	
122	弥生土器	壺	SD208	内外面ﾐｶﾞｷ	僅かに上がる平底から外傾する		(4.7)		8.0	底部完形	
123	弥生土器	壺	SD208	外面ﾐｶﾞｷ、底面ﾅﾃﾞ、黒斑	平底から外反する		(3.8)		8.5	底部完形	籾痕
124	弥生土器	壺	SD203	刻み目、沈線３条	外反する、端部角張りぎみ	(19.0)	(6.6)			口縁部 1/6	
125	弥生土器	壺	SD203	内外面ﾐｶﾞｷ、肩部沈線３条	外反する		(5.6)			頚部若干	
126	弥生土器	壺	SD203	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾊｹ整形のちﾐｶﾞｷ、沈線４条	外反する		(9.5)			頚部若干	
127	弥生土器	壺	SD203最下層付近	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾊｹのちﾐｶﾞｷ、沈線肩１条以上、腹部３条	内湾する体部で肩部やや急になる		(11.3)			体部若干	
128	弥生土器	甕	SD203	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、３条沈線、口唇部刻み目	内湾する体部から短く外反する口縁部	(22.8)	(11.2)	(22.0)		口縁部・体部若干	

第２表－６　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
129	弥生土器	甕	SD203	外面ﾐｶﾞｷ、口縁部ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、沈線４条	直立ぎみの体部から短く外傾し端部角張る	(38.0)	(12.3)			口縁部1/16	
130	弥生土器	甕	SD203	ﾅﾃﾞ、沈線２条	内傾する肩部から外反する口縁部、端部角張る	(33.3)	(10.6)			口縁部1/12	
131	弥生土器	甕	SD203最下層付近	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ整形から板ﾅﾃﾞ、底面ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(5.9)		(8.6)	底部1/4	黒斑
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
132	弥生土器	壷	SD203上層	内面・底面ﾅﾃﾞ、外面ミガキ	平底から外傾する		(4.6)		(8.2)	底部1/4	
133	弥生土器	甕	SD203上層	内面・底面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ	平底から外傾する		(7.2)		(7.3)	底部1/4	
134	弥生土器	甕	SD207	外面・底面ﾅﾃﾞ、内面ﾕﾋﾞ成形からナデ、端部刻み目	上げ底から内湾し口縁部短く外反する、端部丸い	(19.3)	(19.7)		(7.4)	口縁部・体部1/4、底部1/2	
135	弥生土器	甕	SD207	口縁部ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、端部刻み目、4条沈線	内傾する体部から短く外傾する口縁部、端部丸い	(18.2)	(4.9)			口縁部1/6	
136	弥生土器	底部	SD207	内面ﾅﾃﾞ？	上げ底から外傾する		(5.2)		(7.8)	底部1/2	
137	弥生土器	底部	SD207	不明	平底から内湾ぎみ		(6.4)		(8.7)	底部1/4	
138	弥生土器	壷	SD207	内面ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ	上げ底から外傾する		(4.6)		(16.8)	底部若干	
139	弥生土器	底部	SD207	不明	平底から外傾する		(6.3)		6.6	底部完形	
140	弥生土器	甕	SD207	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾕﾋﾞ成形からﾊｹ、底面ﾅﾃﾞ、粘土継ぎ目	平底から外傾する		(4.2)		9.0	底部完形	
141	弥生土器	甕	SD207	外面ﾊｹ、底面ﾅﾃﾞ・ﾕﾋﾞｵｻｴ	上げ底から外傾する		(7.3)		(9.0)	底部1/3	
142	弥生土器	壷	SD204	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾅﾃﾞ	外反する口縁部、端部角張る	(18.9)	(4.4)			口縁部1/4	
143	弥生土器	壷	SD204	内面ﾅﾃﾞ、外面沈線３条	外反する		(6.3)			頚部若干	
144	弥生土器	壷	SD204	外面ﾅﾃﾞ、沈線３条	内傾する肩部から外傾する		(7.0)			口縁部若干	
145	弥生土器	壷	SD204	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ	平底から内湾する体部	(14.5)	10.2		6.1	口縁部1/5、底部完形	
146	弥生土器	壷	SD204	内面ﾐｶﾞｷ、外面ﾊｹかﾅﾃﾞ、底部ﾅﾃﾞ	平底から扁平な球形体部		(17.5)	(28.2)	8.4	底部完形、体部1/6	
147	弥生土器	体部	SD204	ﾅﾃﾞかﾐｶﾞｷ、３条沈線、刺突文	内傾する		(4.8)			小片	
148	弥生土器	甕	SD204	内外面ﾅﾃﾞ、３条沈線、刻み目	直立ぎみの体部から短く外傾し端部角張る	(28.3)	(6.3)			口縁部1/8	
149	弥生土器	甕	SD204	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、端部刻み目、黒斑	外傾し口縁部短く外反し端部丸い	(19.0)	(6.7)			口縁部若干	
150	弥生土器	甕	SD204	内面ﾅﾃ、外面ﾊｹ整形のち沈線３条	内湾する体部から外反する頸部		(13.2)			体部1/6	搬入土器
151	弥生土器	甕	SD204	ﾅﾃﾞ？	内湾する体部から短く外反する口縁部	(14.5)	(11.1)	(17.1)		口縁部1/10	
152	弥生土器	鉢	SD204	内面板ﾅﾃﾞ	内湾ぎみの体部から頸部不明瞭で僅かに外反する口縁部	(14.4)	(7.6)			口縁部1/6	内面有機質付着
153	弥生土器	壷	SD204	内面工具痕、内外面ﾅﾃﾞ	上げ底から外傾する		(10.1)		(13.4)	底部1/4	
154	弥生土器	甕	SD204	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、板状工具痕、ﾕﾋﾞｵｻｴ	平底から外傾する		(3.3)		6.2	底部完形	黒斑
155	弥生土器	底部	SD204	ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(2.7)		3.5	底部完形	ﾐﾆﾁｭｱか

第２表－７　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
156	弥生土器	底部	SD204	ﾅﾃﾞ？	平底から外傾する		(3.3)		(8.0)	底部 1/2	
157	弥生土器	壺	SD204	ﾅﾃﾞ？、２次焼成	平底から外傾する		(3.4)		(5.8)	底部 3/4	
158	弥生土器	壺	SD204	ﾐｶﾞｷ	外反する体部、平底か？		(4.7)			体部若干	
159	弥生土器	壺	SD204	内外面ﾐｶﾞｷ、２次焼成	平底から外傾する		(7.2)		(8.4)	底部 1/3	
160	弥生土器	壺	SD204	底部ﾅﾃﾞ、内面炭化物で不明	平底から外傾する		(6.4)		(7.5)	底部 1/4	内面炭化物
161	弥生土器	壺	SD204	内外面・底面ﾐｶﾞｷ、黒斑	上げ底から外傾する		(7.4)		(9.1)	底部 1/3	
162	弥生土器	壺	SD204	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ	上げ底から外傾する		(4.4)			底部若干	
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
163	弥生土器	甕	SD204	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、底ﾅﾃﾞ	平底から内湾する		(10.1)		(9.3)	底部 1/3	
164	弥生土器	甕	SX203	内面板ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、板ﾅﾃﾞ、沈線２条、刻み目	内湾する体部から短く外傾する口縁部、端部丸い	(22.5)	(17.3)			口縁部 3/4、体部 1/2	黒斑
165	弥生土器	甕	SX203	内外面ﾊｹ整形からﾅﾃﾞ、刻み目	内湾する体部から短く外反する口縁部、端部丸い	(14.2)	(7.4)			口縁部 1/8	
166	弥生土器	壺	SX203	内面ﾅﾃﾞ、外面板ﾅﾃﾞ、２次焼成	平底から外傾する		(9.3)		(9.2)	底部 1/2	
167	弥生土器	壷	SX203	内外面ﾅﾃﾞ、焼成後穿孔	平底から内湾ぎみに延びる		(12.4)		(6.7)	底部 1/2、体部 1/8	黒斑
168	弥生土器	壺	SX203	不明	外反する口縁部、端部丸い	(18.9)	(3.4)			口縁部 1/12	
169	弥生土器	壺	SX203	内外面ﾐｶﾞｷ、貼付突帯１条	外反する、端部角張りぎみ	(15.2)	(7.7)			口縁部 1/3	
170	弥生土器	壺	SX203	外面ﾊｹからﾐｶﾞｷ、貼付突帯３条	外反する口縁部で端部角張る	(17.6)	(5.8)			口縁部 1/4	
171	弥生土器	壺	SX203	内面ミガキ、外面ﾊｹのちﾅﾃﾞ、沈線３条の間に刺突文	外反する頸部		(5.9)			体部若干	
172	弥生土器	壺	SX203	内外面ﾅﾃﾞ、沈線３条の下に斜行のﾍﾗ描き文様、下にも沈線	内湾する体部		(4.3)			破片	
173	弥生土器	壺	SX203	内面ﾕﾋﾞ成形からﾐｶﾞｷ、外面ﾐｶﾞｷのち沈線３条	内湾する体部		(7.9)			体部若干	
174	弥生土器	壺	SX203、SD204	内面ﾐｶﾞｷからﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ整形のちﾐｶﾞｷ、沈線４条ずつ	球形の体部に外反する口縁部になり端部角張る	(16.6)	(21.8)	(27.3)		口縁部 2/3、体部 1/6	
175	弥生土器	甕	SX203	沈線３条	僅かに内湾する体部から短く外傾する口縁部で端部丸い	(14.0)	(6.0)			口縁部 1/14	
176	弥生土器	甕	SX203	外面ﾊｹ、沈線２条、刻み目	内湾する体部から外反する頸部、端部を欠く		(16.0)	(23.2)		口縁部付近 1/6	
177	弥生土器	甕	SX203	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、沈線４条	内湾する体部から外傾する頸部		(15.8)	(25.4)		体部 1/6	煤付着
178	弥生土器	甕	SX203	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、刻み目、沈線４条、１条ずつ施文	直立する体部から短く外反し端部丸い	(21.6)	(4.1)			口縁部 1/12	
179	弥生土器	甕	SX203	内外面板ﾅﾃﾞ、刻み目、黒斑	直立する体部から短く外傾し端部角張る	(21.3)	(7.6)			口縁部 1/6、体部 1/4	
180	弥生土器	底部	SX203	ﾅﾃﾞ、２次焼成	平底から外傾する		(3.1)		7.5	底部完形	
181	弥生土器	甕	SX203	外面ﾊｹ、底面ﾅﾃﾞ、２次焼成	平底から外傾する		(3.6)		(7.3)	底部 1/4	

第２表－８　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
182	弥生土器	底部	SX203	底面ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(2.6)		(6.5)	底部 1/4	
183	弥生土器	壷	SX203	ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(6.1)		(7.2)	底部完形	
184	弥生土器	壷	SX203	内面・底面ﾅﾃﾞ	平底から外傾する		(5.4)		(6.5)	底部完形	
185	弥生土器	底部	SX203	内面板ﾅﾃﾞ、底面ﾅﾃﾞ木葉痕？、２次焼成	上げ底から外傾する		(7.3)		(7.3)	底部 1/4	
186	弥生土器	甕	SX203	内面底面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ	平底から内湾する		(5.0)		(9.5)	底部 1/8	
187	須恵器	椀	第1面包含層	ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	内湾ぎみで端部反って丸い	(12.0)	(2.7)			口縁部 1/6	
188	須恵器	杯身	第1面包含層	回転ﾅﾃﾞ	内湾し短く外反する反り、受部も短く丸い	(10.6)	(2.2)			口縁部 1/8	
189	須恵器	壺	第1面包含層	ﾅﾃﾞ、回転ﾅﾃﾞ	内湾する体部に外に開く断面方形の高台付く		(4.9)		(14.2)	底部 1/8	自然釉
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
190	弥生土器	甕	第2面包含層	外面ﾀﾀｷ、底面ﾅﾃﾞ、黒斑	不安定な平底から外傾する、		(3.8)		4.6	底部完形	
191	弥生土器	製塩土器	第2面包含層	ﾅﾃﾞ、黒斑	内湾する脚部で筒部は中実、体部外傾する		(5.7)		(6.2)	底部 3/4	
192	弥生土器	甕	第2面	ﾅﾃﾞののち外面のみﾐｶﾞｷ、黒斑	平底から外傾する		(2.2)		4.2	底部完形	
193	弥生土器	底部	第2面包含層	内外面ﾐｶﾞｷ、ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、	上げ底から外傾する		(6.2)		6.5	底部完形、体部若干	
194	弥生土器	壺	第2面	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾐｶﾞｷ、沈線２条、線刻、黒斑	内傾する		(5.5)			体部若干	
195	弥生土器	高杯	第2面包含層	ﾖｺﾅﾃﾞ	外傾し端部大きく肥厚		(3.2)		(18.4)	底部 1/6	
196	弥生土器	底部	第2面包含層	内面板ﾅﾃﾞ？、外面ﾕﾋﾞｵｻｴ・ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	上げ底で外傾する		(3.3)		4.3	底部完形	
197	弥生土器	壺	第2面	内外面ﾐｶﾞｷ、突帯付加ﾅﾃﾞ	外反し端部丸い、内面に文様の貼付突帯	(17.1)	(5.5)			口縁部 1/4	
198	弥生土器	壺	第2面	外面ﾐｶﾞｷ、３条沈線、刻み目	外反し端部丸い	(14.0)	(4.9)			口縁部 1/8	
199	弥生土器	壺	第2面	外面２条貼付突帯に刻み目、	内湾する		(5.2)			体部若干	
200	弥生土器	壺		内外面ﾐｶﾞｷ、削出し突帯	外反し端部丸い	(17.6)	(5.2)			口縁部 1/14	
201	弥生土器	壺	第2面包含層SR001東側	内面ﾐｶﾞｷ、外面ハケ整形、沈線２条	外反し端部丸い	(13.2)	(6.0)			口縁部 1/8	
202	弥生土器	壺	第2面	内外面ﾐｶﾞｷ、沈線１条	外反する	(16.0)	(3.0)			口縁部 1/4	
203	弥生土器	甕	第2面包含層SR001付近	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹから沈線、線刻	直立する		(9.7)			体部小片	
204	弥生土器	甕	包含層	内面ミガキ、外面ﾐｶﾞｷ、３条沈線	内湾する		(22.1)	(74.0)		体部若干	
205	弥生土器	蓋	第2面包含層	ﾕﾋﾞ成形からﾅﾃﾞ、ミガキ、	天井部凹み外反し水平に開き端部丸く垂下ぎみ	(23.3)	(11.1)		5.5	口縁部 1/6、底部完形	
206	弥生土器	甕	第2面包含層SR001付近	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾊｹ、沈線２条	僅かに内傾する体部から外反する頸部		(9.7)			体部若干	
207	弥生土器	甕	第2面包含層SR001東側	不明	内湾する体部から短く外反する口縁部で端部丸い	(29.3)	(21.0)	(30.8)		口縁部若干、体部 1/8	

第２表－９　出土土器観察表

番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
208	弥生土器	甕	第2面包含層	内面ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ、沈線２条、口縁部ﾕﾋﾞｵｻｴ、ﾅﾃﾞ、黒斑	内湾すら体部から短く外反する口縁部	(27.0)	(7.1)			口縁部1/14	
209	弥生土器	底部	第2面包含層SR001東側	内面ﾅﾃﾞ、磨滅	平底から外傾する		(5.3)		6.0	底部完形	
210	弥生土器	甕	第2面	内面ﾅﾃﾞ、外面ハケ、板ﾅﾃﾞ	上げ底ぎみから外傾する		(5.8)		(6.8)	底部1/4	
211	弥生土器	甕	第2面包含層	内面ｹｽﾞﾘ、底ﾅﾃﾞ、外面板ﾅﾃﾞ	平底から外反する		(3.8)		5.7	底部完形	
212	弥生土器	甕	第2面包含層SR001東側	底面ﾅﾃﾞ、黒斑、磨滅	平底から外傾する		(10.5)		7.5	底部完形	
213	弥生土器	壺	包含層	内面ﾐｶﾞｷ、外面著しく磨滅	平底から内湾する体部		(8.0)		(7.6)	底部1/2	
214	弥生土器	壺	第2面包含層SR001付近	内面ﾅﾃﾞ、外面ミガキ、底面ﾅﾃﾞ	上げ底から内湾する体部		(9.7)		(9.2)	底部1/3	
215	弥生土器	壺	第2面包含層	外面ミガキ	上げ底から外傾する		(10.1)		(9.2)	底部1/4	
216	弥生土器	底部	第2面包含層SR001東側	不明	平底から外反する		(5.7)		(9.6)	底部1/3	
番号	種別	器種	遺構　層位	技法　他	形態の特徴	法量（cm）				残存	備考
						口径	器高	腹径	底径		
217	弥生土器	底部	第2面包含層SR001東側	不明	平底から内湾する体部		(8.8)		(7.4)	底部1/3	
218	弥生土器	壺	西半包含層	内面ﾅﾃﾞ、外面ミガキ、底面ﾅﾃﾞ	上げ底から外傾する		(5.9)		8.5	底部完形	
219	弥生土器	壺	第2面西半包含層	底面ﾅﾃﾞ、外面ﾅﾃﾞ	上げ底から外傾する		(5.7)		(12.0)	底部1/4	

第 5 章　自然科学的分析

1．馬木遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、洲本市に所在する馬木遺跡から出土した弥生土器について、その材質(胎土)の特性を明らかにし、その生産や供給事情に関わる資料を作成する。馬木遺跡は、淡路島南部を流れる洲本川下流域の支流である樋戸野川左岸の微高地縁辺に位置する。

今回の試料では特に推定産地等の発掘調査所見は示されていないが、既存の地質資料から推定される地域性を検討し、さらに出土遺構や時期および器種等の属性が示されていることから、これらの所見と胎土との対応関係も検討する。

1. 試料

試料は、馬木遺跡から出土した弥生土器片12点である。試料には、試料番号 1 ～12までが付されている。これらのうち、試料番号 1 は弥生時代後期、試料番号 2 と 4 は弥生時代中期とされ、他の試料はいずれも弥生時代前期とされている。また、器種は壺と甕が 5 点ずつ、他に高坏と水差しが 1 点ずつある。以上各試料の実測番号、出土遺構および時期と器種を一覧にして第 3 表に示す。

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか(1999)の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観

第 3 表　試料一覧および胎土分類結果

試料番号	報告番号等	出土遺構	時代	器種	鉱物・岩石組成					粒径組成							砕屑物		
					A1	B	C1	C6	C9	1	2	3	4	5	6	7	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
1	報 41	SR001（下層）	弥生時代後期	壺		■							■						■
2	報 8	SD007	弥生時代中期	高杯			■								■			■	
3	報 118	SD202	弥生時代前期	甕	■							■						■	
4	報 7	SD007	弥生時代中期	水差し	■								■						■
5	報 77	SK201	弥生時代前期	壺	■											■	■		
6	報 96	SK201	弥生時代前期	甕					■	■								■	
7	報 106	SK205	弥生時代前期	壺	■											■	■		
8	報 109	SK205	弥生時代前期	甕	■										■		■		
9	参考 1	SD203	弥生時代前期	甕				■			■							■	
10	参考 2	SX203	弥生時代前期	甕				■				■						■	
11	参考 3	SK201	弥生時代前期	壺	■									■				■	
12	参考 4	SD205	弥生時代前期	壺	■								■					■	

察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を表4・5表、第4～10図に示す。これまでの兵庫県下の遺跡出土土器胎土分析において設定した鉱物片および岩石片の種類構成による胎土分類では、A類からN類までの種類が設定され、さらに、各種類について副次的な鉱物や岩石の種類によって細分もしている。今回の結果も、その基準に従って分類してみると以下のようになる。

試料番号１は、角閃石の鉱物片が突出して多い組成である。他に石英と斜長石および酸化角閃石の鉱物片を少量伴い、岩石片では花崗岩類のみを少量含むという特徴が把握される。このような組成は、これまでの分類ではB類に相当する。今回の試料では、B類の組成を示す試料は試料番号１のみである。

試料番号２は、石英と斜長石の鉱物片が比較的多く、カリ長石も少量伴い、角閃石の鉱物片も極めて微量であるが含まれている。岩石片は全体的に少量であり、ほぼ花崗岩類と多結晶石英のみから構成される。この岩石片組成の特徴により、試料番号２はC類に分類される。微量ながらも角閃石の鉱物片を伴うことから、C類の中でもC１類に分類される。C１類に分類される試料も、試料番号２の１点のみである。

試料番号３は、石英の鉱物片が多く、少量のカリ長石と斜長石を伴う鉱物片の組成と、チャートなどの堆積岩類と、凝灰岩および流紋岩・デイサイトなどの火砕岩、さらに花崗岩類の、大きくみて３種類の岩石片が同程度の量比で混在することが特徴である。これまでの分析例では、このような組成をA類としており、３種類の岩石片以外に特に目立つような岩石片を伴わないことから、A１類に分類される。今回の試料では、同様の組成を示すものとして、試料番号４、7、11、12の4点が認められ、これらもA１類に分類される。なお、これらの試料では、凝灰岩および流紋岩・デイサイトはいずれも結晶質であることも特徴としてあげられる。また、試料番号５および試料番号８については、堆積岩類と花崗岩類を含むが、凝灰岩または流紋岩・デイサイトのいずれも計数されていない。しかし、砂分全体の量が少ないことや、備考に示した基質の特徴が試料番号３や４あるいは７と類似することから、ここではA１類に分類する。

試料番号６も、堆積岩類の頁岩と花崗岩類を含むが、凝灰岩および流紋岩・デイサイトが計数されていない。ただし、上述したA１類の試料との違いとして、カリ長石の量比が、斜長石を若干上回っていることが指摘できる。このことから、試料番号６についてはA１類には分類せず、花崗岩類の岩石片を主体とするC類に分類される。C類の中の分類では、これまでの分析例に微量の頁岩を伴うというC９類が分類されていることから、試料番号６はC９類に分類する。

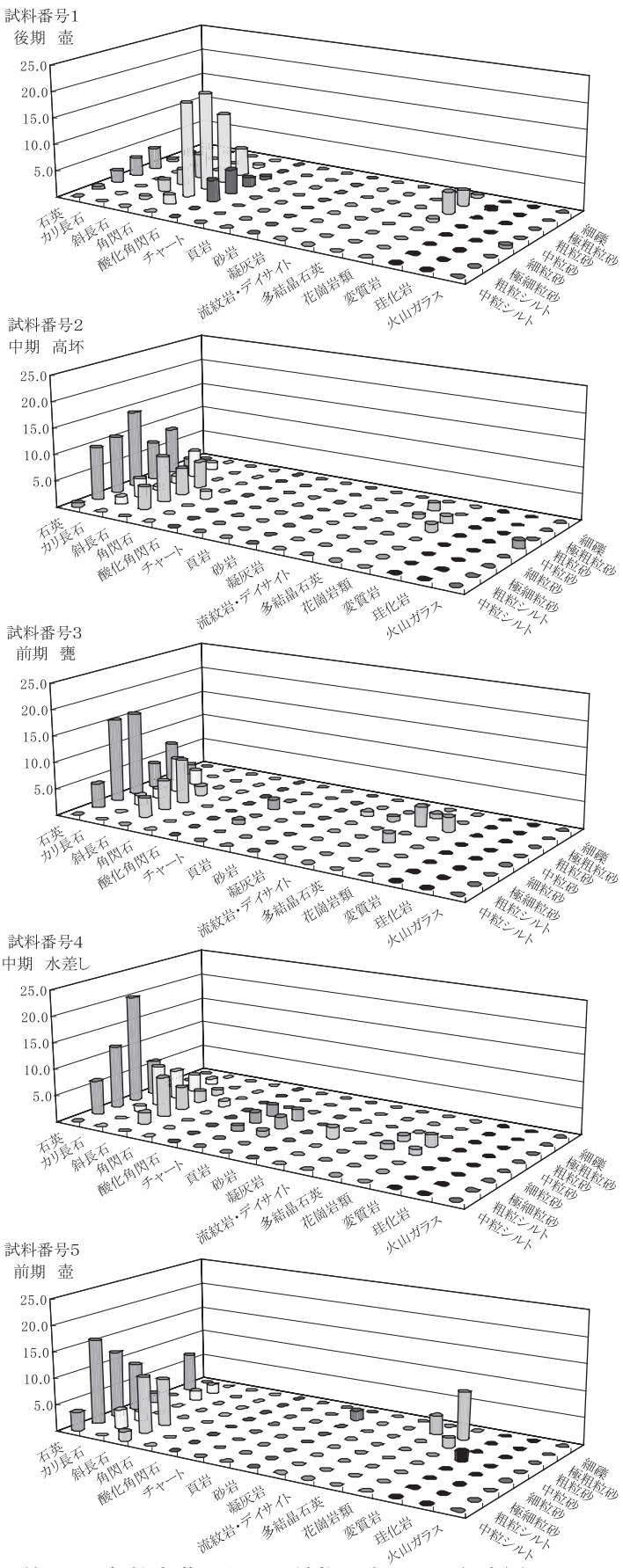
試料番号９と10は、ともにほぼ花崗岩類と多結晶石英のみによる岩石片組成が特徴であり、かつ石英が多く、カリ長石が斜長石よりやや多い鉱物片の組成も特徴となる。このような特徴から、試料番号９と10の２点は、これまでの分類におけるC６類に分類される。

第４表　薄片観察結果(1)

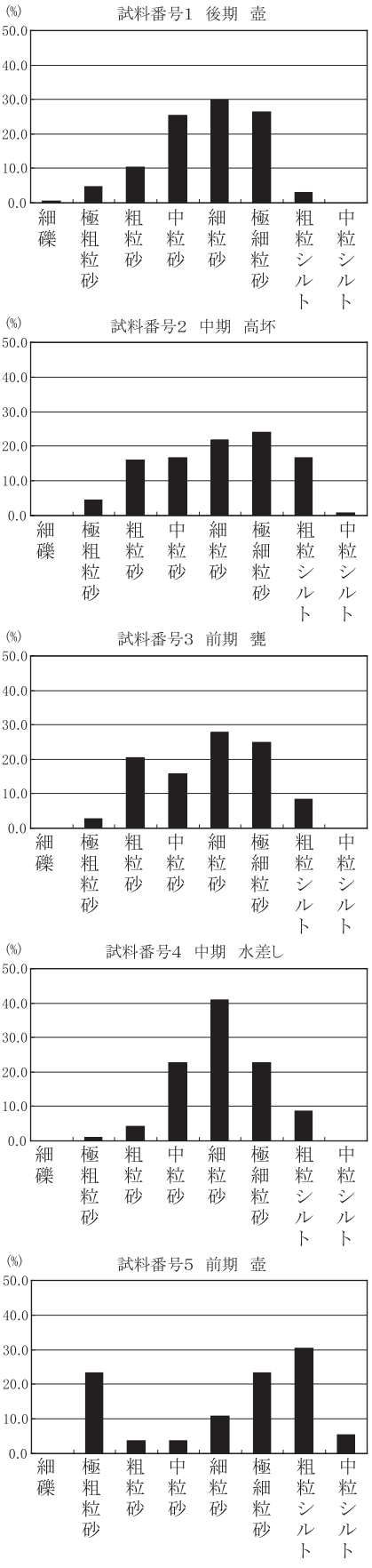
試料番号・時期・器種	砂粒区分	砂粒の種類構成																										合計
		鉱物片										岩石片															その他	
		石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	植物珪酸体	
1 後期 壺	砂 細礫															1								1	0
	砂 極粗粒砂	1				1										5				1				8	2
	砂 粗粒砂	1				9	1									7								18	29
	砂 中粒砂	7		8	1	23	3			1						1								44	14
	砂 細粒砂	6		5		32	8																1	52	16
	砂 極細粒砂	4		4		31	7																	46	8
	砂 粗粒シルト	1		1		3																		5	0
	砂 中粒シルト																							0	0
	基質																								499
	孔隙																								11
	備考	基質は、褐色のシルト・粘土で埋められ、微細な角閃石が散在する。角閃石の多くは弱酸化している。火山ガラスはバブルウォール型で褐色ガラスも認められる。																							
2 中期 高坏	砂 細礫																							0	0
	砂 極粗粒砂	2	2												2									6	2
	砂 粗粒砂	12	7												1	2								22	18
	砂 中粒砂	10	2	7												2						2		23	58
	砂 細粒砂	20	1	7		2																		30	36
	砂 極細粒砂	15	5	12						1														33	8
	砂 粗粒シルト	14	2	6																			1	23	7
	砂 中粒シルト	1																						1	0
	基質																								537
	孔隙																								27
	備考	基質は雲母粘土鉱物質であるが、酸化により酸化鉄が広く分布している。火山ガラスはバブルウォール型。																							
3 前期 甕	砂 細礫																							0	0
	砂 極粗粒砂	2													1									3	11
	砂 粗粒砂	8	3											1	1	4	3	2						22	34
	砂 中粒砂	5	7	2							2									1				17	21
	砂 細粒砂	17	2	9												2								30	6
	砂 極細粒砂	17	2	6				1			1													27	1
	砂 粗粒シルト	5		4																				9	2
	砂 中粒シルト																							0	0
	基質																								438
	孔隙																								21
	備考	基質は黒雲母質。																							
4 中期 水差し	砂 細礫																							0	0
	砂 極粗粒砂		1																					1	13
	砂 粗粒砂		3	1																				4	49
	砂 中粒砂	6	5	2		1					2	2			1	2								21	6
	砂 細粒砂	19	7	4							2	2		2	1	1								38	8
	砂 極細粒砂	11	1	7							1	1												21	8
	砂 粗粒シルト	6		2																				8	5
	砂 中粒シルト																							0	1
	基質																								285
	孔隙																								8
	備考	基質は雲母質。凝灰岩は結晶質。																							
5 前期 壺	砂 細礫																							0	0
	砂 極粗粒砂	4	1										1			2	5							13	13
	砂 粗粒砂		1														1							2	49
	砂 中粒砂	1																			1			2	6
	砂 細粒砂	5							1															6	8
	砂 極細粒砂	7	1	5																				13	8
	砂 粗粒シルト	9	2	6																				17	5
	砂 中粒シルト	2		1																				3	1
	基質																								381
	孔隙																								10
	備考	基質は雲母質。変質岩は水酸化鉄で汚染された風化岩。																							
6 前期 甕	砂 細礫																							0	0
	砂 極粗粒砂	2														1	1							4	13
	砂 粗粒砂	10	3													1	2							16	49
	砂 中粒砂	1	4	2												1								8	6
	砂 細粒砂	6	6	1								1												14	8
	砂 極細粒砂	4	2	3		1																		10	8
	砂 粗粒シルト	4		1																				5	5
	砂 中粒シルト																							0	1
	基質																								235
	孔隙																								9
	備考	基質は黒雲母質で褐色を呈し、セリサイトが点在する。																							

第５表　薄片観察結果 (2)

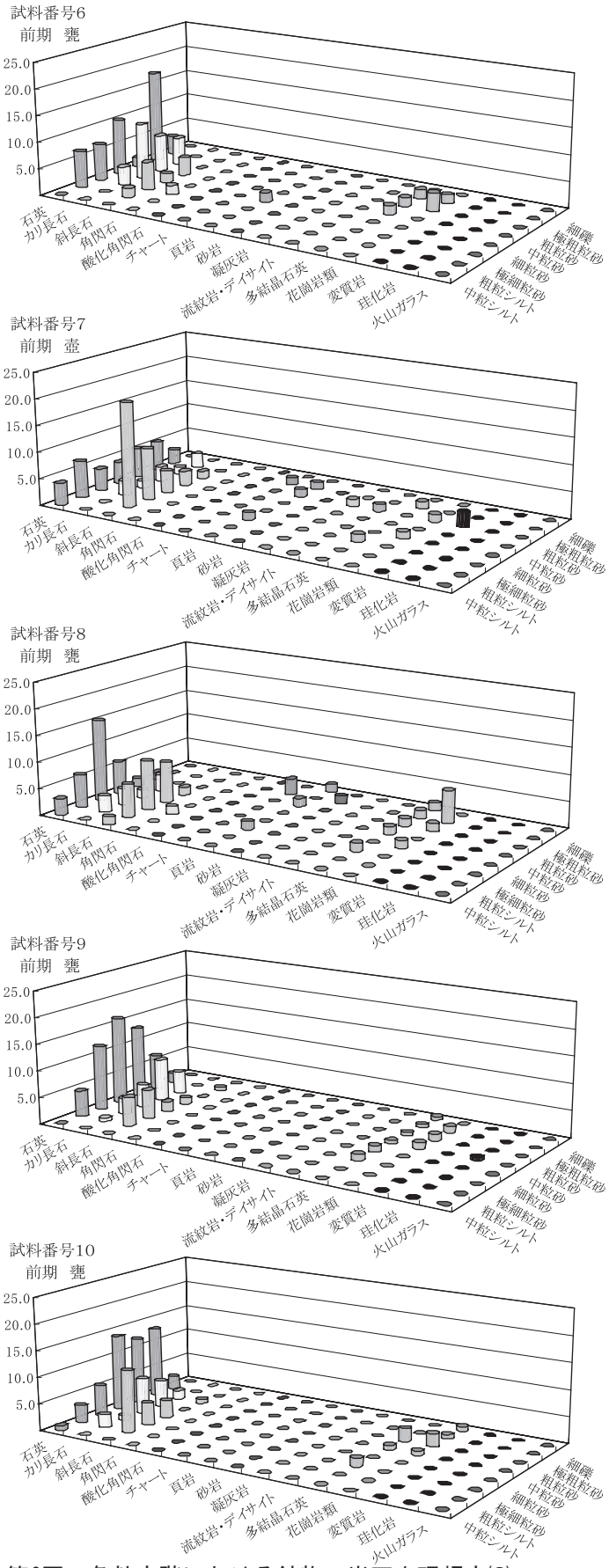
試料番号・時期・器種	砂粒区分		砂粒の種類構成																										合計
			鉱物片										岩石片															その他		
			石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	ホルンフェルス	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	植物珪酸体	
7 前期 壺	砂	細礫																								0	0
		極粗粒砂	2	2								1	1				1									7	2
		粗粒砂	4	1	1								1		1	1		1				2				12	29
		中粒砂	4	2	2																					8	14
		細粒砂	3	1	3													1								8	16
		極細粒砂	3	2	7								1				1									14	8
		粗粒シルト	5		14																					19	0
		中粒シルト	3																							3	0
	基質																										441
	孔隙																										15
	備考		基質は雲母質。試料内部は褐色を呈するが、表面付近は淡褐色を示す。流紋岩、凝灰岩は結晶質。																								
8 前期 甕	砂	細礫											1				1									2	0
		極粗粒砂										2		1			1	4								8	2
		粗粒砂	1										1				1	1								4	18
		中粒砂	1	2	1												1									5	58
		細粒砂	4	1	5													1								11	36
		極細粒砂	10	2	6		1						1				1									21	8
		粗粒シルト	4	2	4																					10	7
		中粒シルト	2		1																					3	0
	基質																										435
	孔隙																										22
	備考		基質は黒雲母質で淡褐色を示す。																								
9 前期 甕	砂	細礫															1									1	0
		極粗粒砂	3		1												1	2								7	11
		粗粒砂	11	7													1	2								21	34
		中粒砂	22	13	2												1	2		1			1			42	21
		細粒砂	27	7	3												2									39	6
		極細粒砂	20	5	9												2									36	1
		粗粒シルト	8	1	9																					18	2
		中粒シルト																								0	0
	基質																										672
	孔隙																										22
	備考		基質は黒雲母質で、セリサイトが散在する。																								
10 前期 甕	砂	細礫																1								1	0
		極粗粒砂	3															1								4	13
		粗粒砂	16	2	1												3	3								25	49
		中粒砂	15	6													1	1								23	6
		細粒砂	17	8	4																					29	8
		極細粒砂	7	1	5												2									15	8
		粗粒シルト	4	3	14																					21	5
		中粒シルト	1																							1	1
	基質																										596
	孔隙																										17
	備考		基質は黒雲母質で褐色を示す。																								
11 前期 壺	砂	細礫																								0	0
		極粗粒砂	4	2								2	1			2	1	2								14	13
		粗粒砂	15	3	2							4	3		5	4	1									37	49
		中粒砂	5	6	4							1	2													18	6
		細粒砂	14	7	6								1		2		1					1				32	8
		極細粒砂	19	7	9												1									36	8
		粗粒シルト	10	2	11																					23	5
		中粒シルト			1																					1	1
	基質																										774
	孔隙																										36
	備考		基質は黒雲母質。流紋岩・凝灰岩は結晶質。																								
12 前期 壺	砂	細礫																								0	0
		極粗粒砂		3	1							3	1	1	3		1	3					1			17	13
		粗粒砂	6	3								1	2	2	4	1	3	1					1			24	49
		中粒砂	7		1										2		1	1								12	6
		細粒砂	29	3	14					1		6					15									68	8
		極細粒砂	31	1	7				1	1		1					5									47	8
		粗粒シルト	22		4																					26	5
		中粒シルト	5		1																					6	1
	基質																										862
	孔隙																										28
	備考		基質はほとんど酸化鉄、黒雲母からなる。凝灰岩・流紋岩は結晶質。頁岩は珪質頁岩様の岩相を示す。																								



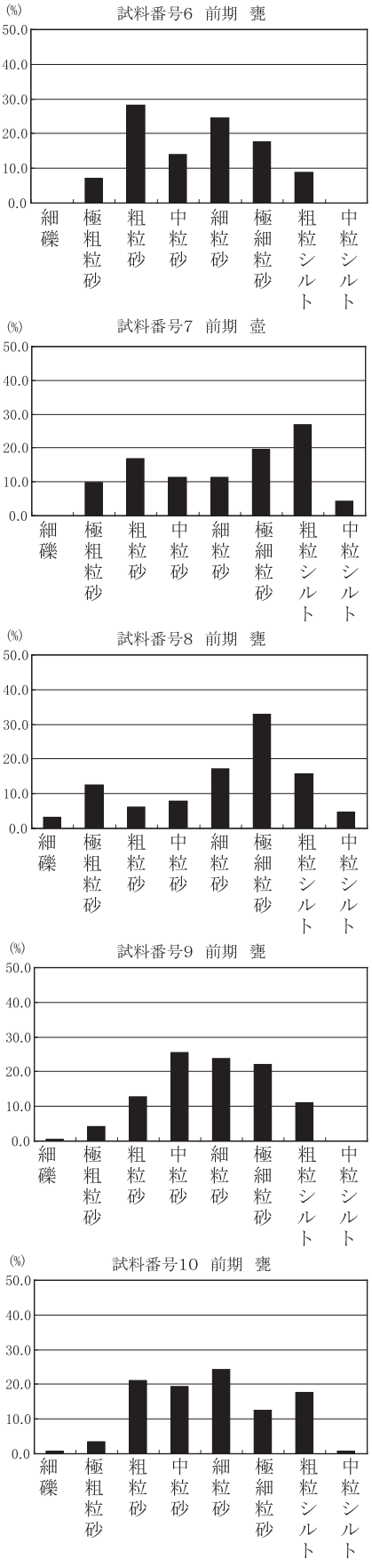
第4図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



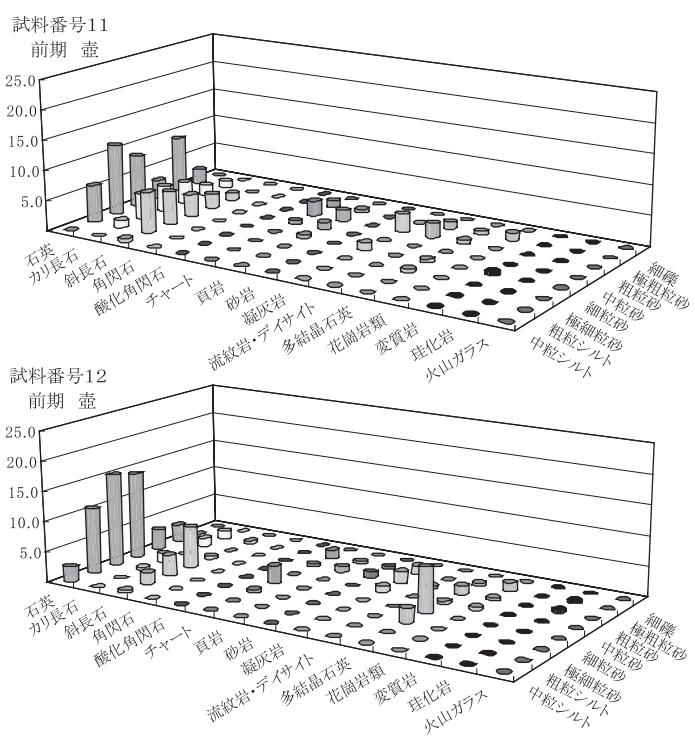
第5図　胎土中の砂の粒径組成(1)



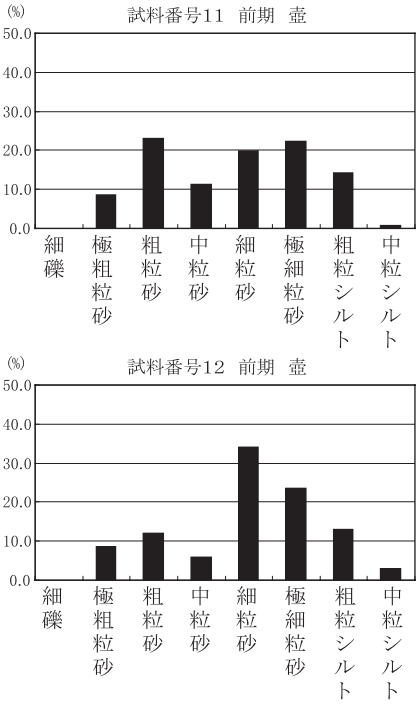
第6図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



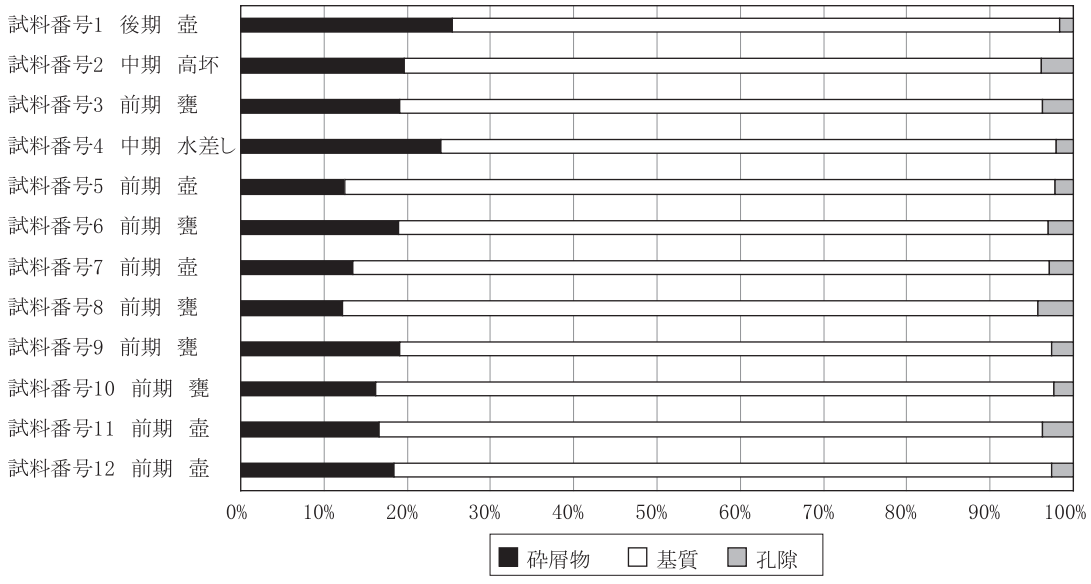
第7図　胎土中の砂の粒径組成(2)



第8図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(3)



第9図　胎土中の砂の粒径組成(3)



第10図　砕屑物・基質・孔隙の割合

次に各試料の砂分全体の粒径組成をみると、モードを示す粒径は試料により異なる。ここでは、モードを示す粒径により、粗粒傾向の組成から細粒傾向の組成に向かって、順に1類から7類までの分類を設定した。各分類の内容とそれに分類される試料を以下に示す。

1類:粗粒砂をモードとし、次いで細粒砂が多い。試料番号6

2類:中粒砂をモードとする。試料番号9。

3類:細粒砂をモードとするが、粗粒砂も比較的多い。試料番号3、10。

4類:細粒砂をモードとするが、3類とは異なり、粗粒砂は少量である。試料番号１、４、12。

5類:極細粒砂をモードとするが、粗粒砂も同程度に多い。試料番号11。

6類:極細粒砂をモードとし、次いで細粒砂が多い。試料番号２、８。

7類:粗粒シルトをモードとする。試料番号５、７。

砕屑物・基質・孔隙の割合では、砕屑物の割合が15%未満、15～20%と20～25%で３分することができる。順にⅠ類～Ⅲ類とすると、今回の試料では以下の通りに分けられる。

Ⅰ類:試料番号５、７、８

Ⅱ類:試料番号２、３、６、９、10、11、12

Ⅲ類:試料番号１、４

なお、上述した各試料の鉱物・岩石組成、粒径組成および砕屑物の量比における各分類結果は、一覧にして第３表に併記する。

4. 考察

⑴　胎土の鉱物・岩石組成と馬木遺跡の地質学的背景

馬木遺跡の立地する沖積低地は、樋戸野川と洲本川の両河川により供給された砕屑物により構成されていると考えられる。したがって、馬木遺跡から出土した弥生土器が、馬木遺跡周辺の堆積物を材料としていた場合には、土器胎土の鉱物・岩石組成には両河川の地質学的背景が反映されている可能性が高い。樋戸野川は諭鶴羽山地北東部縁辺付近を水源とし、中流域には両岸に独立丘状の丘陵地が分布し、下流域では洲本川の沖積低地で洲本川に合流する。淡路島の地質については、高橋ほか(1992)、牧本ほか(1995)などを参照することができる。諭鶴羽山地は、白亜紀後期の主に砂岩泥岩互層からなる和泉層群により構成され、樋戸野川中流域に分布する丘陵も同様の地質により構成されている。一方、洲本川も、その水源(上流は鮎屋川と初尾川になるが)は諭鶴羽山地にあり、中流域の左岸側には先山山地の南部に相当する山地が分布し、右岸側には段丘が広がっている。下流域では両岸に丘陵が分布し、河口に形成された沖積低地の縁辺を区切っている。先山山地南部も和泉層群により構成されているが、その南部には砂泥互層からなる和泉層群主体部(北阿万累層)が分布し、その北側には主に礫岩層からなる西淡累層が分布している。礫岩の礫種の主体は泉南流紋岩類とされ、チャートや珪質頁岩、砂岩、花崗岩類なども含まれているとされている。西淡累層のさらに北側の先山山地には、角閃石黒雲母花崗閃緑岩からなる洲本花崗閃緑岩が分布している。その下流側の丘陵地のうち、左岸側の低平な地形の部分は新第三紀鮮新世～第四紀更新世の大阪層群により構成され、より下流域の小高い部分は洲本花崗閃緑岩により構成されている。右岸側の丘陵地は、和泉層群の砂泥互層により構成されている。

今回の試料では、12点のうち、半数を超える７点までがＡ１類に分類された。この結果により、Ａ１類がいわゆる地元産の土器胎土に相当することが窺える。Ａ１類の特徴である堆積岩類、凝灰岩、流紋岩・デイサイト、花崗岩類のうち、堆積岩類は和泉層群に、凝灰岩および流紋岩・デイサイトは結晶質であることから泉南流紋岩類に、花崗岩類は、Ａ１類の組成において角閃石を伴い斜長石がカリ長石よりやや多い傾向が認められることから洲本花崗閃緑岩に、それぞれ由来を求めることができる。したがって、Ａ１類は、馬木遺跡周辺の堆積物が使用された胎土であることを示唆している可能性が高いと考えられる。

Ａ１類以外の５点の試料のうち、４点は花崗岩類の多いことが特徴であるC類に分類された。C類のう

ち、C１類については、A１類と同様にカリ長石よりも斜長石の多い傾向が認められることと角閃石の鉱物片が認められたことから、洲本花崗閃緑岩に由来する可能性のあることが考えられる。花崗岩類の岩石片の多いことは、材料となった堆積物の採取地が、例えば洲本花崗閃緑岩からなる洲本川下流左岸の小高い丘陵地内あるいは縁辺であったことを示唆していると考えられる。C６類については、鉱物片の組成においてカリ長石の方が斜長石よりも多い傾向が窺えること、石英と長石類以外に鉱物片が認められないことさらには土器の基質が黒雲母質であることも考慮すれば、黒雲母花崗岩を主体とする地質に由来する可能性がある。淡路島には、先山山地中部から北部に分布する先山花崗岩と淡路島北部の摩耶山を中心とする山並みに広く分布する東山寺花崗岩が黒雲母花崗岩からなるとされている。馬木遺跡からの距離からみれば、C６類は先山花崗岩の分布域内あるいは縁辺に由来するとも考えられるが、現時点では、C６類の地域性を特定することはできない。C９類については、C６類と同様にカリ長石が斜長石より多い傾向が窺えるものの、角閃石を含むことや頁岩を含むことなどから、C６類の由来する地域とは異なる地域性が推定される。ただし、現時点ではC９類に相当するような具体的な地質を淡路島内の地質記載から見出すことはできない。もちろんこれだけでC９類が島外産を示すということにはならないが、今後、計数された砂分の全体量の多い結果によってC９類が見出されることを確かめるなどの検証が必要と考えられる。

今回の試料の中で1点のみに認められたB類の胎土については、石英や長石類が角閃石に対して圧倒的に少ないという点で、上述したA類やC類とは明らかに異質な地質学的背景に由来すると考えることができる。これまでの兵庫県内における弥生土器の胎土分析例では、B類の出現は非常に限定的であり、例えば伊丹市の小阪田遺跡の弥生土器では、生駒西麓産とされた土器にのみ認められている(矢作・石岡,2006)。今後、実際に生駒西麓産の弥生土器の分析事例を得た上でB類の地域性を検討すべきであろう。

⑵　弥生土器の時期・器種と胎土との対応関係

今回の試料12点のうち、９点までが前期であり、中期は２点、後期は１点という構成であるため、中期や後期において胎土の傾向を把握することはできない。前期においては、９点中６点がA１類であり、A１類の胎土が主体をなす傾向が窺える。前述したようにA１類は、馬木遺跡周辺の堆積物が使用された土器であることを示す可能性が高いことから、馬木遺跡の前期の弥生土器は、その多くが遺跡周辺で作られたと推定される。その一方で、馬木遺跡周辺、少なくとも洲本川下流域および樋戸野川下流域ではない地域で作られたことを示す可能性のあるC６類という胎土を有する土器も少数ながら混在している。C６類の具体的地域性は特定できないと述べたが、例えば先山花崗岩の露出する山地周辺ということでは、馬木遺跡から北西方へ約４kmの洲本市安坂付近や、同８km離れた先山山地の西側の旧五色町東南部付近が想定され、東山寺花崗岩の露出する山地周辺ということでは、馬木遺跡から北へ約15kmの旧一宮町北部を流れる新川の右岸川に分布する山地縁辺などの地域があげられる。いずれにしても、C６類の土器は、馬木遺跡の弥生時代前期において少なくとも数km以上の土器の動きがあった可能性のあることを示唆している。

器種別にみると、弥生時代前期の試料９点のうち、甕が５点、壺が４点という構成である。前期の甕５点のうち、馬木遺跡周辺を示すA１類は２点であり、馬木遺跡周辺ではない可能性の高いC類が３点もある。これに対して前期の壺４点はいずれもA１類である。この結果からは、馬木遺跡の弥生時代前期における甕と壺の製作、供給あるいは使用等に何らかの異なる事情のあったことが推定される。

弥生時代中期の土器は、高坏と水差しであり、水差しはA１類、高坏はC１類に分類された。中期に

おける甕や壺の胎土を確認する必要はあるが、高坏のC１類という胎土は、器種に依存しているとも考えられる。そして、弥生時代後期の壺については、B類という限定的な胎土を示したことから、淡路島外から搬入された可能性が高いと考えられる。

なお、胎土の粒径組成および砕屑物の割合については、鉱物・岩石組成とほぼ同調していると言える。粒径組成は、１類と２類を粗粒傾向の強い組成、３～５類を中間的な組成、６類と７類を細粒傾向の強い組成とすると、A１類の胎土は、中間的な組成が4点、細粒傾向の組成が３点で２分された。また、C１類は細粒傾向、C６類は粗粒傾向～中間的、C９類は粗粒傾向を示し、分類ごとに粒径組成も異なっている。

ところで、馬木遺跡から北へ１kmほどの洲本川左岸側に位置する下加茂遺跡から出土した弥生土器の壺および甕の胎土分析では、C類に相当する胎土が主体を占めるという傾向が得られている。これは、下加茂遺跡のすぐ背後に洲本花崗閃緑岩からなる山地が迫っているという地質学的背景が反映されていると考えられる。また、ホルンフェルスの岩石片を多量に含むE類という胎土の甕も認められており、それが紀伊型甕とされる所見と一致するなどの結果も得られている。今回の分析結果との違いが比較的明瞭であることから、淡路島における弥生土器の製作や供給に関する事情は、非常に局所的であったことが推定される。その一方で、今回の分析におけるB類の胎土や上述した下加茂遺跡におけるE類の胎土など、淡路島外からの搬入という広域的な動きも分析結果から示唆されている。今後の分析事例の蓄積により、淡路島における弥生土器の事情がより明らかになることが期待される。

引用文献

牧本　博・利光誠一・高橋　浩・水野清秀・駒澤正夫・志和龍一,1995,20万分の1地質図幅「徳島」,地質調査所.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
高橋　浩・寒川　旭・水野清秀・服部　仁,1992,洲本地域の地質.地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,107p.
矢作健二・石岡智武,2006,小阪田遺跡出土弥生土器の胎土分析.兵庫県文化財調査報告　第297冊　伊丹市　小阪田遺跡-大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線(延伸部)建設に伴う埋蔵文化財調査報告書-,62-76.

２．馬木遺跡出土材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

馬木遺跡は洲本市の樋戸野川沿いに位置しており、弥生時代を中心とする遺跡である。ここから出土した炭化材および生材の樹種同定結果を報告する。

2. 試料と方法

試料は弥生時代前期と推定される第2遺構面から検出された各遺構から採取された。すなわち、土坑SK201の炭化材2点（No.1、2）、SK213の炭化材1点（No.3）、旧河道SR001下層の炭化材1点（No.4）、同じくSR001下層の生材が1点（No.5）の合計5点である。

手あるいはカッターナイフを用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料を作製した。直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、ツブラジイ、シイノキ属、ノブドウ属、タイミンタチバナの広葉樹4分類群と、分類群が特定できなかった散孔材1分類群、合計5分類群が確認された。結果の一覧を表1に示す。

第６表　樹種同定結果一覧

No.	遺構	備考	樹種	木取り	年輪数（残存径）
1	SK201	取り上げB	ツブラジイ	丸木？	5（半径：1cm）
2	SK201	取り上げC	ノブドウ属	半割？	6（直径：1.5cm）
3	SK213	－	タイミンタチバナ	丸木	13?（直径：2cm）
4	SR001	下層	散孔材	不明	不明
5	SR001	下層	シイノキ属	破片（生材）	不明

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

⑴　ツブラジイ　Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky　ブナ科　図版1　1a-1c(No.1)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で割裂性･乾燥は中庸、耐久性は著しく低い。

⑵　シイノキ属　Castanopsis　ブナ科　図版1　2a-2c(No.5)

環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きいが接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一となる。放射組織は単列同性である。

シイノキ属は暖帯に分布する常緑高木で、スダジイとツブラジイがある。ツブラジイには集合放射組織があり、スダジイにはみられない。試料の状態が悪く集合放射組織の有無が確認できなかったため、シイノキ属とした。

⑶　ノブドウ属　Ampelopsis　ブドウ科　図版1　3a-3c(No.2)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた小道管が放射方向に数個複合して分布する環孔材～半環孔材である。道管の穿孔は単一で、道管相互壁孔は階段状となる。放射組織は10列幅以上ある異性で、細胞高も非常に高い。

ノブドウ属は落葉性のつる性木本で、ノブドウとウドカズラがある。ノブドウは北海道～沖縄まで広く分布し、主に山野に生育する。

⑷　タイミンタチバナ　Myrsine seguinii H.Lév.　ヤブコウジ科　図版1　4a-4c(No.3)

小型の道管が単独もしくは数個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は幅5～8列程度で平伏・直立・方形細胞が混在する異性であり、細胞高は非常に高い。

タイミンタチバナは千葉県以西の暖帯から亜熱帯に分布する、常緑の小高木である。常緑広葉樹林内によく生育する。材は耐朽・保存性は高いが、反りや捩れなどの狂いは生じやすい。

⑸　散孔材　Diffuse-porous wood　図版1　5a-5c(No.4)

やや小型の道管が分布する散孔材である。放射組織は3～5列程度と思われる。試料の状態が悪く、道管の配列や穿孔の形状等の観察が出来なかったため、これ以上の識別は困難である。

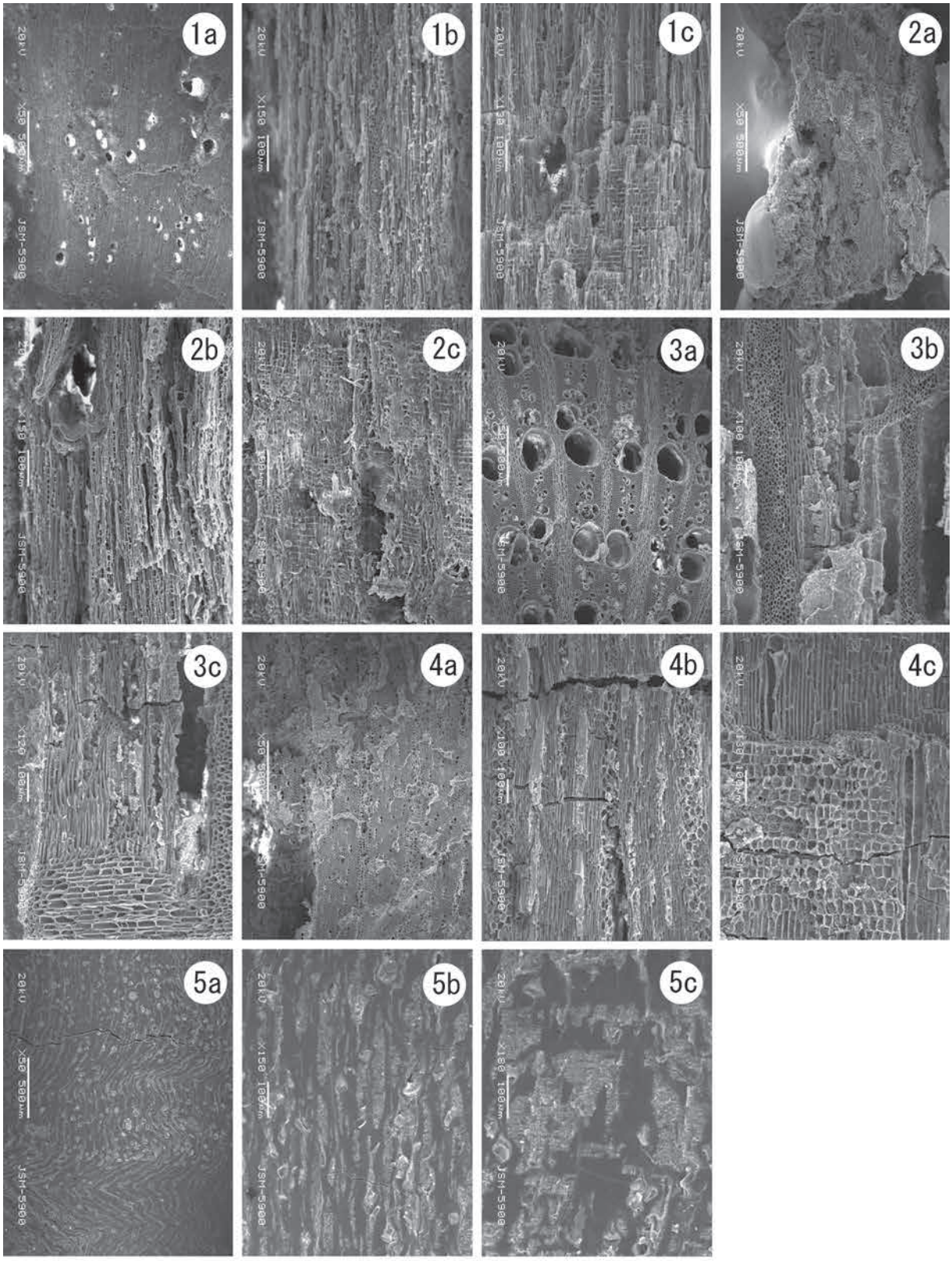
4. まとめ

試料No.1のツブラジイとNo.3のタイミンタチバナは丸木と思われるが、直径が2cm程度と細く年輪も密であるため、枝材と思われる。試料No.2のノブドウ属は直径1.5cm程度の半割状だが、埋没中に形状が崩れた可能性も考えられ、元の形は不明である。SR01から出土した材はいずれも破片状であった。シイノキ属とタイミンタチバナは重硬な材であるが、ノブドウ属はつる性の木本であるため、木材としてはあまり利用されない。

弥生時代前期頃の当地域周辺は、アカガシ亜属を中心とする照葉樹林と、スギ・モミ属・ツガ属・コウヤマキ属などの温帯性針葉樹の存在が確認されている（安田・三好，1998）。今回の分析で検出されたツブラジイを含むシイノキ属、ノブドウ属、タイミンタチバナはいずれも常緑広葉樹帯に分布する常緑または落葉の広葉樹であるため、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したものと考えられる。

引用文献

安田喜憲・三好教夫（1998）日本列島植生史．302p，朝倉書店．



第11図 馬木遺跡出土材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. ツブラジイ（No.1）、2a-2c. シイノキ属（No.5）、3a-3c. ノブドウ属（No.2）、4a-4c. タイミンタチバナ（No.3）、5a-5c. 散孔材（No.4）

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

3．馬木遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

馬木遺跡は、兵庫県洲本市物部3丁目（北緯34°20′17″、東経134°52′44″）に所在する。測定対象試料は、土坑（SK201）床面出土木炭（1：IAAA-110548、2：IAAA-110549）、自然堆積層の黒灰シルト採取土壌（3：IAAA-110550）、同砂礫層出土木片（4：IAAA-110551）の合計4点である（第7表）。

2　測定の意義

遺構、地層の時期を確定する。

3　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

⑵　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第7表に記載する。

⑶　試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

⑷　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

⑹　グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

⑴　δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第7表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

⑵　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として第8表に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範

囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を第7表に、補正していない値を参考値として第８表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６　測定結果

試料の^{14}C年代は、土坑（SK201）床面出土木炭1が2440±20yrBP、2が2430±20yrBP、自然堆積層の黒灰シルト採取土壌3が3790±20yrBP、同砂礫層出土木片4が4540±20yrBPである。土坑（SK201）床面出土木炭1、2の値は誤差（±1σ）の範囲でよく一致し、ほぼ同年代を示す。暦年較正年代（1σ）は、1が716～414cal BC、2が706～414cal BC、3が2282～2151cal BC、4が3357～3125cal BCの間に各々複数の範囲で示され、1、2が縄文時代晩期末から弥生時代前期頃、3が縄文時代後期前葉頃、4が縄文時代中期前葉頃に相当する。

試料の炭素含有率は、木炭、木片がいずれも50%以上、土壌が約1%と各々適正な値で、化学処理、測定上の問題は特に認められない。

第７表　測定結果(1)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-110548	1	土坑（SK201） 床面	木炭	AAA	-27.37 ± 0.48	-27.37 ± 0.48	73.85 ± 0.21
IAAA-110549	2	土坑（SK201） 床面	木炭	AAA	-27.41 ± 0.56	-27.41 ± 0.56	73.86 ± 0.20
IAAA-110550	3	黒灰シルト	土壌	HCl	-26.03 ± 0.62	-26.03 ± 0.62	62.38 ± 0.19
IAAA-110551	4	砂礫層	木片	AAA	-30.00 ± 0.67	-30.00 ± 0.67	56.84 ± 0.17

［＃4473］

第８表　測定結果(2)

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-110548	2,470 ± 20	73.49 ± 0.19	2,435 ± 22	716calBC - 695calBC (9.1%) 540calBC - 479calBC (30.7%) 471calBC - 414calBC (28.3%)	748calBC - 687calBC (19.9%) 666calBC - 646calBC (4.9%) 589calBC - 580calBC (0.9%) 555calBC - 407calBC (69.7%)
IAAA-110549	2,470 ± 20	73.49 ± 0.18	2,434 ± 22	706calBC - 695calBC (4.7%) 539calBC - 414calBC (63.5%)	747calBC - 688calBC (19.3%) 665calBC - 646calBC (4.6%) 588calBC - 581calBC (0.7%) 554calBC - 407calBC (70.8%)
IAAA-110550	3,810 ± 20	62.24 ± 0.17	3,791 ± 24	2282calBC - 2249calBC (30.9%) 2232calBC - 2198calBC (25.9%) 2166calBC - 2151calBC (11.4%)	2292calBC - 2190calBC (73.4%) 2181calBC - 2141calBC (22.0%)
IAAA-110551	4,620 ± 20	56.26 ± 0.15	4,537 ± 24	3357calBC - 3330calBC (20.8%) 3215calBC - 3183calBC (24.5%) 3158calBC - 3125calBC (22.8%)	3364calBC - 3311calBC (26.7%) 3295calBC - 3286calBC (1.5%) 3275calBC - 3265calBC (1.9%) 3239calBC - 3105calBC (65.3%)

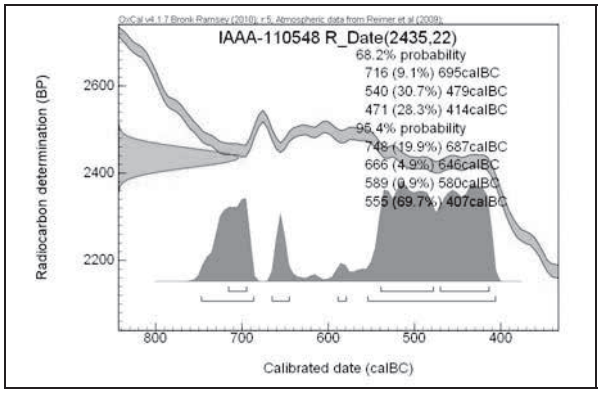
［参考値］

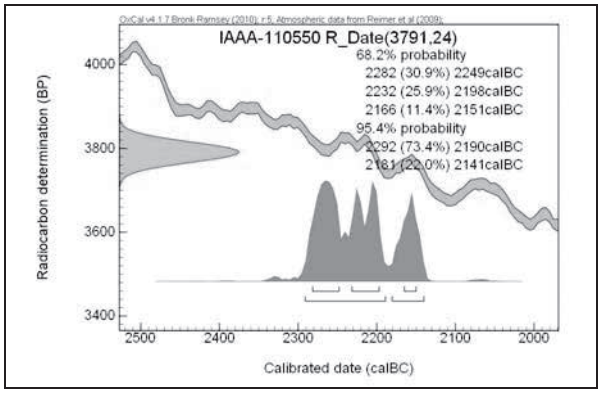
文献

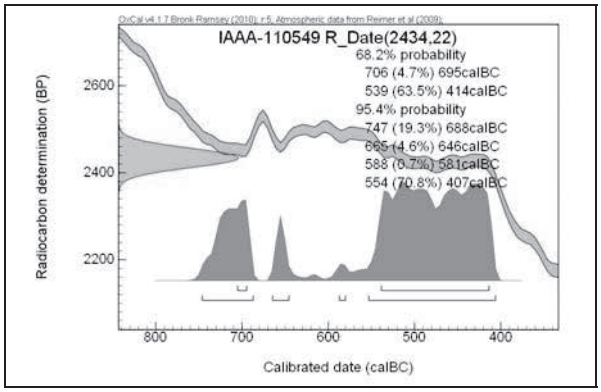
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

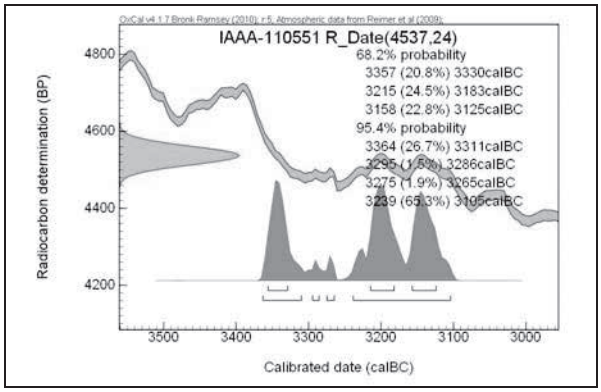
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150









第12図　[参考]暦年較正年代グラフ

４．馬木遺跡の地形環境

青　木　哲　哉（立命館大学非常勤講師）

本稿では、馬木遺跡における地形環境について報告する。調査では、空中写真の判読と現地踏査にもとづいて地形を分類するとともに、調査区で堆積物の観察を実施した。地形分類に際しては5,000分の１空中写真を用いた。また堆積物に関しては、遺構検出面付近より上位のものだけでなく、そこから掘削したトレンチ断面で遺構検出面以深についても観察した。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近における地形環境の考察を行った。

１．調査区付近の地形分布

本遺跡の調査区は洲本平野の西部に位置し、調査区の南隣には洲本川水系に属する樋戸野川が流れる。調査区の約150ｍ西には山地が存在し、樋戸野川はこの山地にはさまれた狭窄部を通って平野に流れ出す。洲本平野の沖積低地には、完新世段丘と現氾濫原などが認められる（第13図）。完新世段丘は洲本平野の多くを占め、現氾濫原は洲本川やその支流である千草川に沿って断続的に分布する。これらは約１ｍの比高をもつ完新世段丘の段丘崖で接しており、調査区はこの段丘上にみられる。

調査区付近の完新世段丘には、埋没自然堤防、後背湿地、および埋没旧河道が認められる（第14図）。埋没自然堤防は調査区付近に比較的よく発達する。これは後背湿地より数十cm高い。後背湿地は低平で、調査区付近に集中的に分布する埋没自然堤防の周囲に広がる。調査区付近の埋没旧河道は埋没自然堤防の間やそれと後背湿地の境界などを蛇行するように延びる。これらはすべて樋戸野川の流路跡である。こうした微地形のうち、調査区は埋没自然堤防上に位置する。

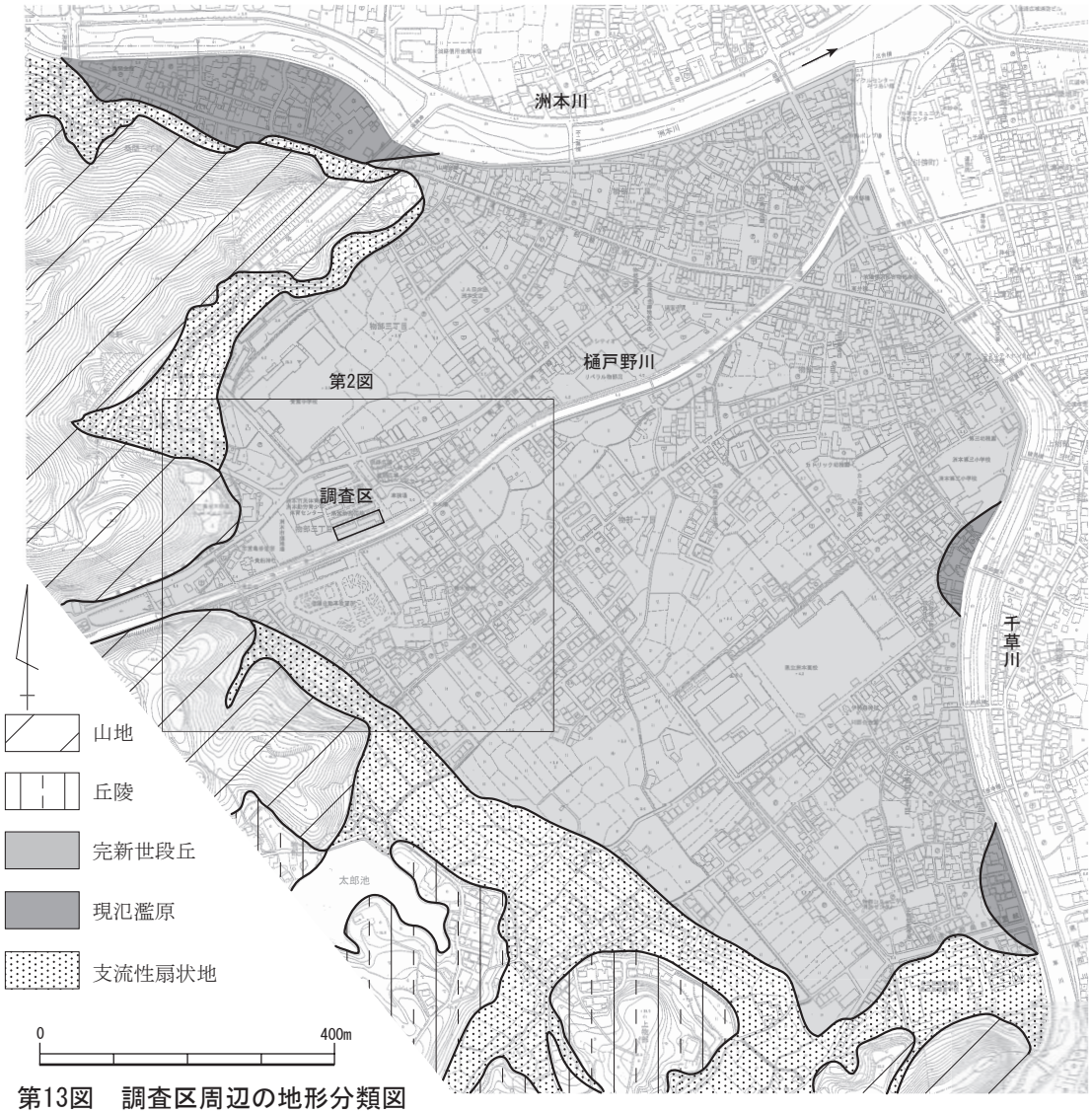
２．調査区における堆積物の特徴

調査区では、大きくみて下位から自然堤防堆積物、後背湿地堆積物、自然堤防堆積物、ならびにそれを覆う細粒堆積物が認められ、さらにその上に耕土がみられる（第15図・第16図）。

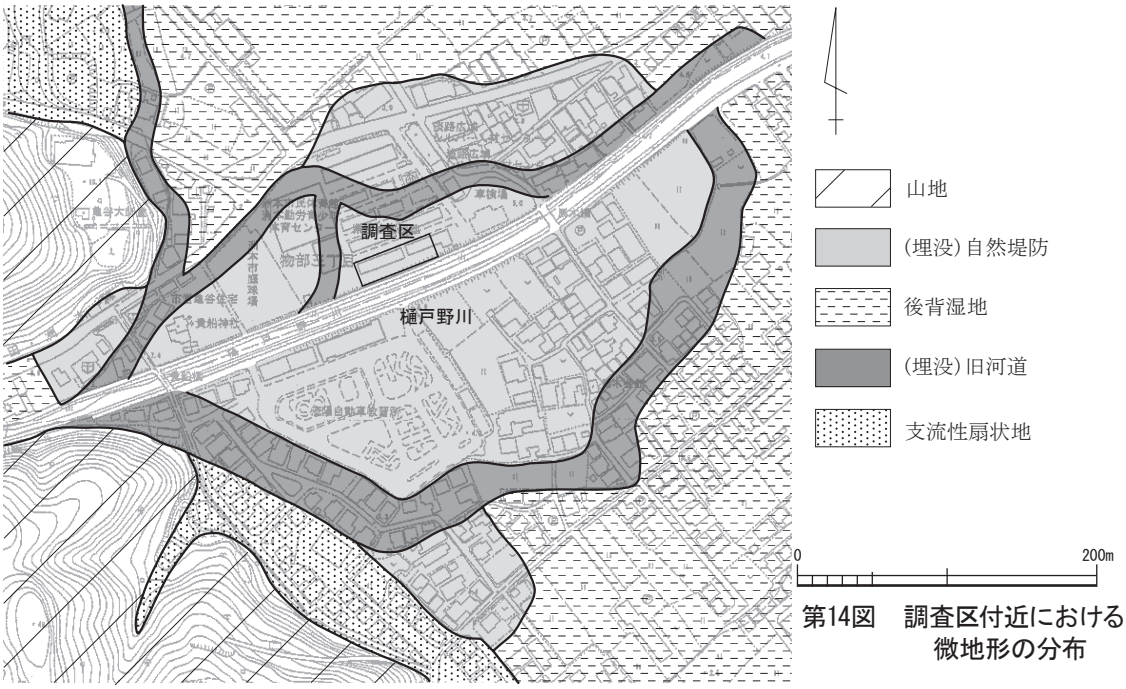
下位の自然堤防堆積物は褐灰色や灰色、青灰色などを呈する砂（第15図の堆積物22・24）、シルト質砂（同図の堆積物13・20）、および砂質シルト（同図の堆積物17・21・23）からなる。これらは1.5m以上の厚さをもつ。そのうち、暗褐灰色の砂質シルト（同図の堆積物23）に混入する植物遺体は4540±20yrBP（3357～3125calBC）の放射性炭素年代測定値を示す[1)]。また、褐灰色シルト質砂（同図の堆積物20）と暗灰色砂質シルト（同図の堆積物17）の上面からは旧河道が２本認められる。幅は下位の旧河道で11m以上、上位のものが約８ｍで、深さはともに50cm以上である。

後背湿地堆積物は、約2.2mの厚さをもち、15に細分される。これらは、暗灰色や灰色などのシルトを中心とする堆積物（第15図の堆積物１～12、第16図の堆積物20～24[2)]）で、ほぼ水平に分布する。とくに下部では、低湿な環境で生成された黒灰色のシルト（第15図の堆積物９・11）が２つはさまれる。そのうち、上位にみられる黒灰色シルトの放射性炭素年代測定値は3790±20yrBP（2282～2151calBC）である[3)]。なお、自然堤防堆積物である灰色のシルト質砂（同図の堆積物13）から後背湿地堆積物に属する暗灰色のシルト（同図の堆積物４）に向って、噴砂が数多く認められる。

上位の自然堤防堆積物は、厚さ約40cmで、主に褐灰色や灰色のシルト質砂（第16図の堆積物19）と



第13図　調査区周辺の地形分類図



第14図　調査区付近における微地形の分布

砂質シルト（同図の堆積物13・14・17・18）からなる。これらは、下位の自然堤防堆積物に比べて細粒で薄く、自然堤防の末端に近い堆積物と考えられる。そのうち、紫灰色の砂質シルト（同図の堆積物17）には弥生時代前期の遺物が含まれ、下面からは同時期の土坑と溝跡などが検出されている。また、褐灰色シルト質砂（同図の堆積物19）とにぶい橙色砂質シルト（同図の堆積物13）の上面からは旧河道が２本切り込まれる。これらは、７～８ｍの幅と１ｍ前後の深さを有し、調査区中央部をほぼ南北方向に延びる。下位の旧河道堆積物には弥生時代前期、また上位のそれには弥生時代中期後半から後期の遺物が混入する。

この自然堤防堆積物を覆う細粒堆積物は褐灰色のシルト（同図の堆積物９）である。これは20cm前後の厚さをもつ。この堆積物には弥生時代中期後半から室町時代の遺物が混入し、下面では弥生時代中期後半の土坑や溝跡と13世紀の井戸跡などが検出されている。

３．調査区付近における地形環境の変遷

〔ステージ１〕　調査区付近では、約4500年前に砂やシルト質砂などが樋戸野川の洪水に伴って堆積し、自然堤防が形成された。その間激しい洪水流が２度自然堤防堆積物を侵食し、流路がつくられた。

〔ステージ２〕　自然堤防の形成後3800年前ころにかけてシルトが堆積した。その結果、自然堤防は埋没し、非常に低湿な後背湿地がつくられた。そこでは２度にわたって黒灰色のシルトが生成された。

〔ステージ３〕　約3800年前以降には、10度近く起こった洪水が主にシルトをもたらし、後背湿地はさらに発達した。その間には、比較的大きな地震によって液状化が起こり、噴砂の形成がみられた。

〔ステージ４〕　弥生時代前期ころ、洪水による砂や砂質シルトの堆積が行われ、自然堤防の形成がはじまった。この自然堤防上では、弥生時代前期に人間が活動し、土坑などがつくられた。また、同じころには、自然堤防を横切る洪水流が堆積物を激しく侵食し、流路が形成された。

〔ステージ５〕　流路の埋積後、砂質シルトが堆積し、自然堤防は発達した。その後弥生時代中期後半までに自然堤防上をシルトが覆い、それは浅く埋没するに至った。埋没自然堤防上では、弥生時代中期後半になって再び人間の活動がみられた。

〔ステージ６〕　自然堤防の埋没後、激しい洪水流が自然堤防を横断し、流路が形成された。この流路が埋積された弥生時代後期以降、調査区が位置する地形面は段丘化した。埋没自然堤防上では、13世紀にも人間が生活し、井戸がつくられた。

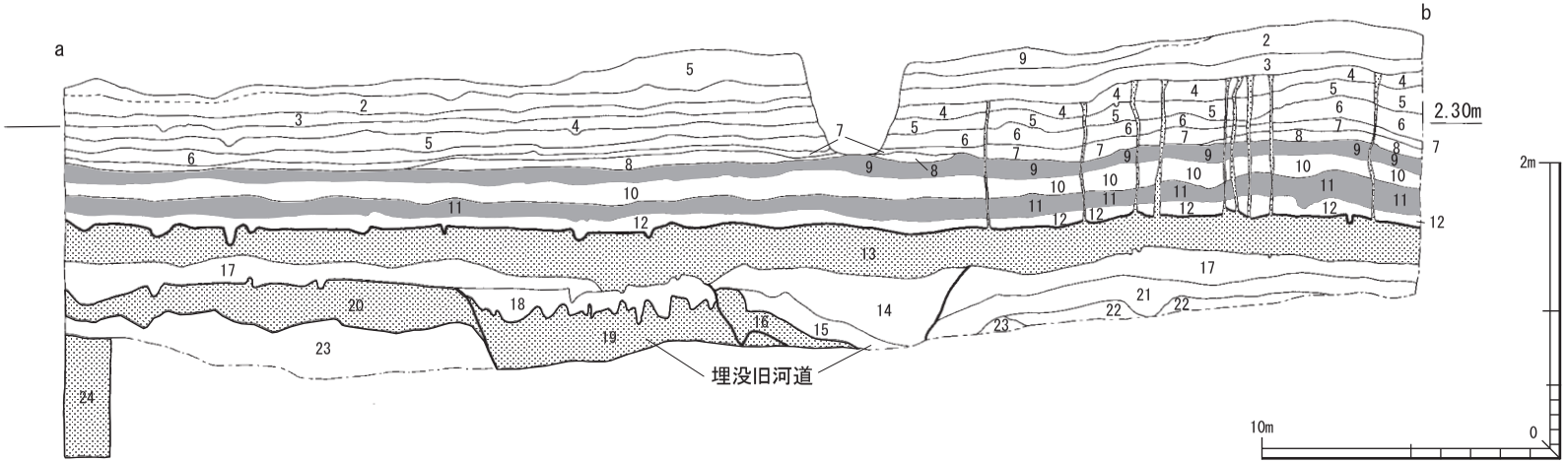
以上のように、調査区が位置する埋没自然堤防は弥生時代前期ころから中期後半までに形成・埋没した。調査区での人間活動はその発達過程と埋没直後に行われた。そこでは、後背湿地より高燥で排水しやすい環境がみられたにもかかわらず、人間が居住しなかった。これは、そこが自然堤防の末端付近に位置していたことと、少なくとも弥生時代後期ころまで激しい洪水のおよぶ環境であったことに一因があると考えられる。調査区では、このような地形環境と人間活動との関係が認められるのである。

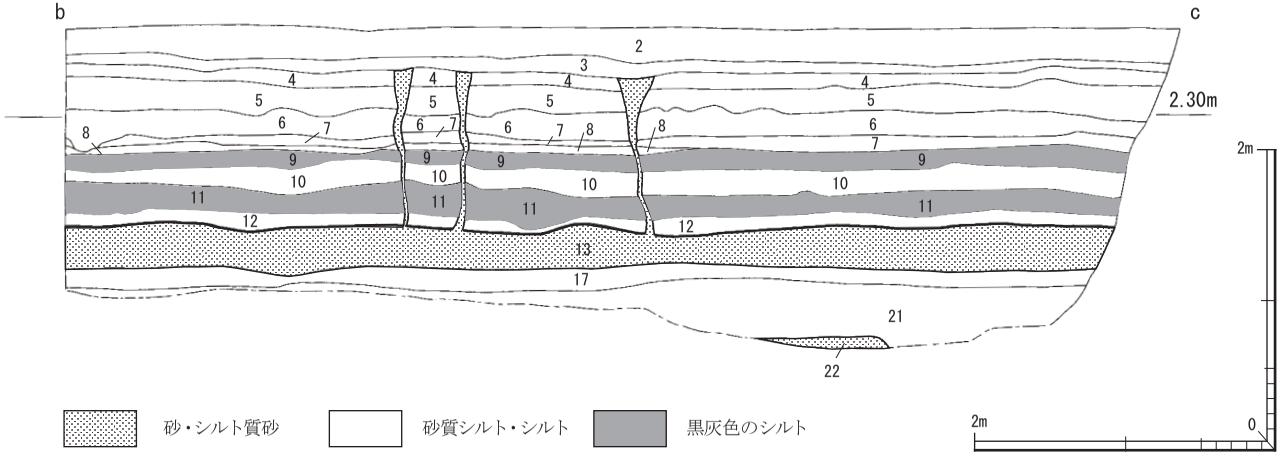
注

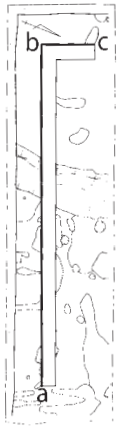
1）この放射性炭素年代測定値は（株）加速器分析研究所によるものである。

2）第15図の堆積物１・２は第16図の堆積物23・24と同じものである。

3）前掲1）



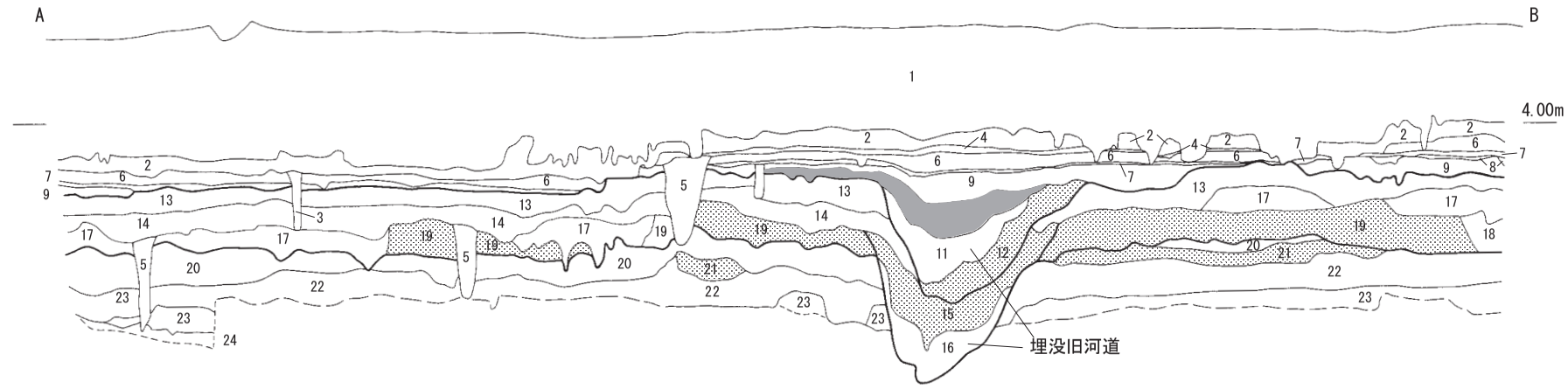


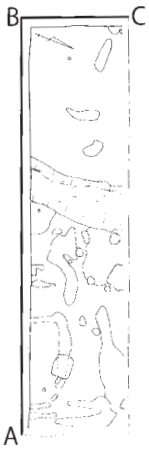


1. 暗灰色　シルト
2. 黄灰色　シルト
3. 灰色　シルト
4. 暗灰色　シルト
5. 灰色　砂質シルト
6. 灰色　シルト
7. 暗灰色　シルト
8. 灰色　シルト
9. 黒灰色　シルト
10. 暗灰色　シルト
11. 黒灰色　シルト
12. 暗灰色　シルト
13. 灰色　シルト質砂
14. 暗灰色　シルト：植物遺体混入
15. 褐灰色　砂質シルト：植物遺体混入
16. 灰色　砂：植物遺体混入
17. 暗灰色　砂質シルト
18. 暗褐灰色　砂質シルト：植物遺体混入
19. 暗灰色　砂
20. 褐灰色　シルト質砂
21. 灰色　砂質シルト
22. 灰色　砂
23. 暗褐灰色　砂質シルト：植物遺体混入
24. 青灰色　砂

第15図　調査区における遺構検出面付近以深のトレンチ断面図

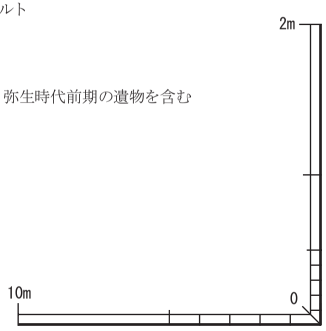
南壁断面図



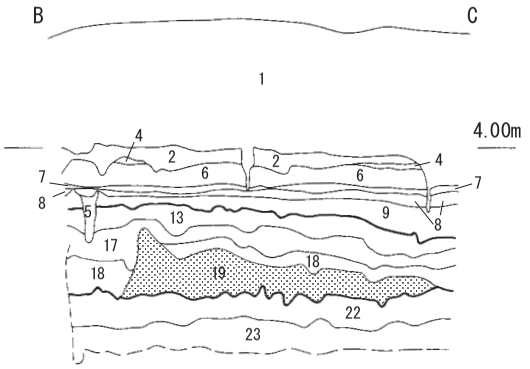


砂・シルト質砂　　砂質シルト・シルト　　黒灰色のシルト

1. 盛土
2. 褐灰色　シルト：近年の旧耕土
3. 暗渠
4. 明黄褐色　シルト
5. 遺構埋土
6. 明褐灰色　シルト：旧耕土
7. 褐灰色　シルト
8. 灰白色　シルト
9. 褐灰色　シルト：弥生時代中期後半～室町時代の遺物を含む
10. 黒褐色　シルト
11. 褐灰色　シルト
12. 灰黄褐色　砂
13. にぶい橙色　砂質シルト
14. 褐灰色　砂質シルト
15. 灰白色　砂
16. 灰色　砂質シルト
17. 紫灰色　砂質シルト：弥生時代前期の遺物を含む
18. 灰色　砂質シルト
19. 褐灰色　シルト質砂
20. 灰色　シルト
21. 褐灰色　シルト質砂
22. 灰色　シルト
23. 青灰色　シルト
24. 浅黄色　シルト



西壁断面図



第16図　調査区における遺構検出面付近より上位の堆積物

報告書抄録

ふりがな	うまきいせき
書名	馬木遺跡
副書名	県営洲本物部住宅建替事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第 426 冊
編著者名	渡辺　昇・長濱誠司・山本　誠・青木哲哉・パリノ・サーヴェイ㈱・ ㈱加速器分析研究所・㈱パレオ・ラボ
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所在地	〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1-1-1　　℡　078(437)5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒 650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目 10－1
発行年月日	2012 年 3 月 29 日

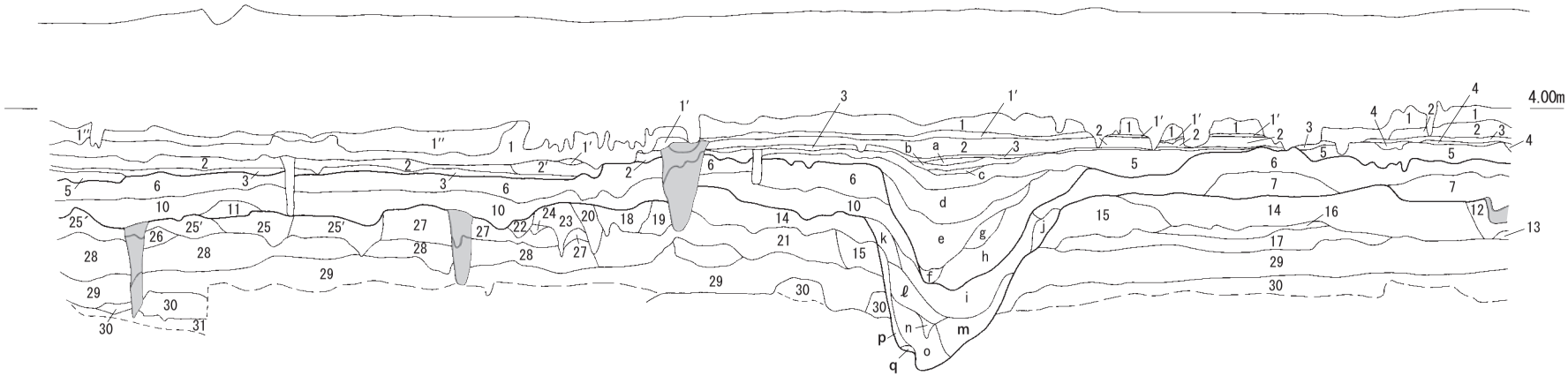
所収遺跡名	所在地	コード				調査期間	調査面積	調査原因
馬木遺跡		市町村	調査番号	北緯	東経			
確認調査	兵庫県洲本市物部３丁目	280201	2007079	34° 20′ 17″	134° 52′ 44″	2007. 6. 13	24 ㎡	県営物部住宅建替事業
本発掘調査			2009190			2009. 12. 21 ～ 2. 26	756 ㎡	
			遺跡番号					
			60028					

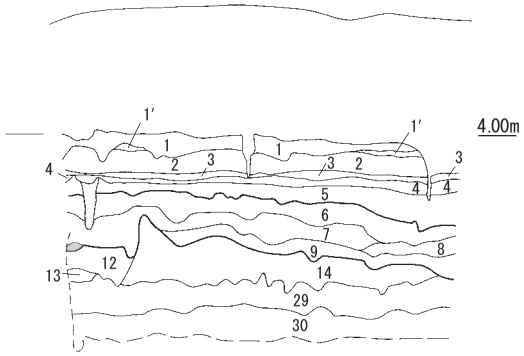
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬木遺跡	集落跡	弥生時代	焼土坑・土坑・溝	弥生土器・石鏃	
		鎌倉時代	井戸・土坑		

要　約	下層面は弥生時代前期で土坑・溝を検出している。前期の土器が比較的まとまって出土しており、紀伊型甕を保有していないのが特徴である。上面は弥生時代中期から室町時代にかけての遺構面である。鎌倉時代の井戸３基と土坑・ピットを検出している。

図　　版

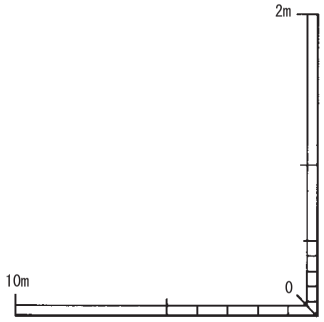
南・西壁断面図





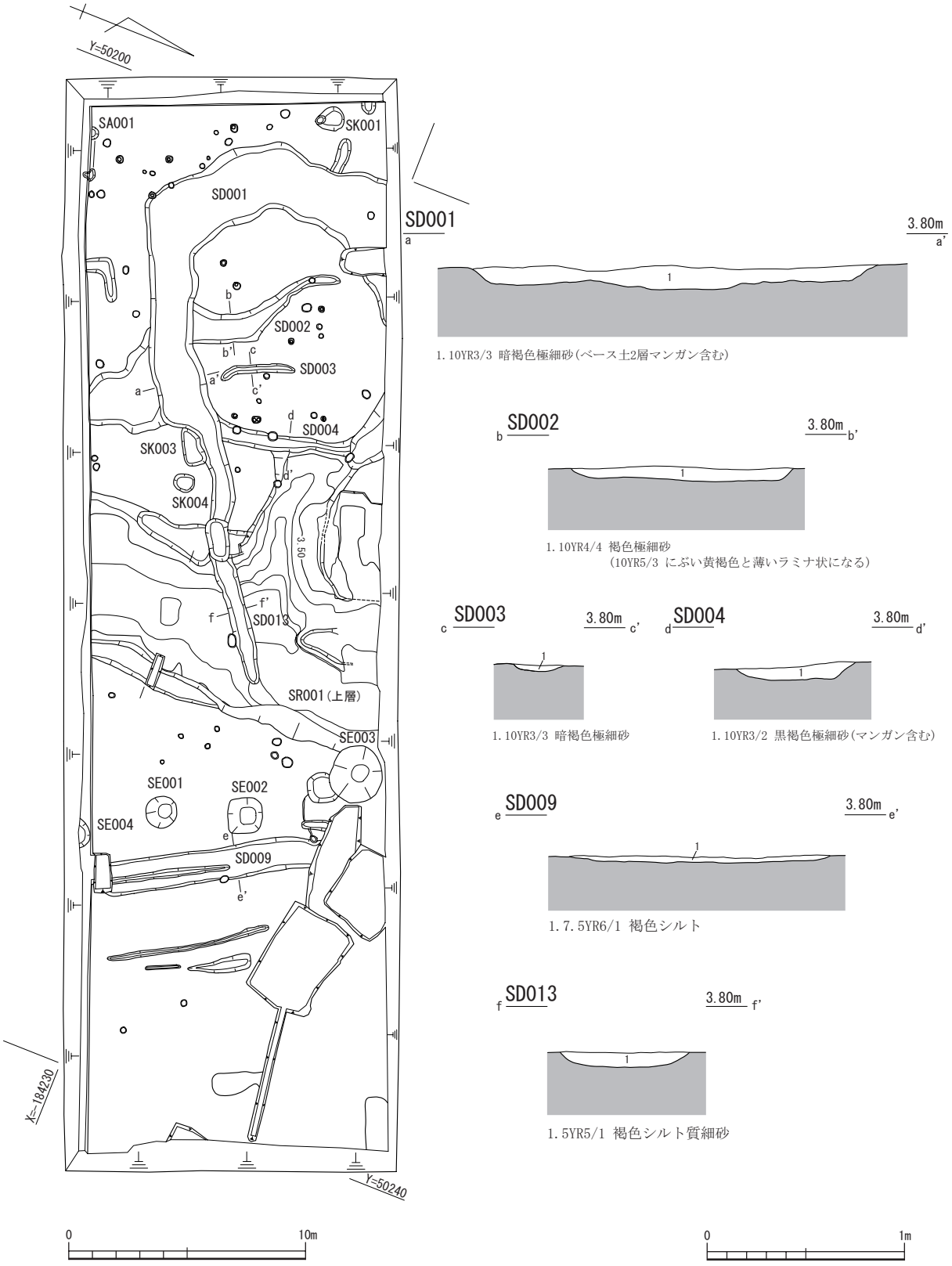
1．10YR 6/1　褐灰　シルト質細砂　（旧耕土）　鉄分沈着
1′．10YR 6/6　明黄褐　シルト質極細砂　（旧床土）　鉄分沈着
1″．10YR 6/1　褐灰　シルト質極細砂　グライ化　3層をブロック状に多く含む
2′．7.5YR 7/1　明褐灰　シルト質細砂　（旧耕土）　鉄分沈着
2．10YR 6/1　褐灰　シルト質細～極細砂　鉄分沈着
3．7.5YR 6/1　褐灰　シルト質細砂　（旧床土）　鉄分沈着
4．N 7/　灰白　シルト質細砂
5．10YR 4/1　褐灰　シルト細砂混　（遺物包含層）　土壌化　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
6．7.5YR 7/3　にぶい橙　シルト質極細砂
7．N 7/　灰白　シルト質細～極細砂　（遺物包含層）　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
8．N 6/　灰　シルト質細～極細砂　遺物少量包含
9．N 5/　灰　シルト質細砂
10．10YR 7/4　にぶい黄橙　シルト質細砂　鉄分.ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
11．5RP 6/1　紫灰　シルト質極細砂
12．5YR 6/1　褐灰　シルト質細砂
13．N 5/　灰　シルト質細砂　土壌化
14．7.5YR 6/1　褐灰　シルト質細砂 ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
15．N 6/　灰　シルト質細～極細砂　（遺物・炭包含）　土壌化
16．2.5Y 6/4　にぶい黄　シルト質細砂ブロック＋N71灰白細砂
17．10YR 6/1　褐灰　細砂　やや土壌化
18．N 7/　灰白　シルト質細～極細砂　（遺物少量包含）　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
19．2.5Y 7/4　浅黄　シルト質細～極細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
20．N 6/　灰　シルト質細砂　底に中砂堆積
21．N 6/　灰　シルト質極細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着　土壌化
22．.5R 6/1　赤灰　シルト～シルト質極細砂　（遺物・炭粒包含）　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
23．N 7/　灰白　シルト質細～極細砂　（遺物・炭粒包含）
下部に炭層をなす　礫混　土壌化
24．7.5YR 5/1　褐灰　シルト質極細砂
25．5PR 5/1　紫灰　シルト～シルト質細砂　（遺物・炭包含）
25′．5P 6/1　紫灰　シルト（遺物・炭包含）　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
26．10YR 5/1　褐灰　シルト質細～極細砂
27．N 6/　灰　シルト
28．10YR 5/1　褐灰　シルト～シルト質極細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ沈着
29．N4/　灰　シルト～シルト質極細砂
30．5B 6/1　青灰　シルト　鉄分沈着　グライ化
31．2.5Y 7/4　浅黄　シルト　鉄分沈着

a．7.5YR　6/1　褐灰　シルト質極細砂　鉄分沈着
b．5YR　5/1　褐灰　シルト質極細砂　やや土壌化
c．7.5YR　5/1　褐灰　シルト質極細砂　土壌化
d．7.5YR　3/1　黒褐　シルト質極細砂　土壌化　弥生土器包含
e．7.5YR　4/1　褐灰　シルト質細～極細砂
f．5Y 7/1　灰白　細砂　やや土壌化
g．2.5Y 7/4　浅黄　シルト～シルト質極細砂　やや土壌化
h．10YR 5/2　灰黄褐　細砂　弥生土器包含
i．N 7/　灰白　細砂～極細砂　粗砂とラミナ状　弥生土器包含
j．10YR 6/1　褐灰　シルト質細砂　ややグライ化
k．10YR 6/6　明黄褐　シルト質極細砂　ややグライ化
l．5Y 7/1　灰白　細～粗砂　シルトブロック混
m．7.5YR　6/1　灰白　シルト　灰白シルトとラミナ状　有機質少量包含
n．5Y 7/1　灰白　細～粗砂　シルトブロック混
o．5Y 6/1　灰　シルト　灰白細砂とラミナ状　木など有機質多量に包含
p．2.5Y 5/1　黄灰　シルト質細砂
q．5Y 7/1　灰白　細砂



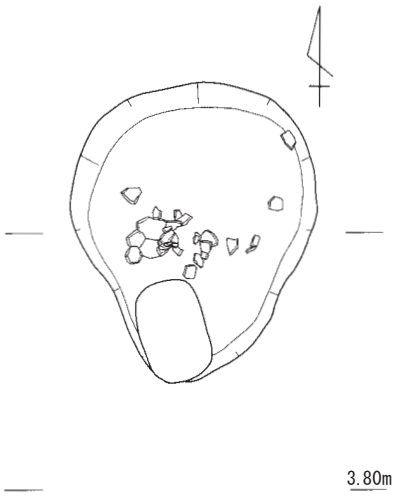
図版 1

図版 2　遺構



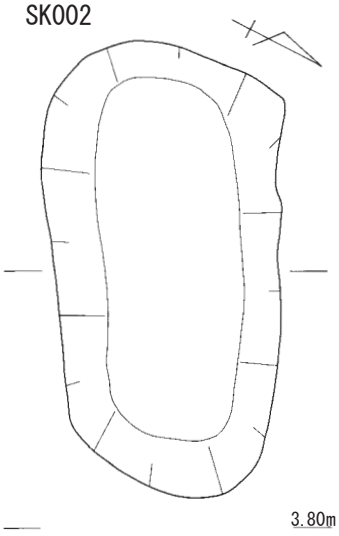
第 1 面全体図

SK001



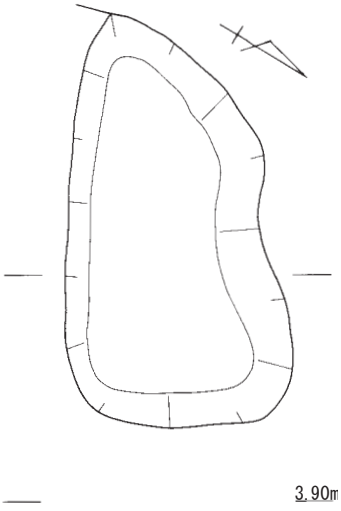
1. 10YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂 (鉄分・土器含む)

SK002



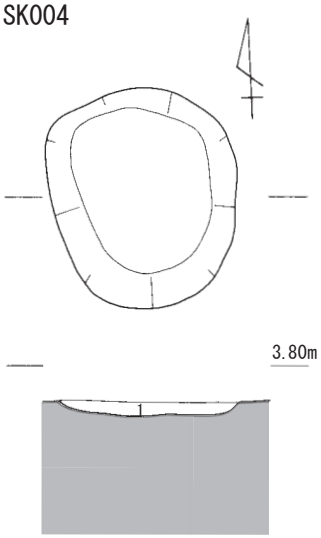
1.2.5Y 4/3 オリーブ褐 細砂

SK003



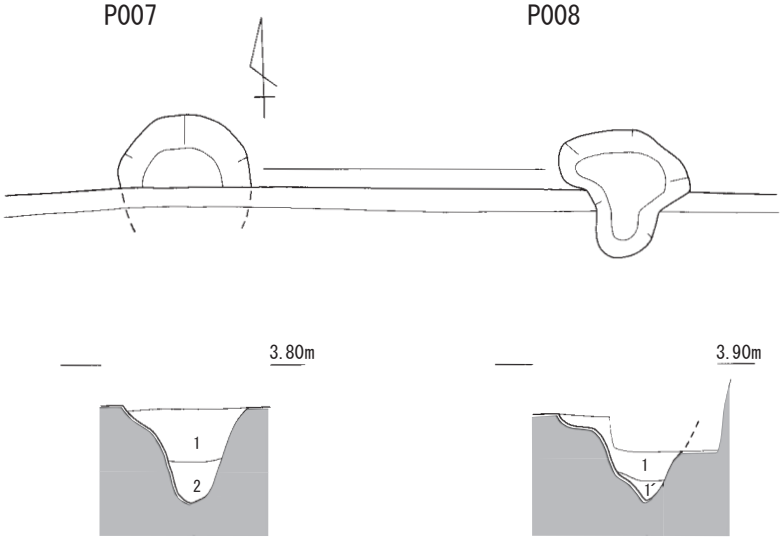
1.10YR 5/2 灰黄褐 極細砂

SK004



1.2.5Y 5/3 黄褐 極細砂 (鉄分含む)

P007

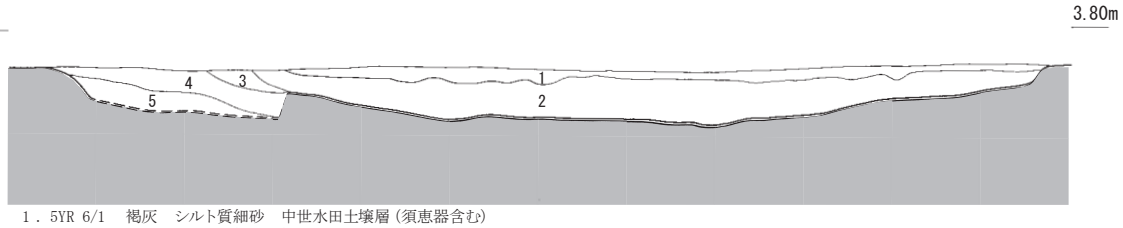


1.10YR 3/2 黒褐 極細砂 (ﾏﾝｶﾞﾝ含む)
2.10YR 2/1 黒 シルト質極細砂

P008

1 .7.5YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂
1'.7.5YR 2/2 黒褐 シルト質極細砂 (炭含む)

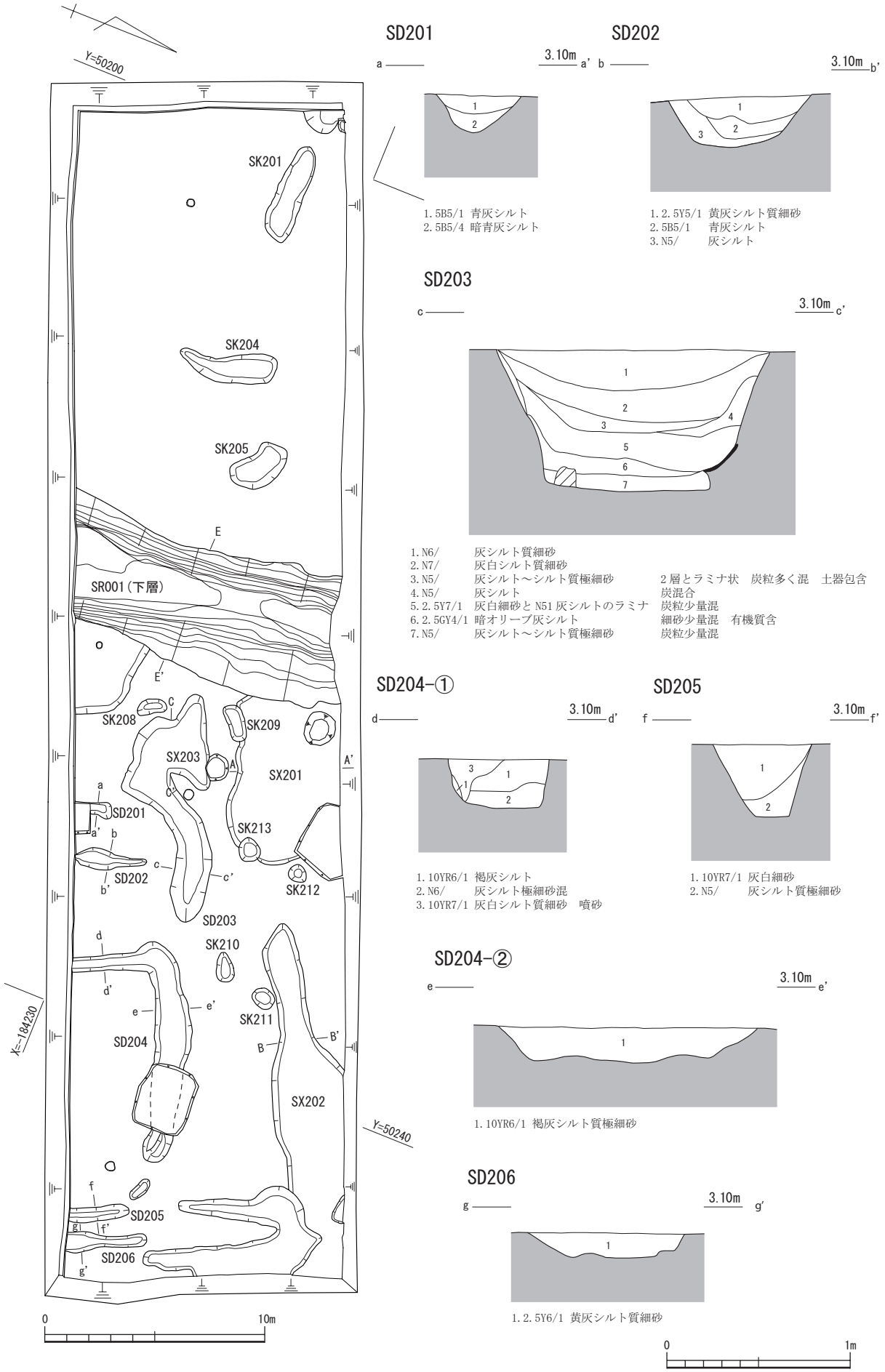
SR001 (上層)



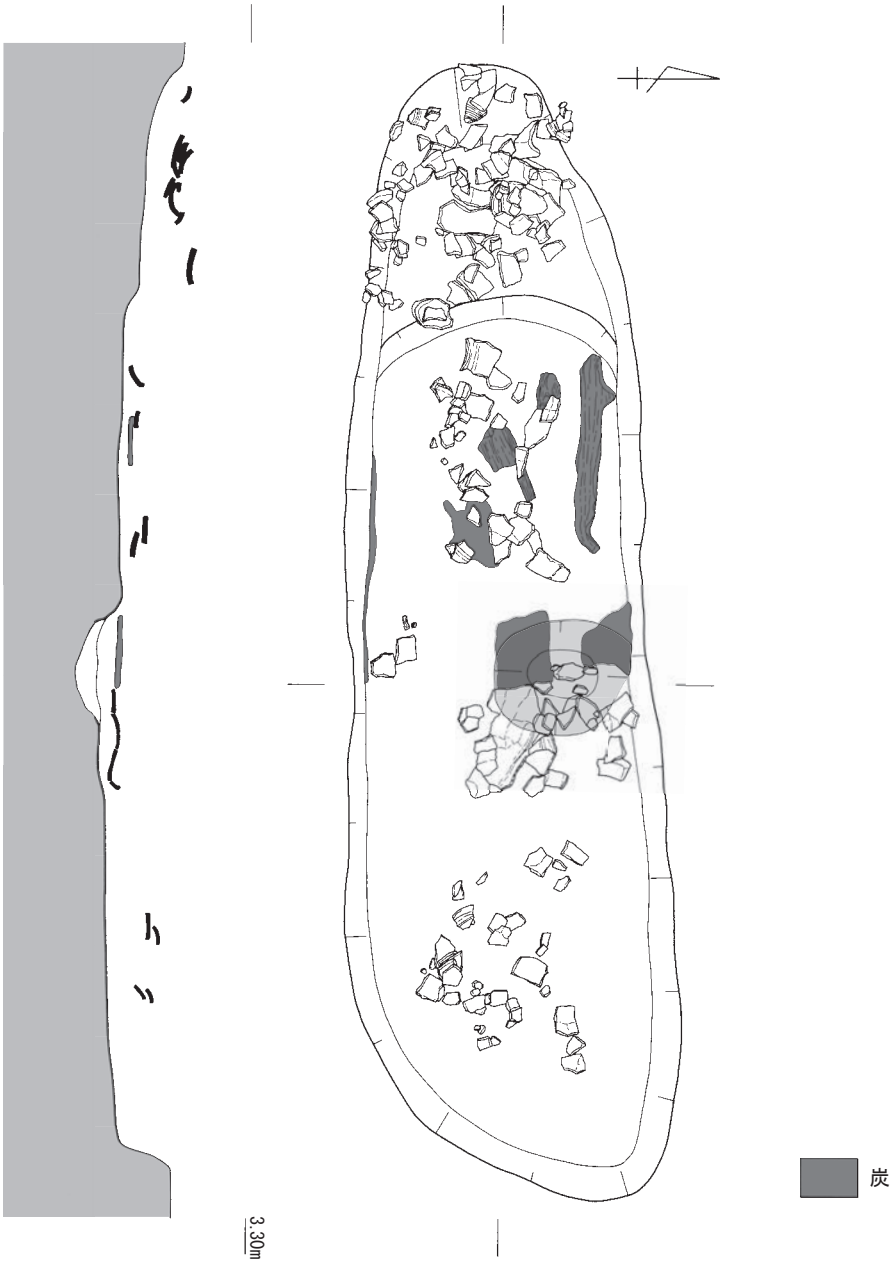
1．5YR 6/1 褐灰 シルト質細砂 中世水田土壌層 (須恵器含む)
2．7.5YR 4/1 褐灰 シルト質細～極細砂
3．5YR 4/1 褐灰 細砂 シルト混 4層の土壌化か
4．5YR 6/1 褐灰 細～中砂 シルト少々混 土器包含 (SD07)
5．5YR 6/1 褐灰 細砂 (SD07)

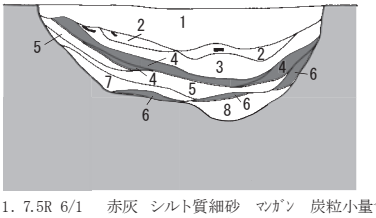
第 1 面遺構

図版 4　遺構



第 2 面全体図



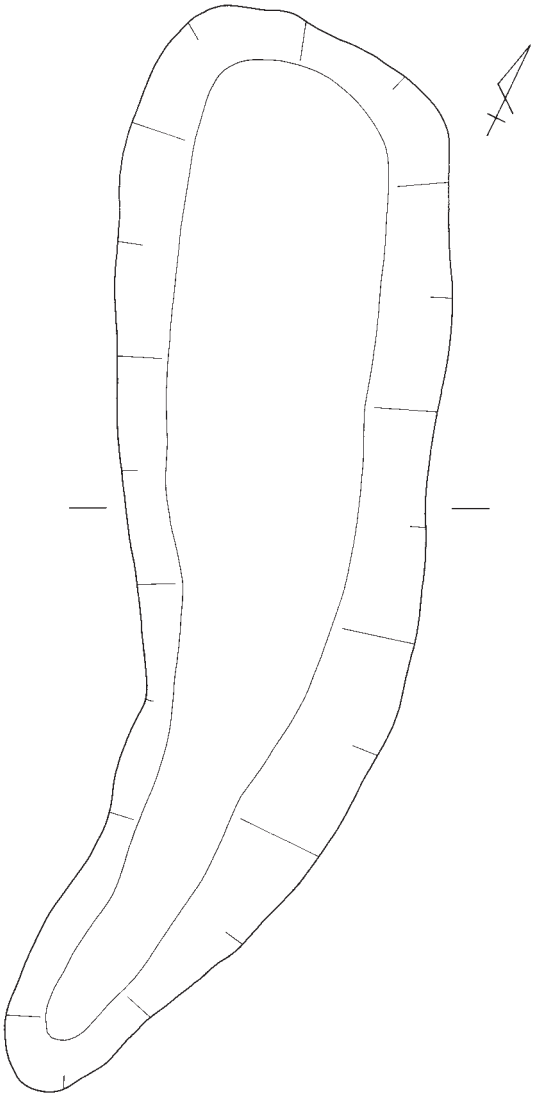


1. 7.5R 6/1　赤灰　シルト質細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ　炭粒小量含　土器片小量包含
2. 2.5YR 5/1　赤灰　シルト質極細砂～シルト　土器片包含　炭粒含
3. N5/　灰　シルト質細砂～極細砂　炭片含
4. 炭層
5. 2.5YR 5/2　灰赤　シルト質細砂
6. 炭層
7. 10YR 3/2　黒褐　シルト質極細砂
8. 10YR 3/4　暗褐　シルト質極細砂　（地山土ブロック混る）

SK201

図版 6　遺構

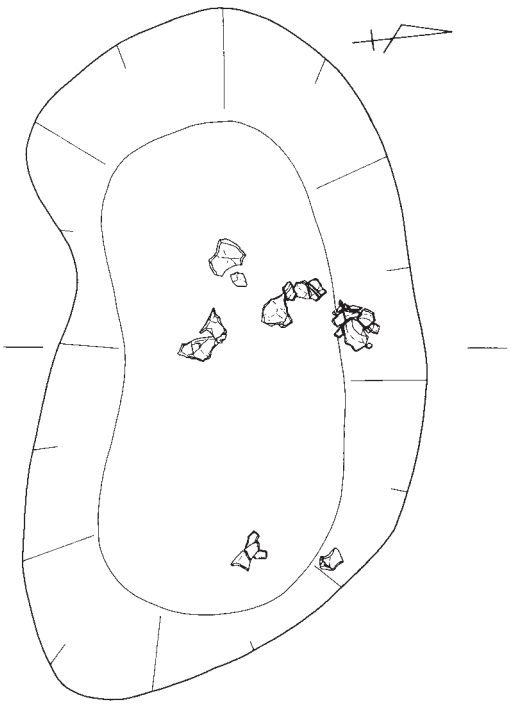
SK204



3.20m

1．7.5YR 5/1 褐灰 シルト質細～極細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ

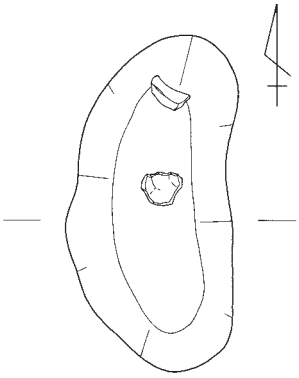
SK205



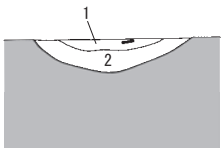
3.20m

1．7.5YR 5/1 褐灰 シルト質極細砂　ﾏﾝｶﾞﾝ

SK208

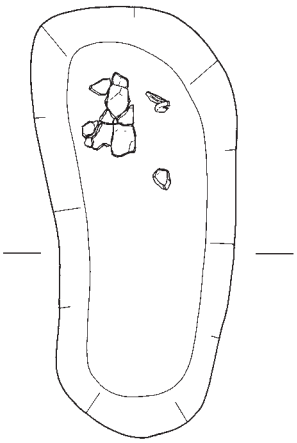


3.20m

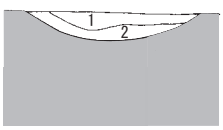


1．N 5/ 灰　シルト質細砂
　炭粒混　土器包含
2．N 6/ 灰　シルト細砂混

SK209



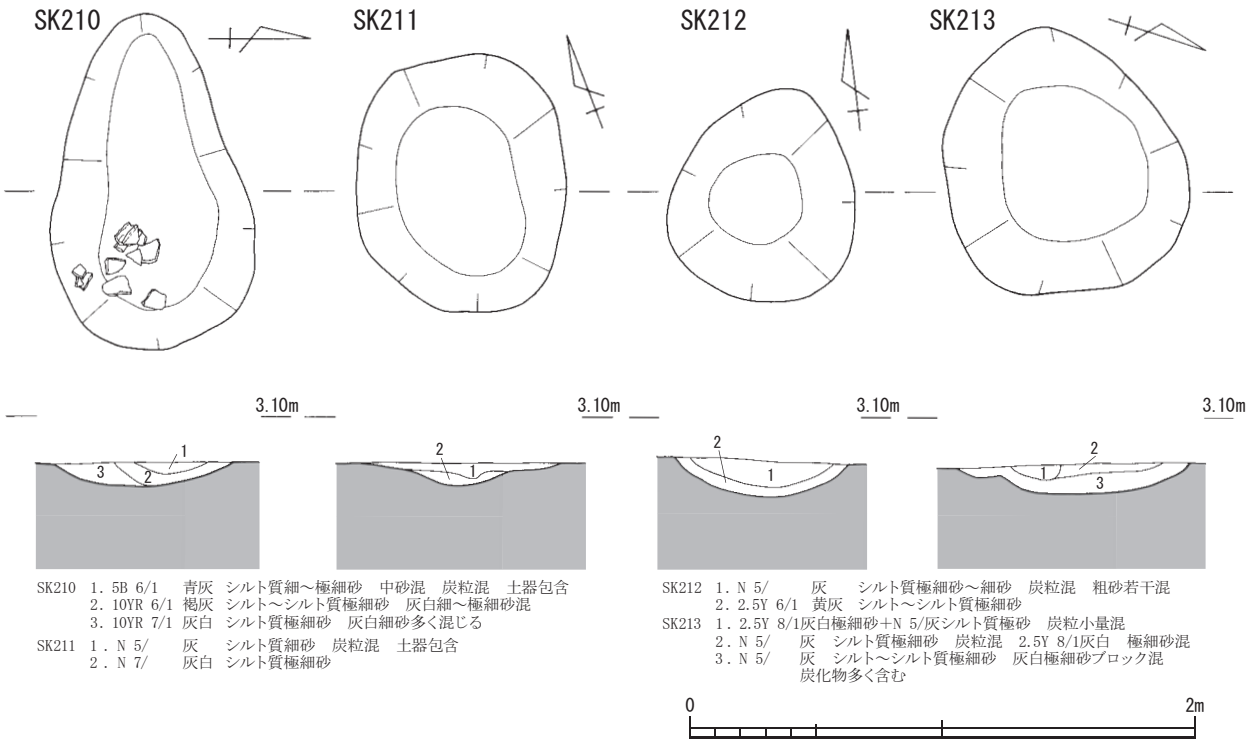
3.20m



1.N 5/　　灰　シルト質極細砂　炭粒混
　土器包含　灰白細砂混
2.10YR 5/1 褐灰 シルト
　灰白極細砂～細砂混

0　　2m

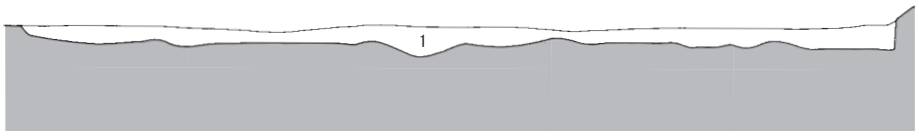
第 2 面遺構(1)



SK210　1．5B 6/1　青灰　シルト質細～極細砂　中砂混　炭粒混　土器包含
　　2．10YR 6/1　褐灰　シルト～シルト質極細砂　灰白細～極細砂混
　　3．10YR 7/1　灰白　シルト質極細砂　灰白細砂多く混じる
SK211　1．N 5/　灰　シルト質細砂　炭粒混　土器包含
　　2．N 7/　灰白　シルト質極細砂

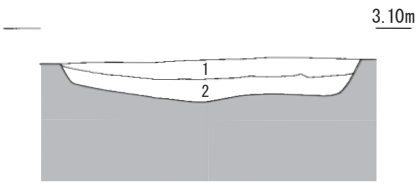
SK212　1．N 5/　灰　シルト質極細砂～細砂　炭粒混　粗砂若干混
　　2．2.5Y 6/1　黄灰　シルト～シルト質極細砂
SK213　1．2.5Y 8/1灰白極細砂＋N 5/灰シルト質極砂　炭粒小量混
　　2．N 5/　灰　シルト質極細砂　炭粒混　2.5Y 8/1灰白　極細砂混
　　3．N 5/　灰　シルト～シルト質極細砂　灰白極細砂ブロック混
　　炭化物多く含む

SX201



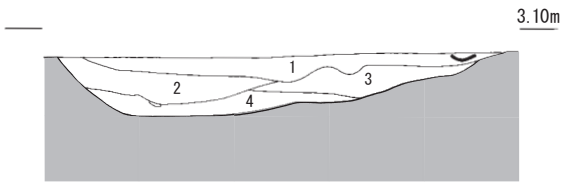
1．N 5/灰シルト＋5Y 7/1灰白極細砂～細砂混　炭粒小量混

SX202



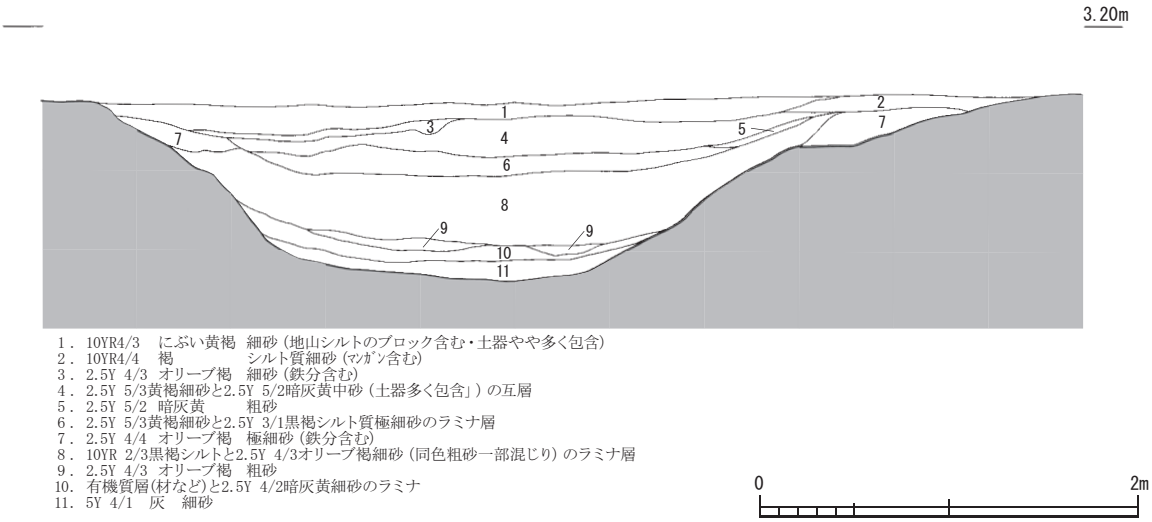
1．10YR 6/1　褐灰　シルト質細～極細砂　灰白極細砂少々混
2．10YR 5/1　褐灰　シルト　炭粒若干混

SX203



1．7.5YR 6/1　褐灰　シルト～細砂　灰白極細砂混　炭粒小量混
2．7.5YR 5/1　褐灰　シルト質極細砂　中～細砂混　炭粒小量混
3．10YR 5/1　褐灰　シルト
4．5B 5/1　青灰　シルト　炭粒混　灰白極細砂小量混

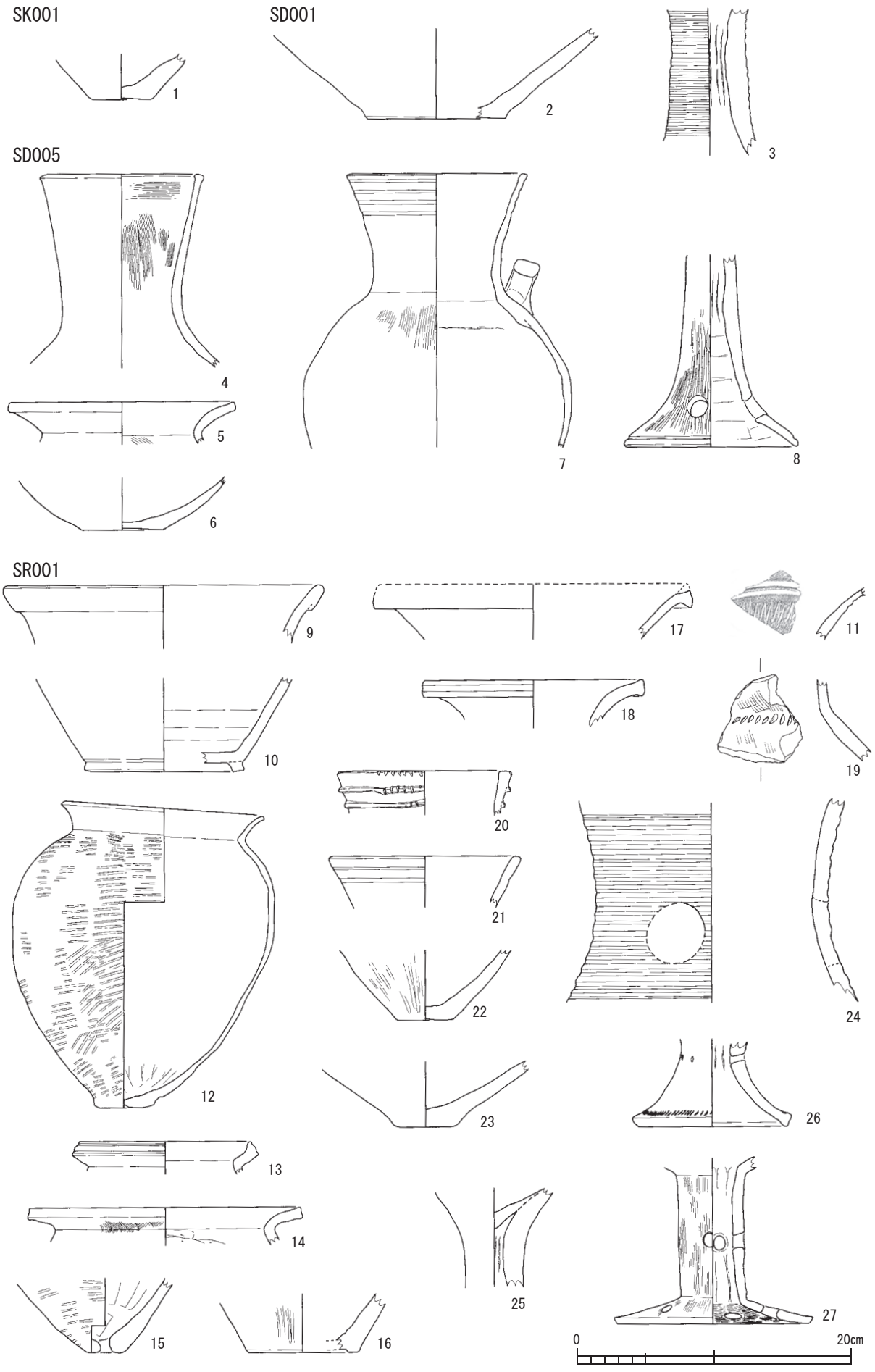
SR001（下層）



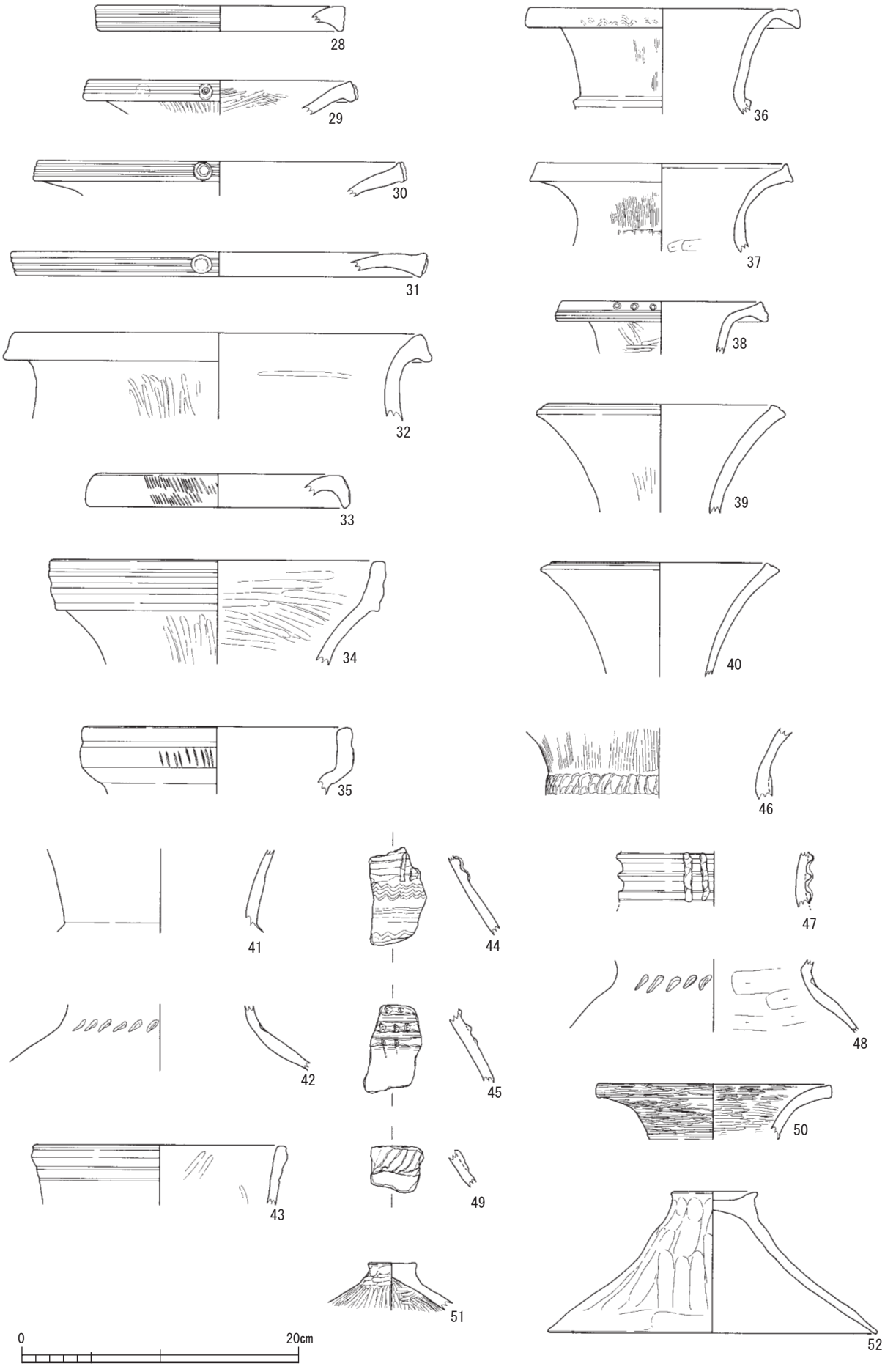
1．10YR4/3　にぶい黄褐　細砂（地山シルトのブロック含む・土器やや多く包含）
2．10YR4/4　褐　シルト質細砂（ﾏﾝｶﾞﾝ含む）
3．2.5Y 4/3　オリーブ褐　細砂（鉄分含む）
4．2.5Y 5/3黄褐細砂と2.5Y 5/2暗灰黄中砂（土器多く包含」）の互層
5．2.5Y 5/2　暗灰黄　粗砂
6．2.5Y 5/3黄褐細砂と2.5Y 3/1黒褐シルト質極細砂のラミナ層
7．2.5Y 4/4　オリーブ褐　極細砂（鉄分含む）
8．10YR 2/3黒褐シルトと2.5Y 4/3オリーブ褐細砂（同色粗砂一部混じり）のラミナ層
9．2.5Y 4/3　オリーブ褐　粗砂
10．有機質層（材など）と2.5Y 4/2暗灰黄細砂のラミナ
11．5Y 4/1　灰　細砂

第 2 面遺構(2)

図版 8　遺物

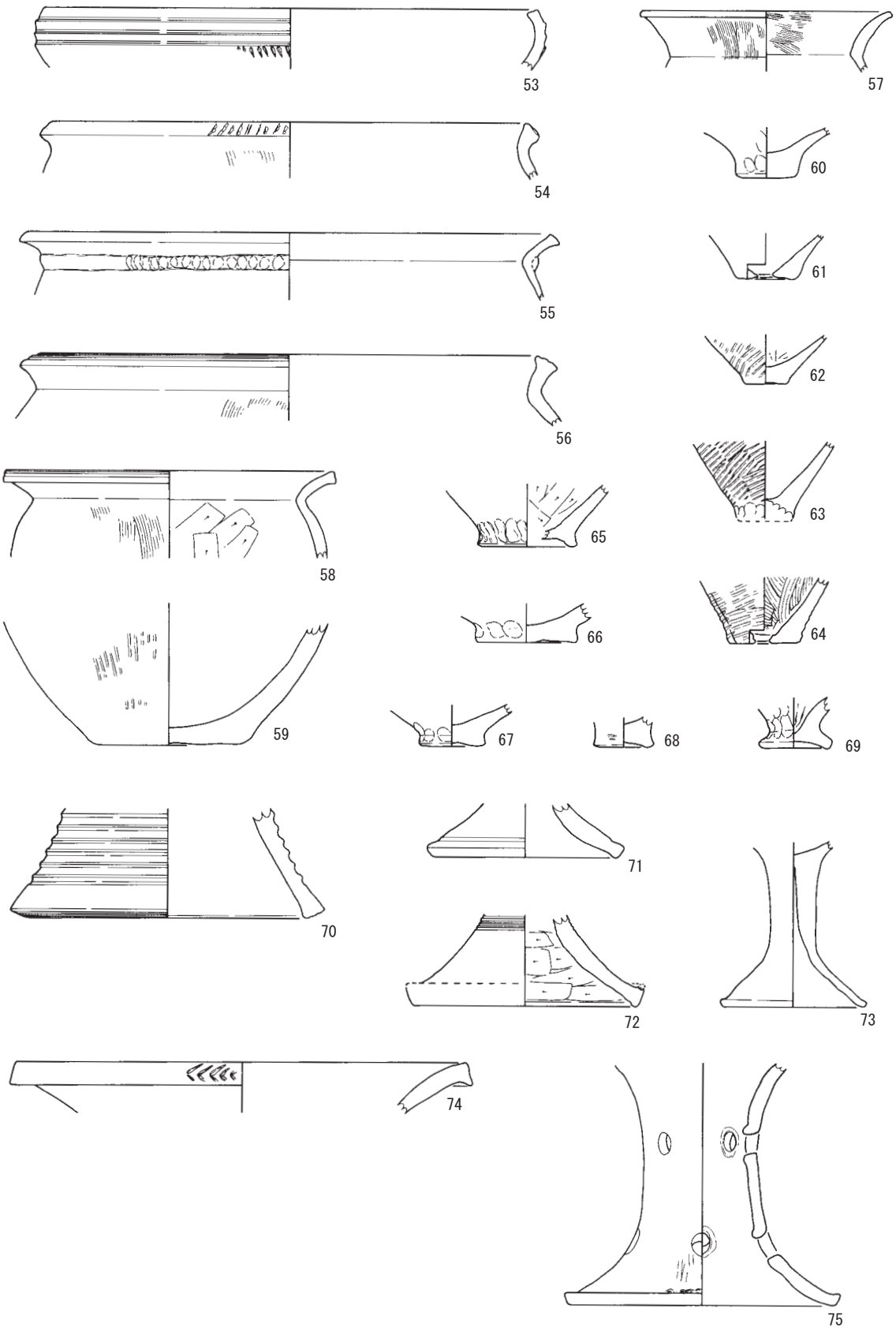


第 1 面遺構出土遺物(1)


28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
0
20cm

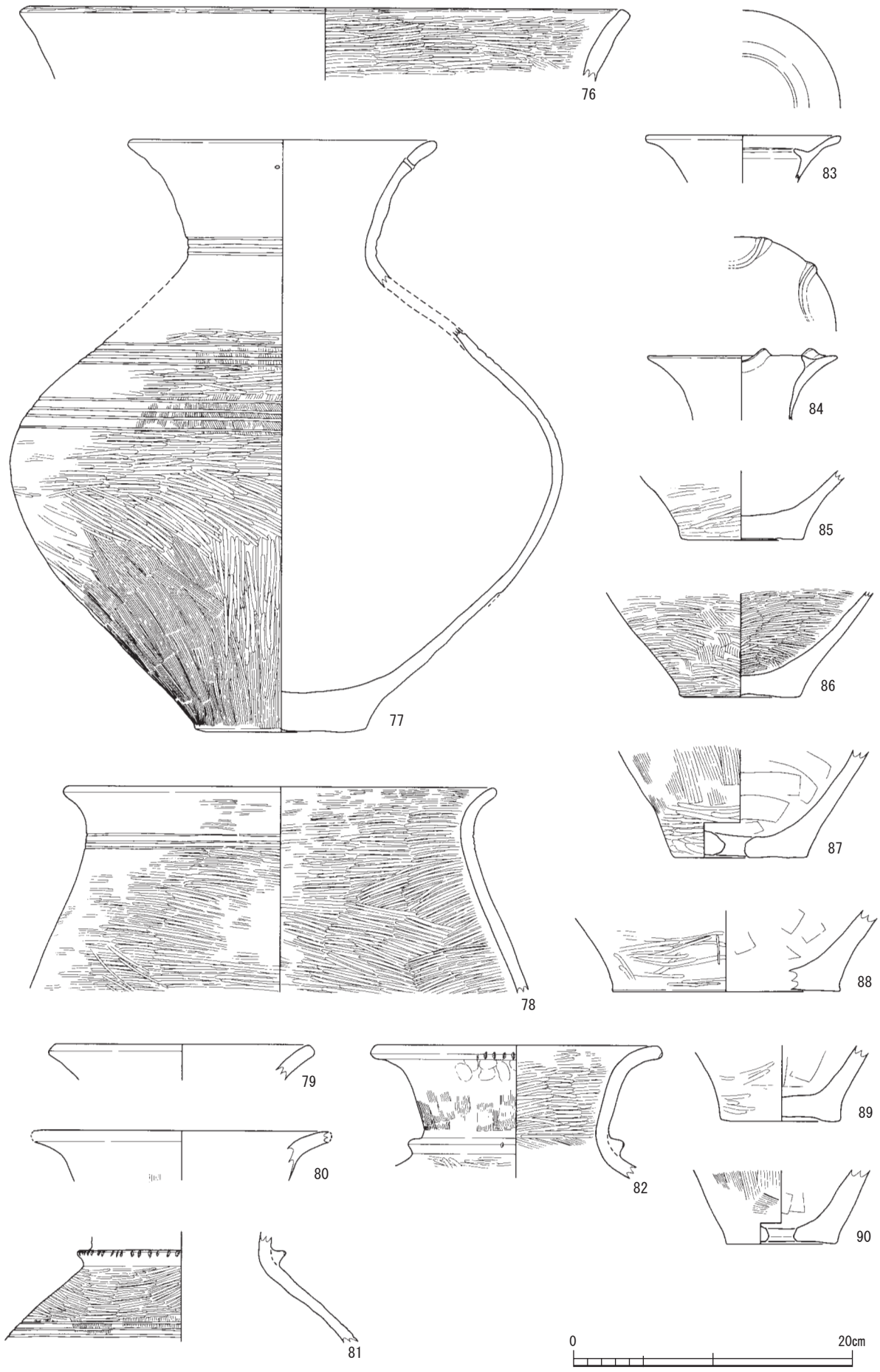
第 1 面遺構出土遺物(2)

図版 10　遺物



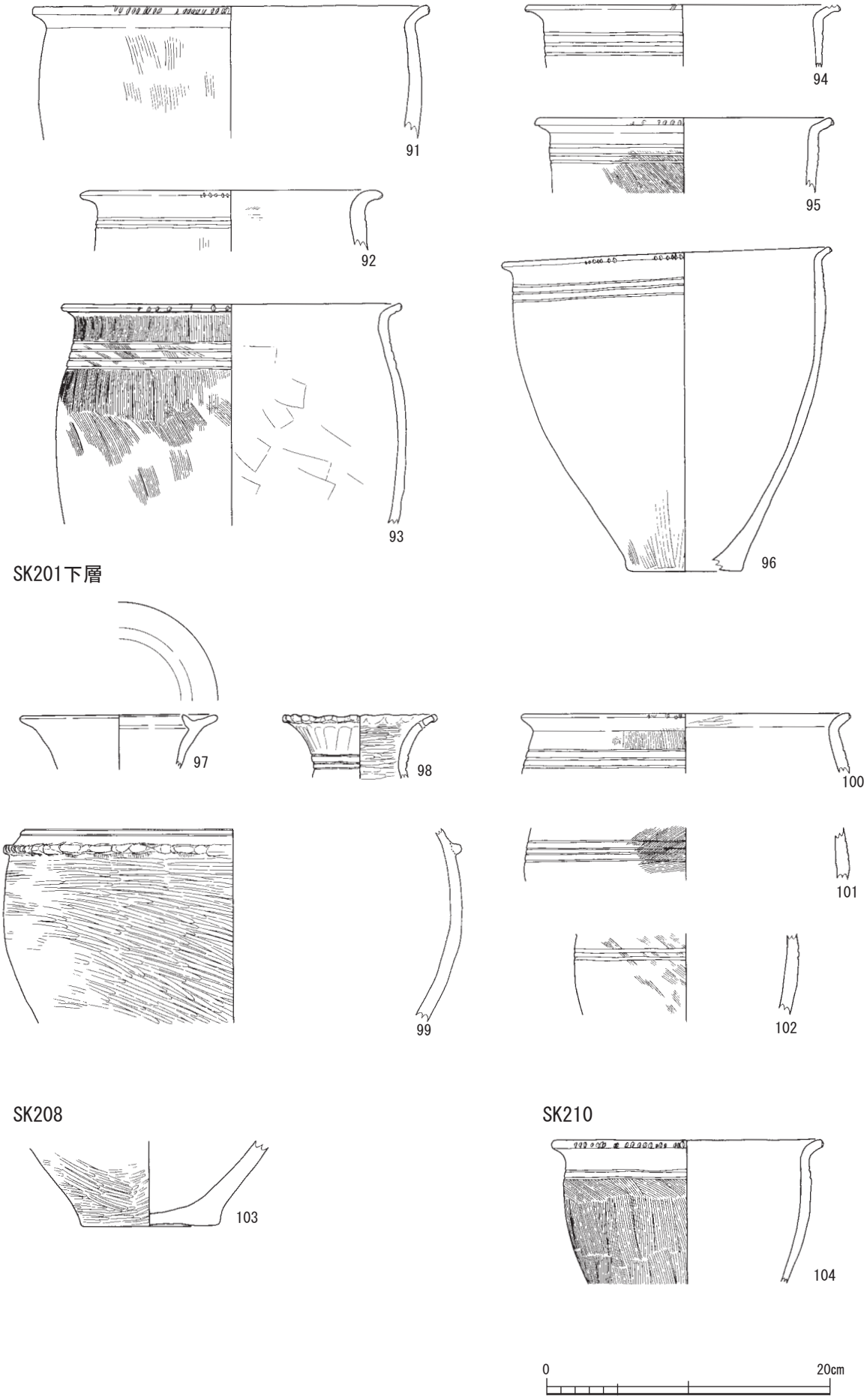
第 1 面出土遺物(3)

SK201上層

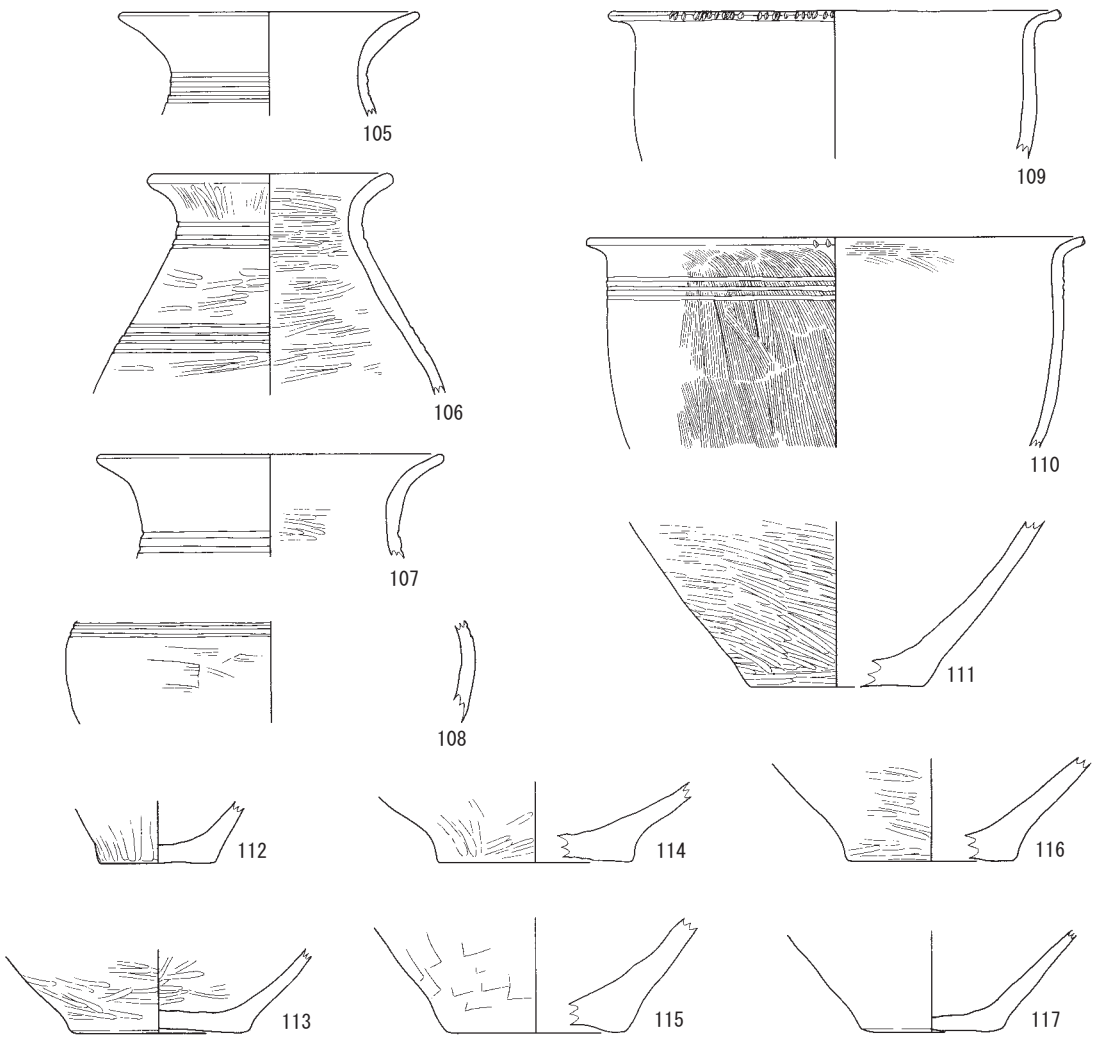


第 2 面出土遺物(1)

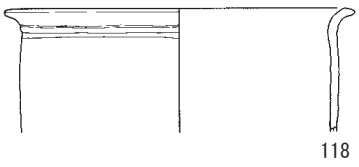
図版 12　遺物



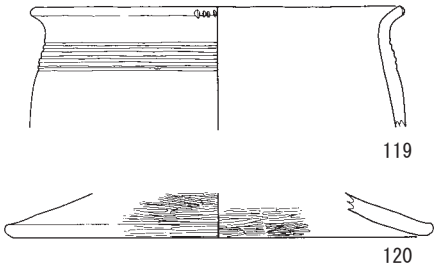
第 2 面　遺構出土遺物(2)



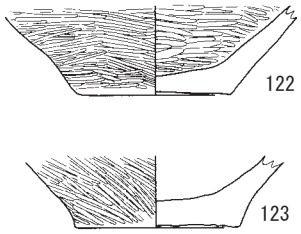
SD202



SD205



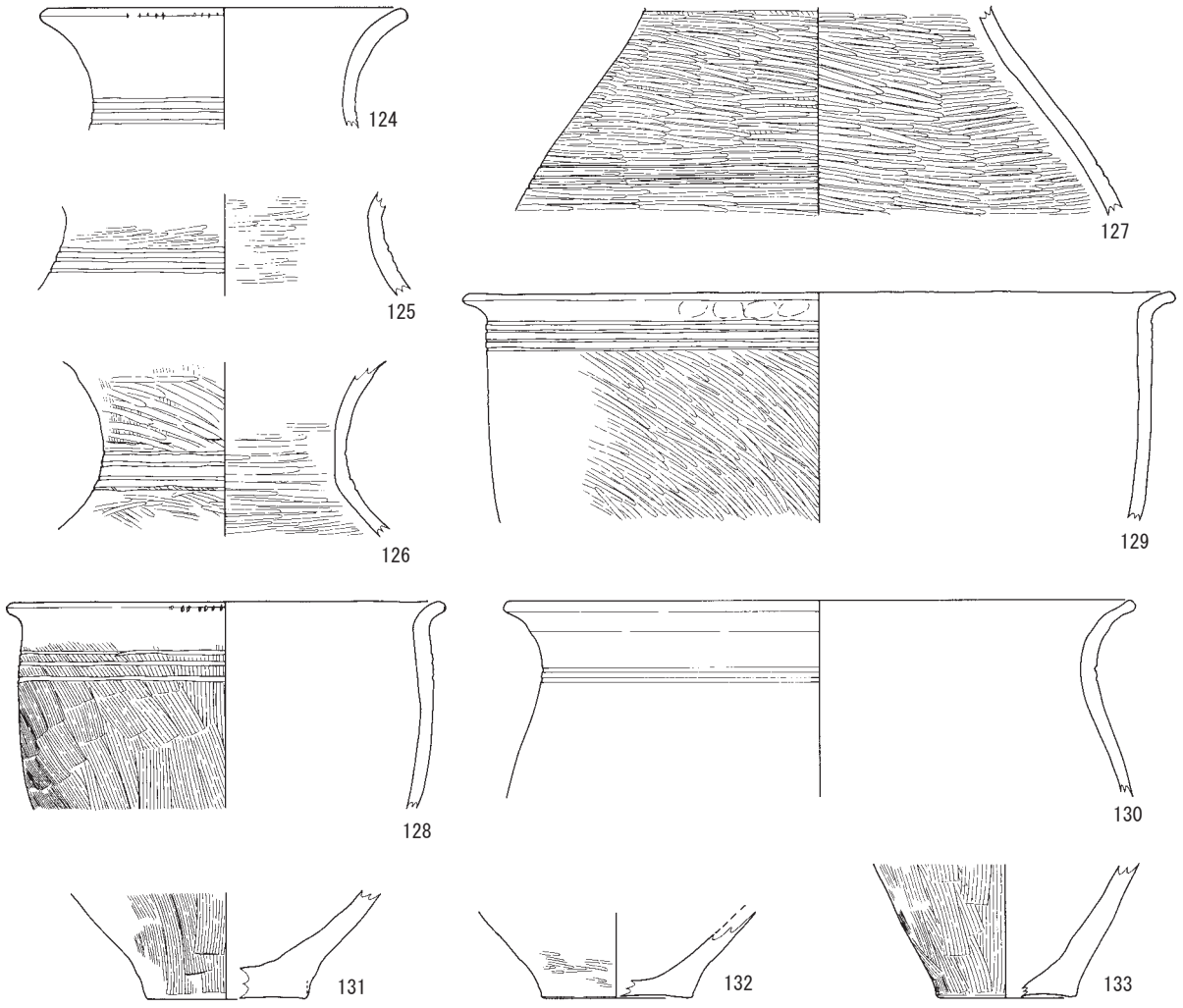
SD208



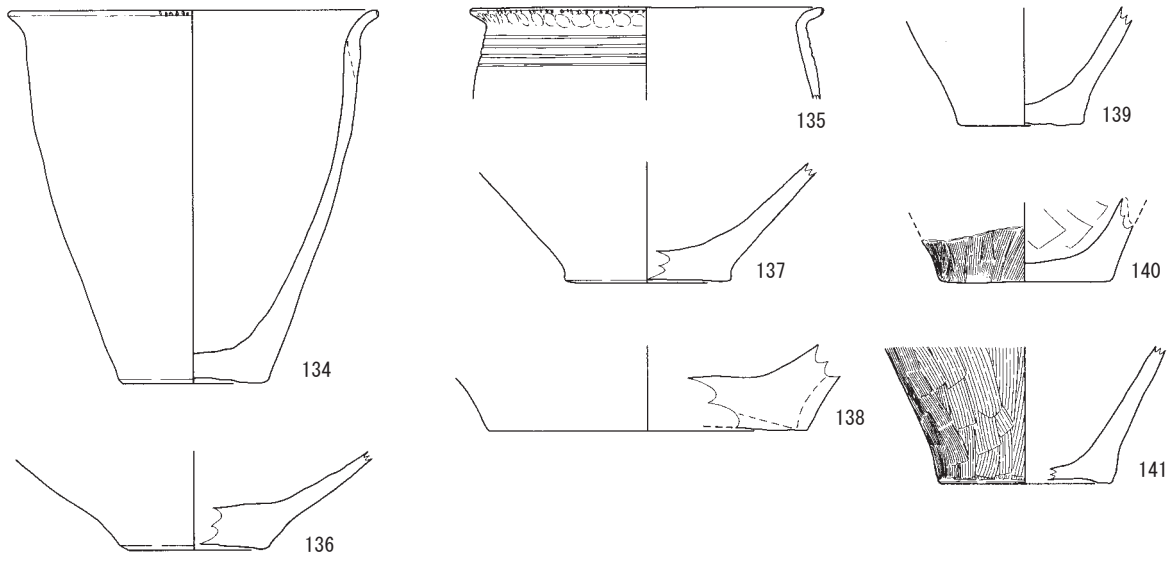
第 2 面　遺構出土遺物(3)

図版 14　遺物

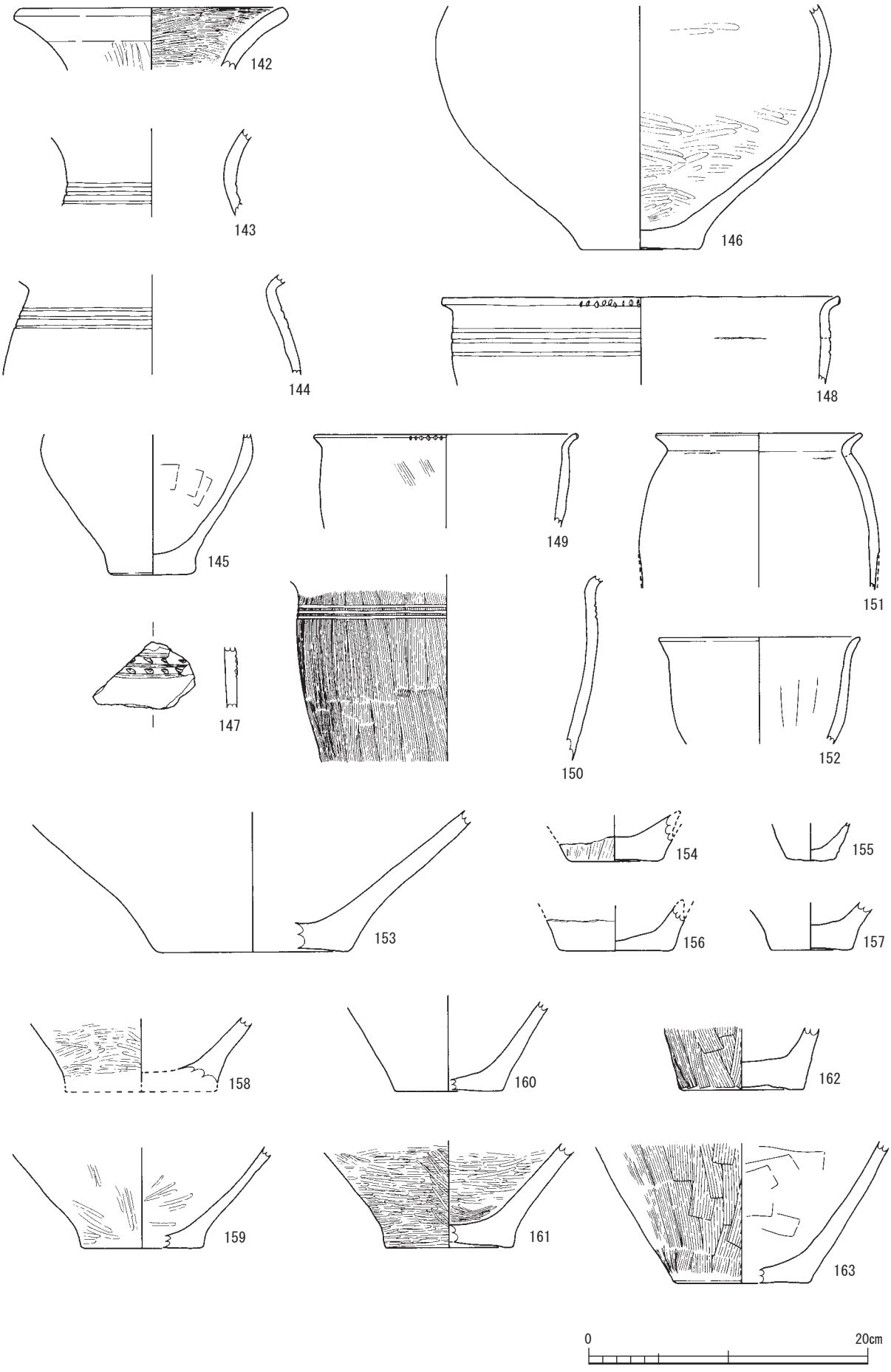
SD203



SD207

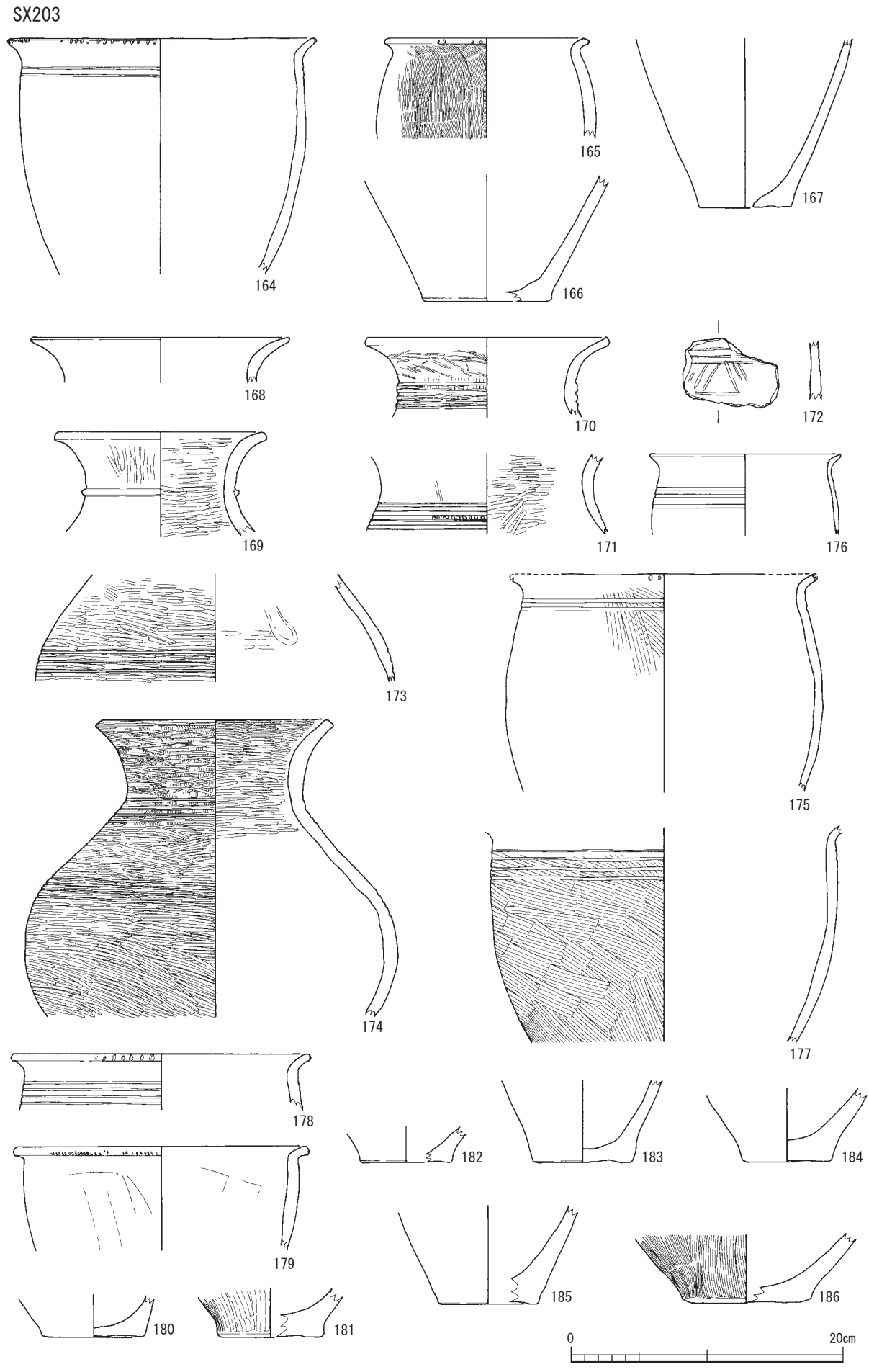


第 2 面　遺構出土遺物(4)

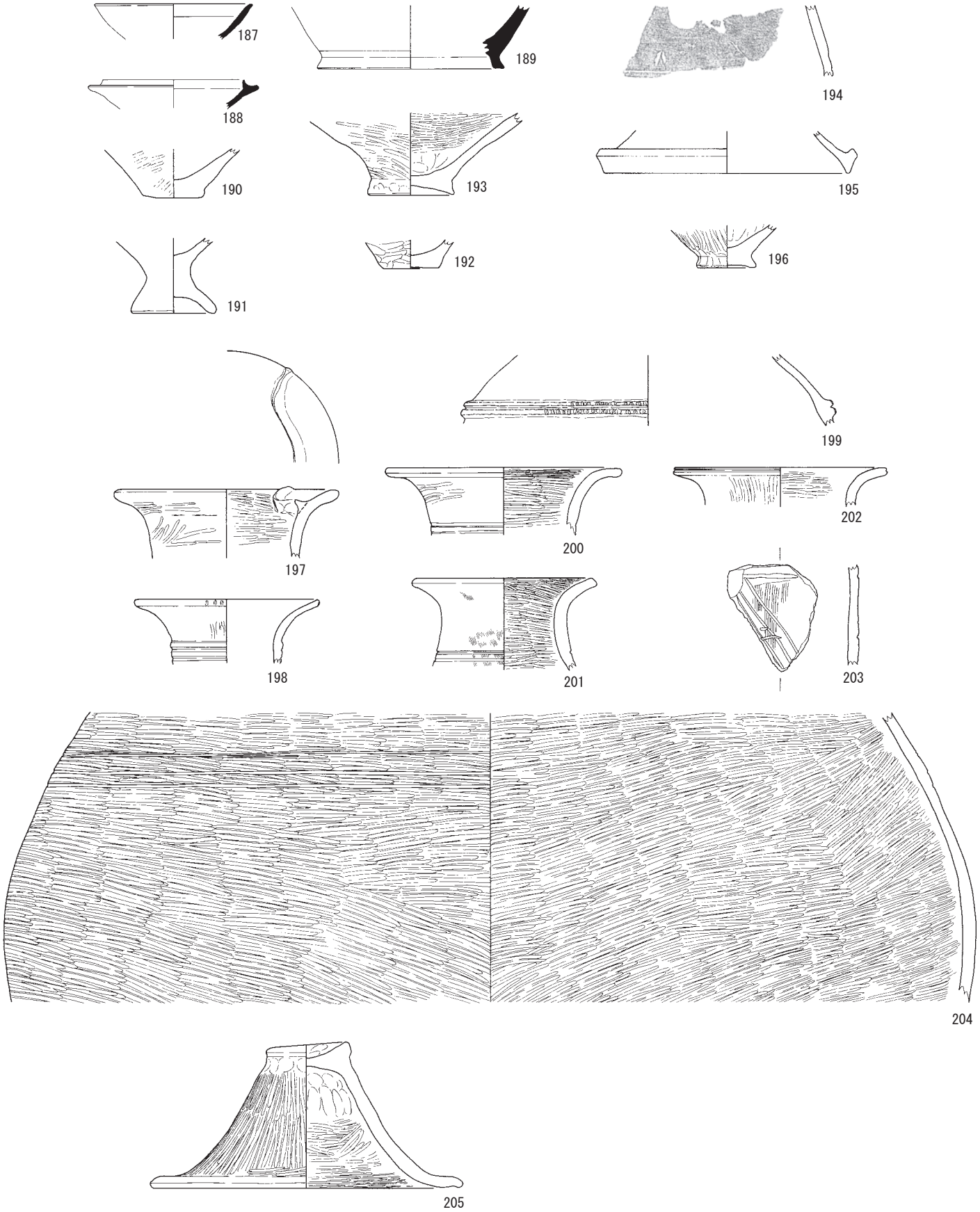

142
143
146
144
148
145
149
151
147
150
152
153
154
155
156
157
158
160
162
159
161
163
0
20cm

第 2 面　遺構出土遺物(5)

図版 16　遺物

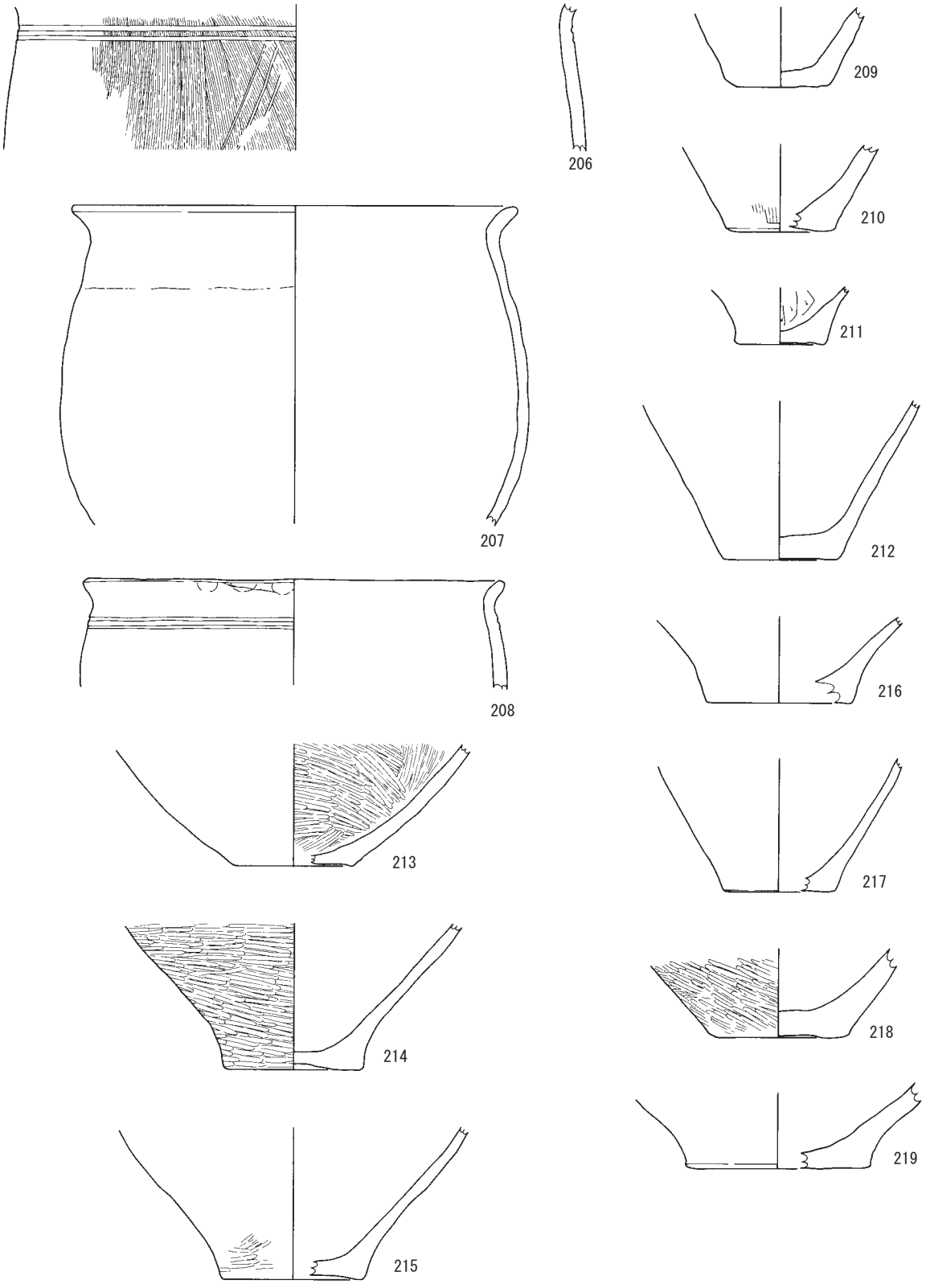


第 2 面　遺構出土遺物(6)

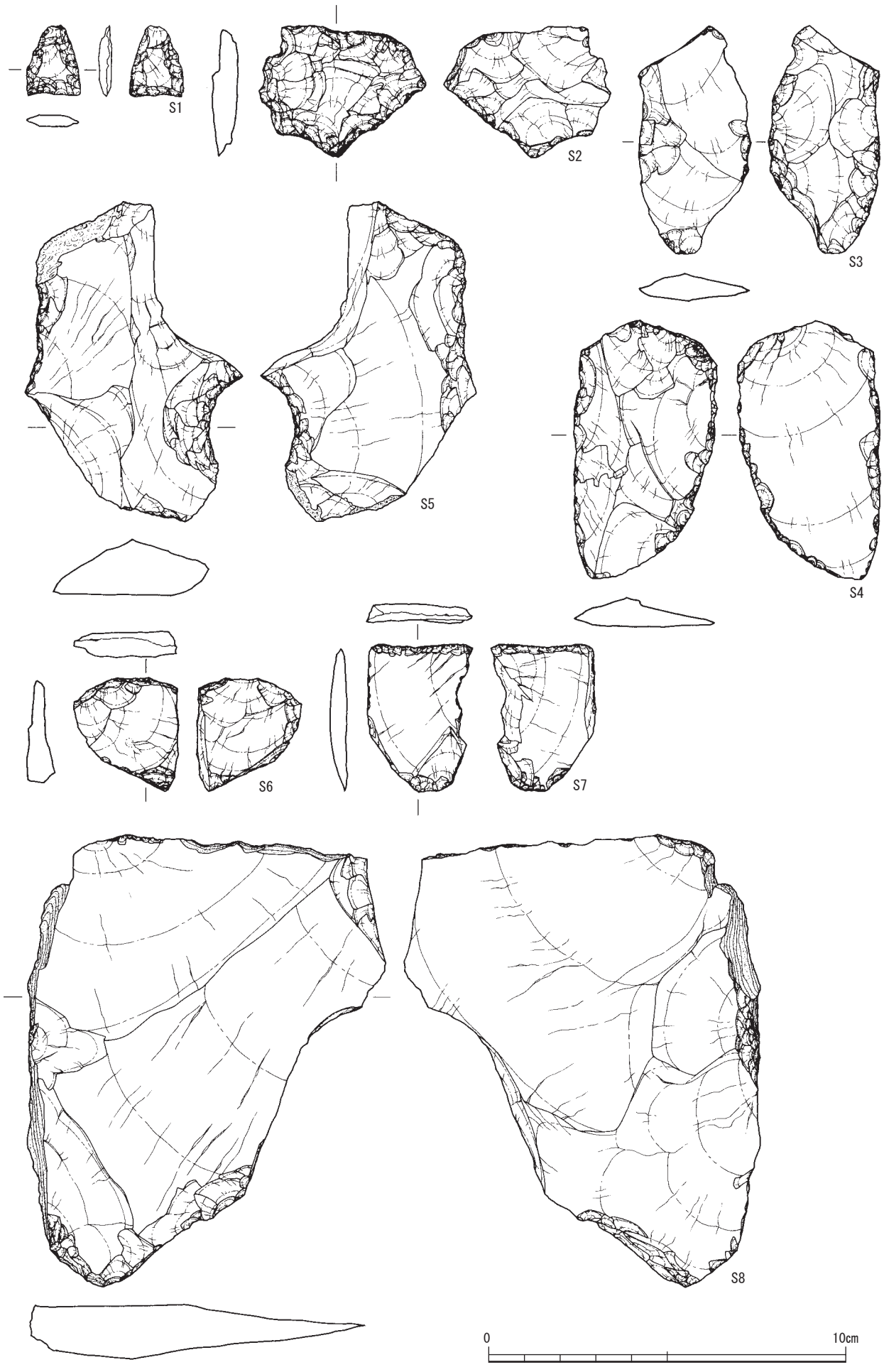

187
189
194
188
193
195
190
192
196
191
199
197
200
202
198
201
203
204
205
0
20cm

包含層出土遺物(1)

図版 18　遺物

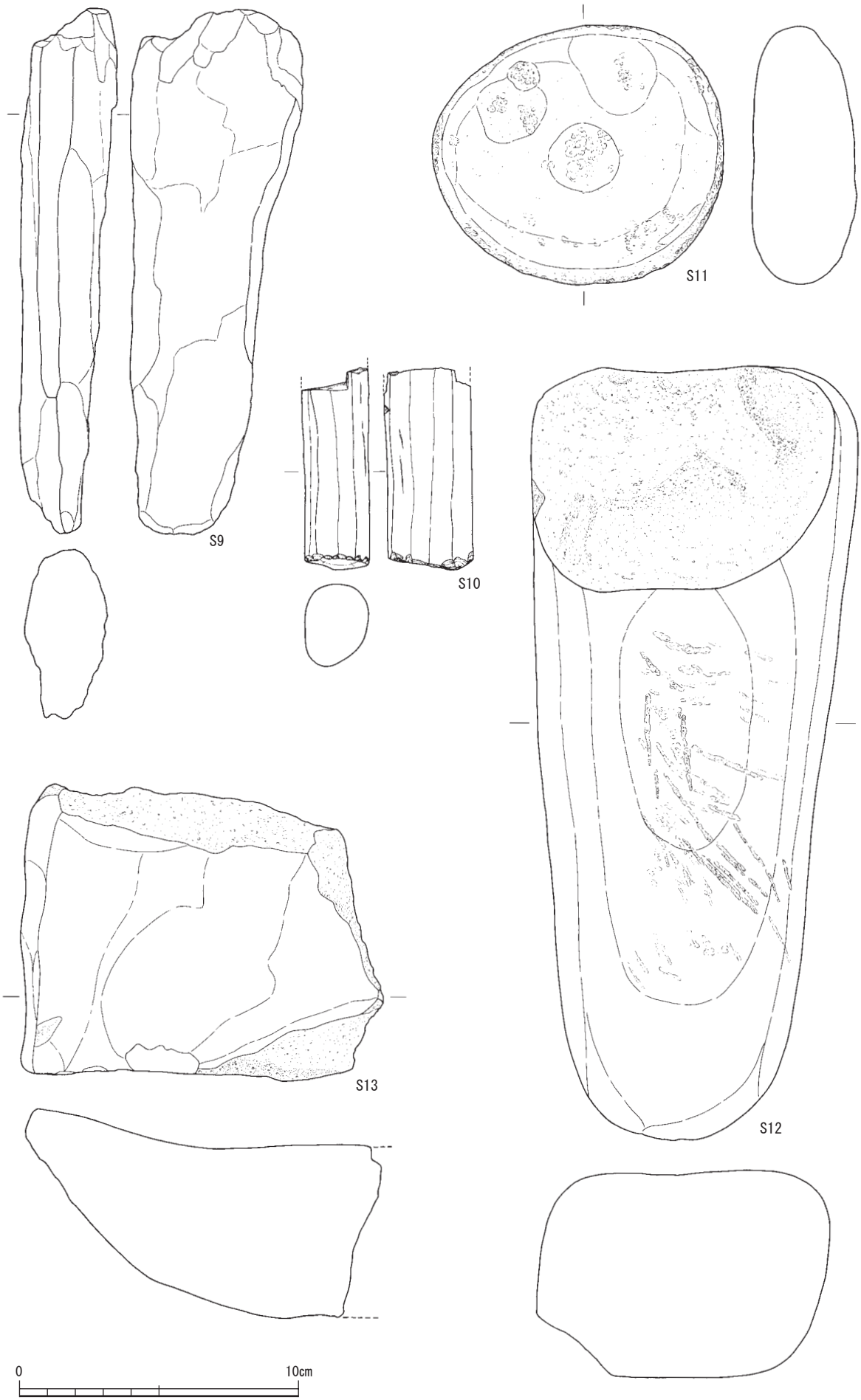


包含層出土遺物(2)



出土石器（打製）

図版 20　遺物



出土石器（磨製）

写真図版

遺跡周辺
（東から）

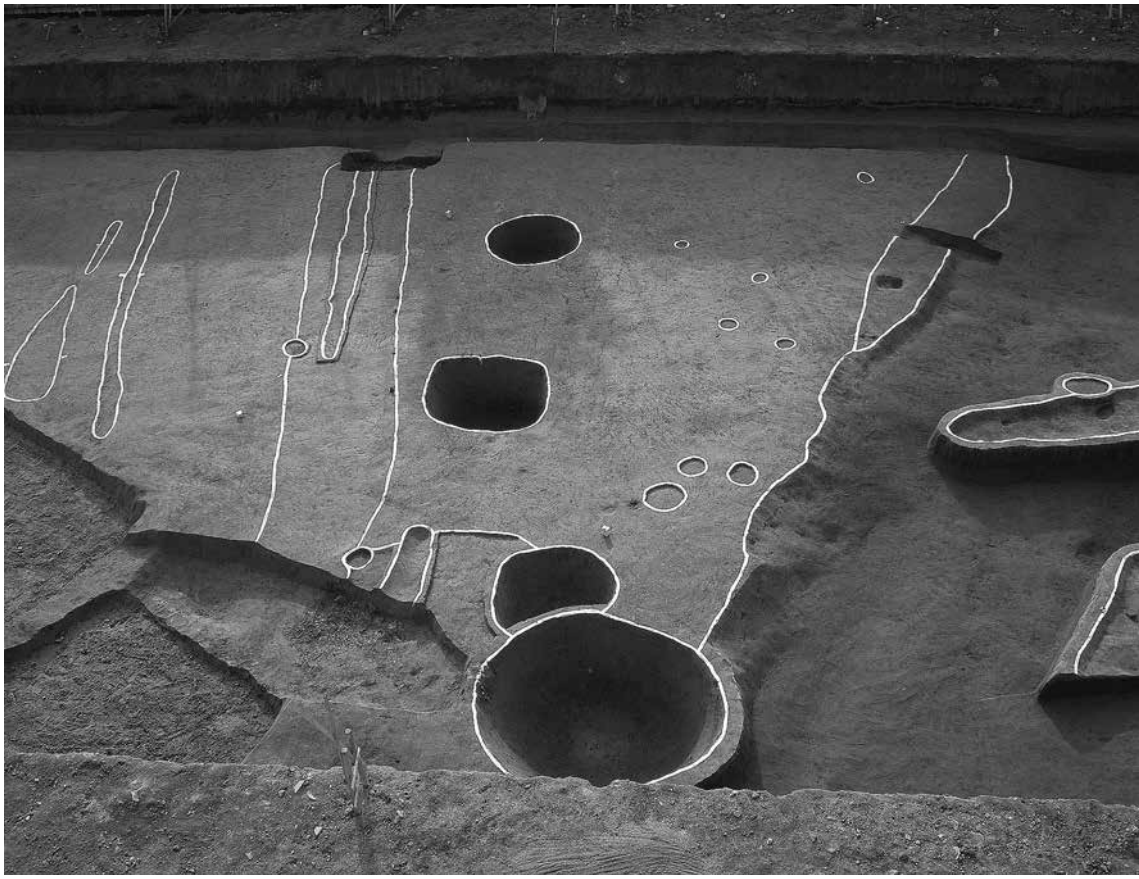
調査対象地
（南から）

調査対象地から見た馬木遺跡
（北から）

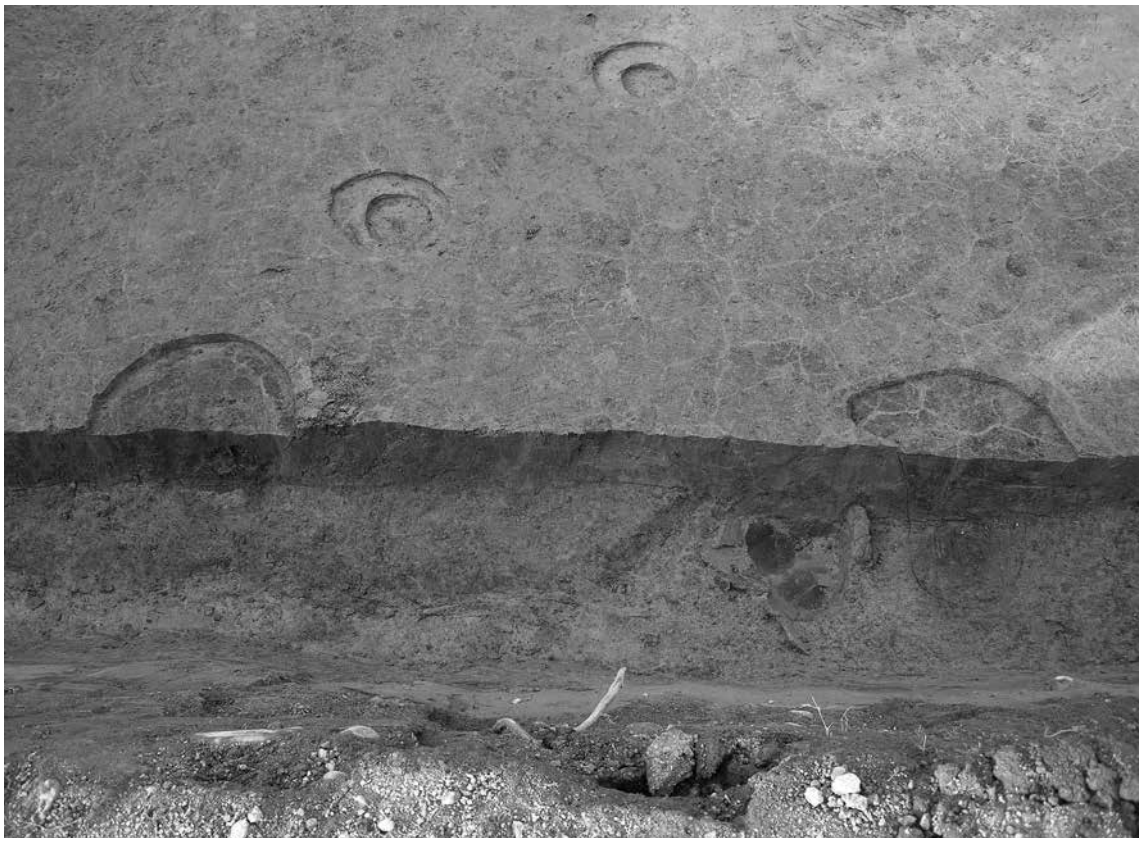
全景
（東から）

調査区東半部
（西から）

左）調査区南壁断面
（北西から）
右）調査区南壁断面
（部分・北から）

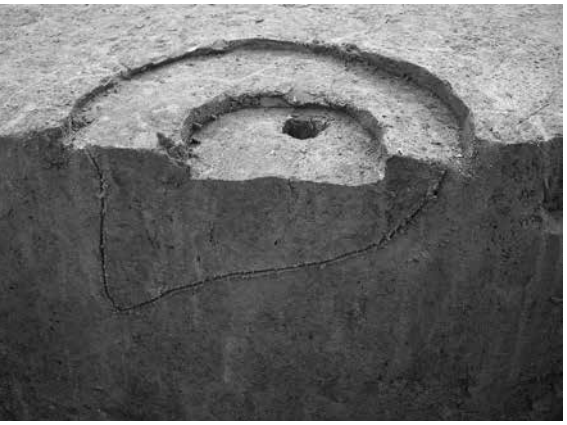
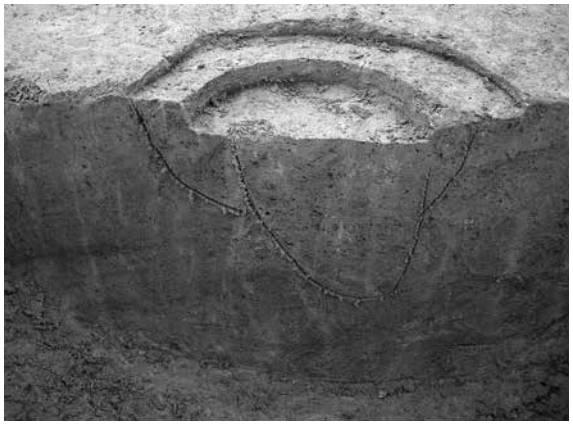


野井戸
（北から）



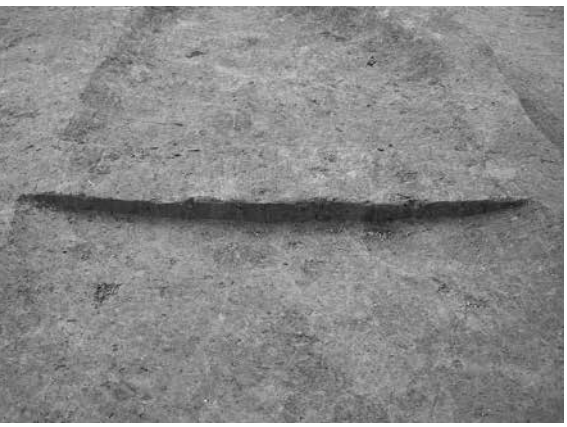
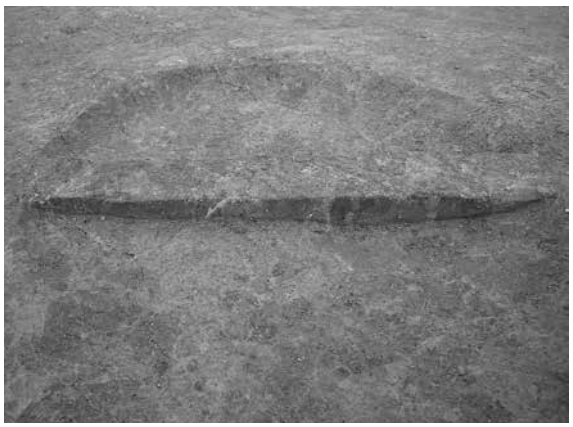
柱穴列
（南から）

左） P 007 断面
（南から）
右） P 008 断面
（西から）

左） P 004 断面
（東から）
右） P 005 断面
（東から）

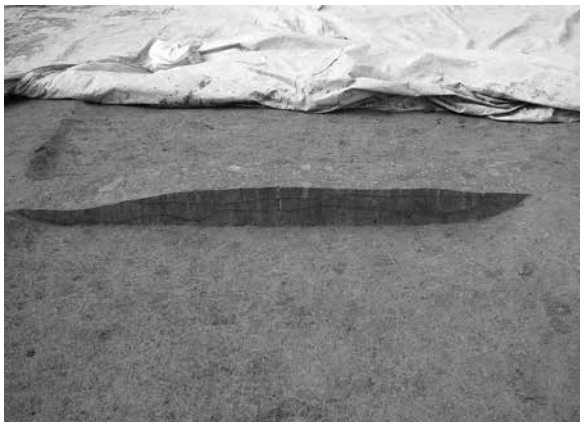
左） S K 001 断面
（南から）
右） S K 002 断面
（東から）

左） S K 003 断面
（東から）
右） S K 004 断面
（南から）

S R 001
（上層・北から）

左）ＳＲ 001（上層）断面
（北西から）
右）ＳＲ 001（上層）土器出土状況
（東から）



左）ＳＤ 001 断面
（東から）
右）ＳＤ 001 土器出土状況
（東から）

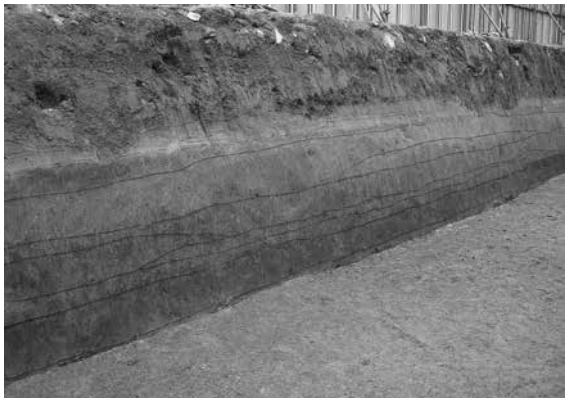
左）ＳＤ 003 断面
（南から）
右）ＳＤ 004 断面
（南から）

ＳＤ 005 土器出土状況
（北から）

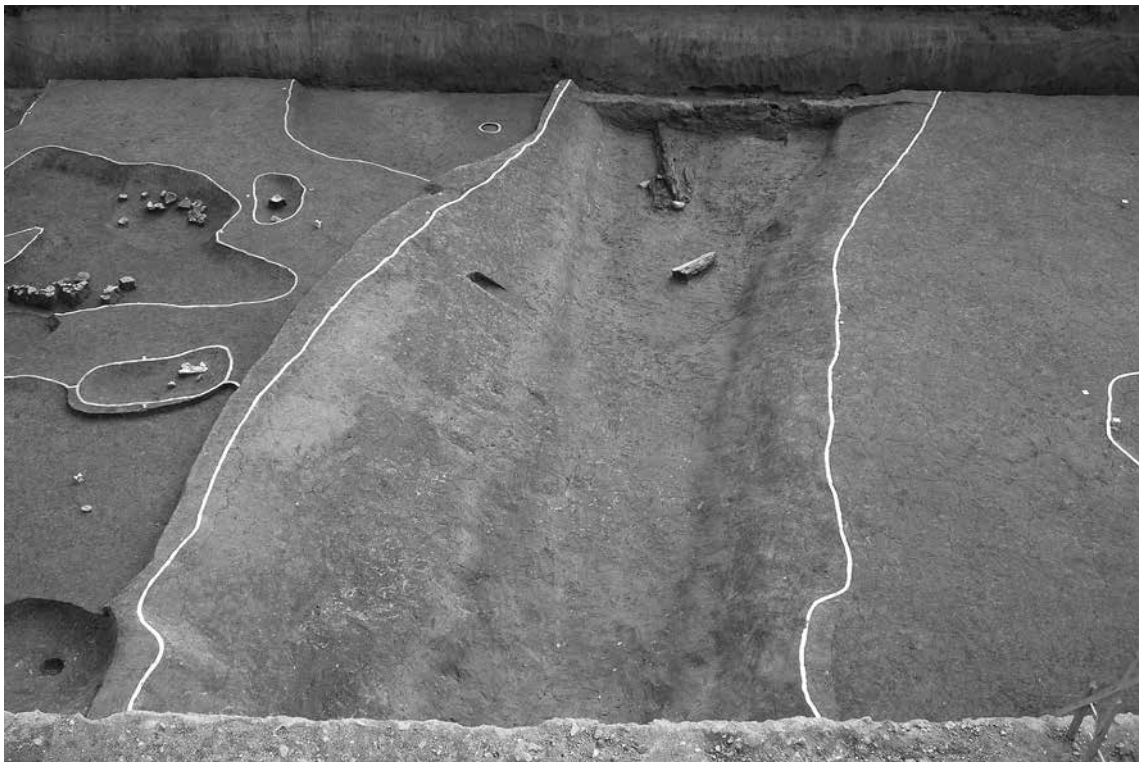
左）ＳＤ 009 断面
（北から）
右）ＳＤ 013 断面
（東から）

全景
（東から）

東半部
（西から）

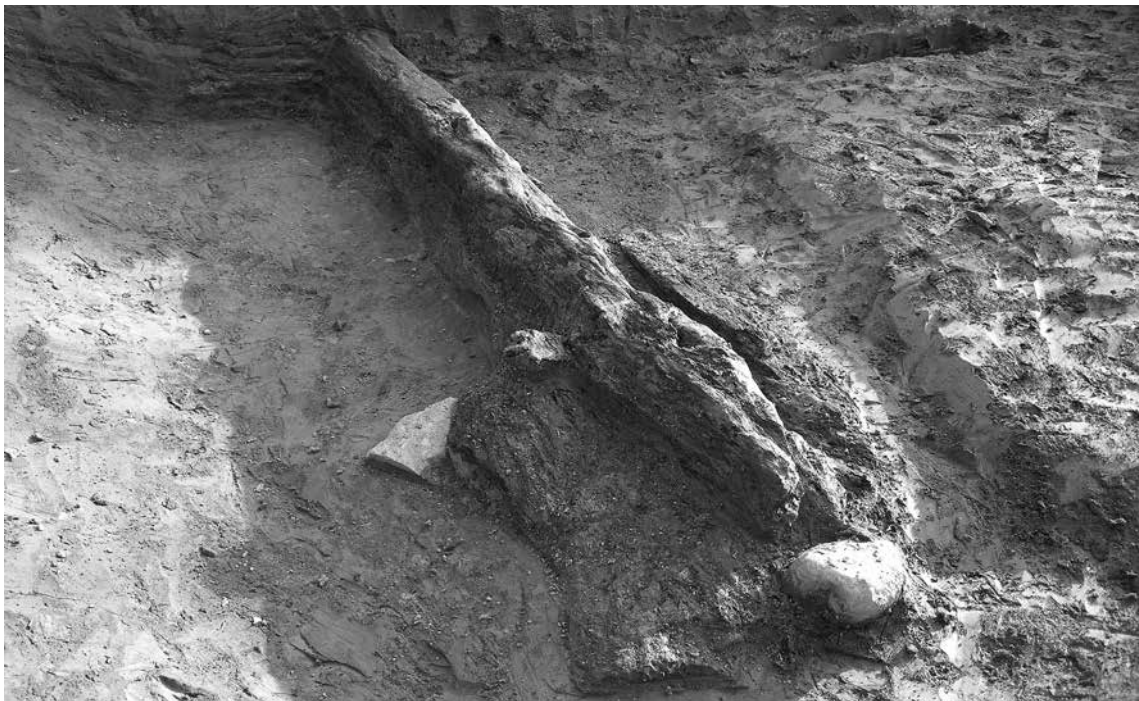


左）南壁東半部断面
（北東から）
右）西壁断面
（北東から）



ＳＲ 001（下層：北から）

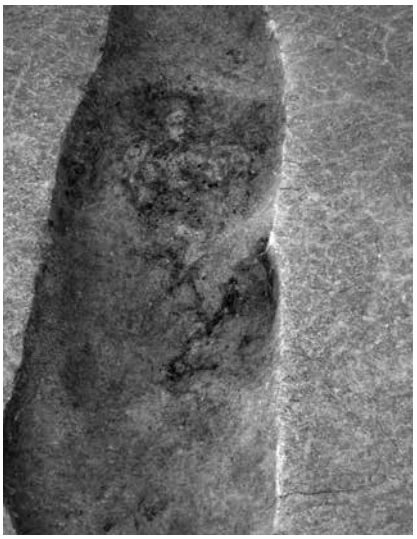
左）ＳＲ 001（下層）断面
（南から）
右）ＳＲ 001（下層）断面
（北から）



ＳＲ 001（下層）流木出土状況
（北から）

ＳＫ 201
（東から）

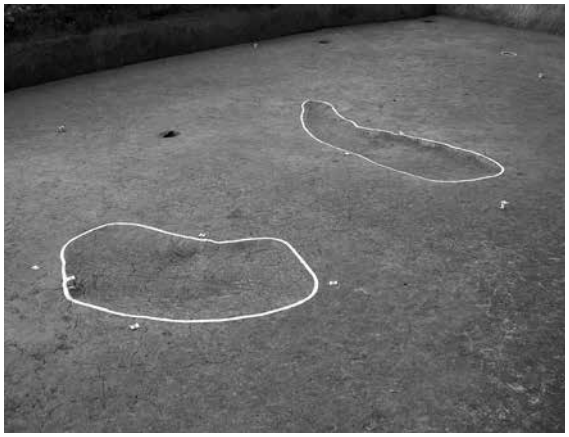
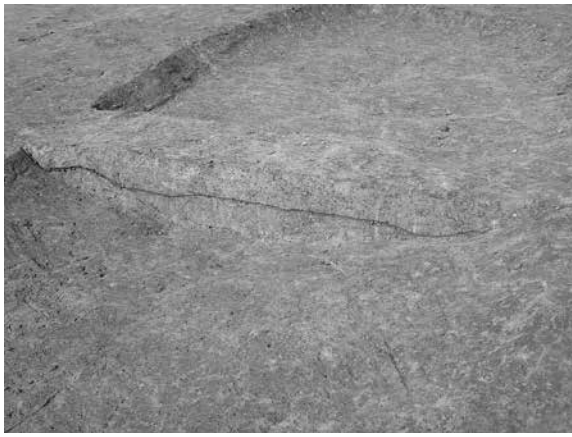
左）ＳＫ 201 断面
（東から）
右）ＳＫ 201 土器出土状況
（東から）



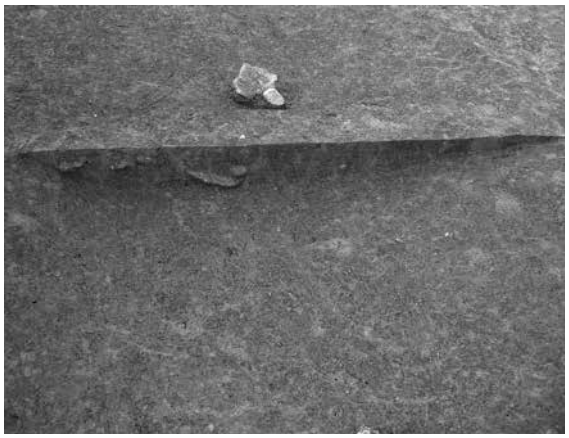
左）ＳＫ 201 炭の散布状況①
（東から）
右）ＳＫ 201 炭の散布状況②
（土器取り上げ後：東から）

左）ＳＫ 201 底部段割断面①
（東から）
右）ＳＫ 201 底部段割断面②
（東から）

左）ＳＫ 202 断面
（東から）
右）ＳＫ 203 断面
（東から）

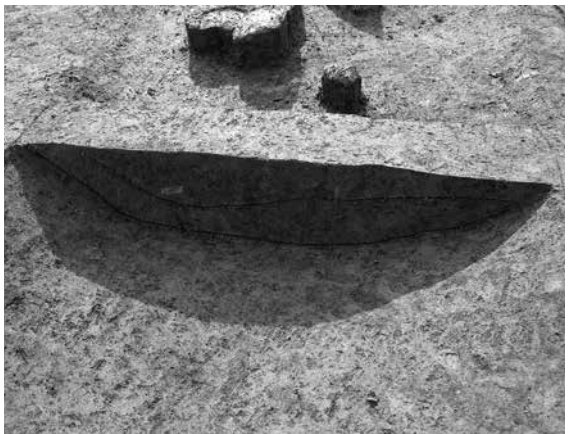



左）ＳＫ 204・205
（東から）
右）ＳＫ 204 断面
（南から）



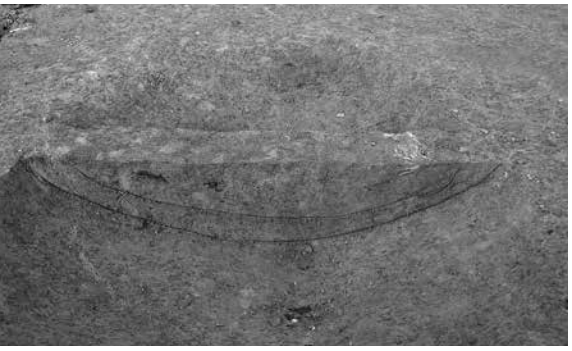
左）ＳＫ 205 断面
（南から）
右）ＳＫ 205 土器出土状況
（西から）

左）ＳＫ 208 断面
（南から）
右）ＳＫ 208 土器出土状況
（西から）



左）ＳＫ 209 断面
（東から）
右）ＳＫ 209 土器出土状況
（南から）

左）ＳＫ 210
（南から）
右）ＳＫ 211 断面
（南から）



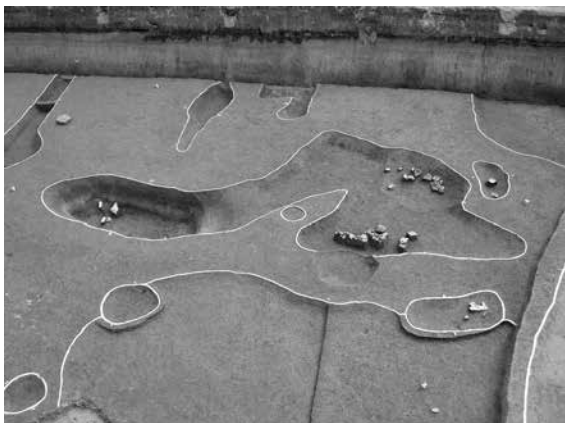
左）ＳＫ 212 断面
（東から）
右）ＳＫ 213 断面
（西から）

西半部の遺構
（東から）

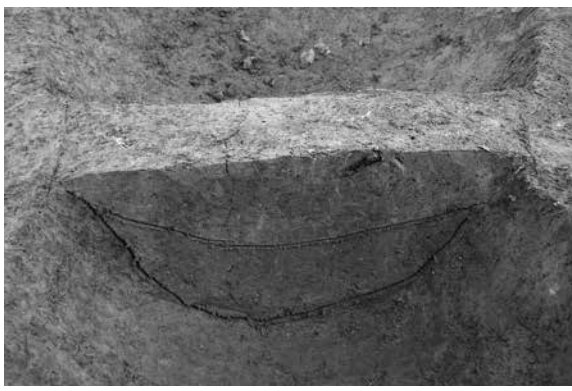
ＳＲ 001（下層）東岸付近の遺構
（南から）

炭土坑群
（東から）

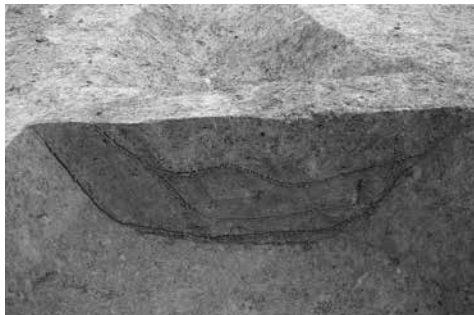
左）ＳＫ 201 断面
（東から）
右）ＳＫ 202 断面
（東から）



左）ＳＫ 203
（北から）
右）ＳＫ 203 土器出土状況
（北から）

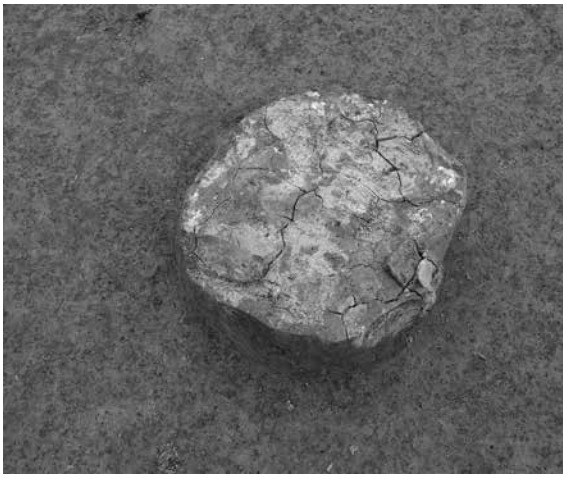


左）ＳＤ 201・202
（南から）
右）ＳＫ 201 断面
（南から）



ＳＤ 202 断面
（南から）

左）ＳＤ 203 断面
（東から）
右）ＳＤ 203 土器出土状況
（南から）



左）ＳＤ 204 断面①
（西から）
右）ＳＤ 204 西半部枯土塊検出状況
（西から）

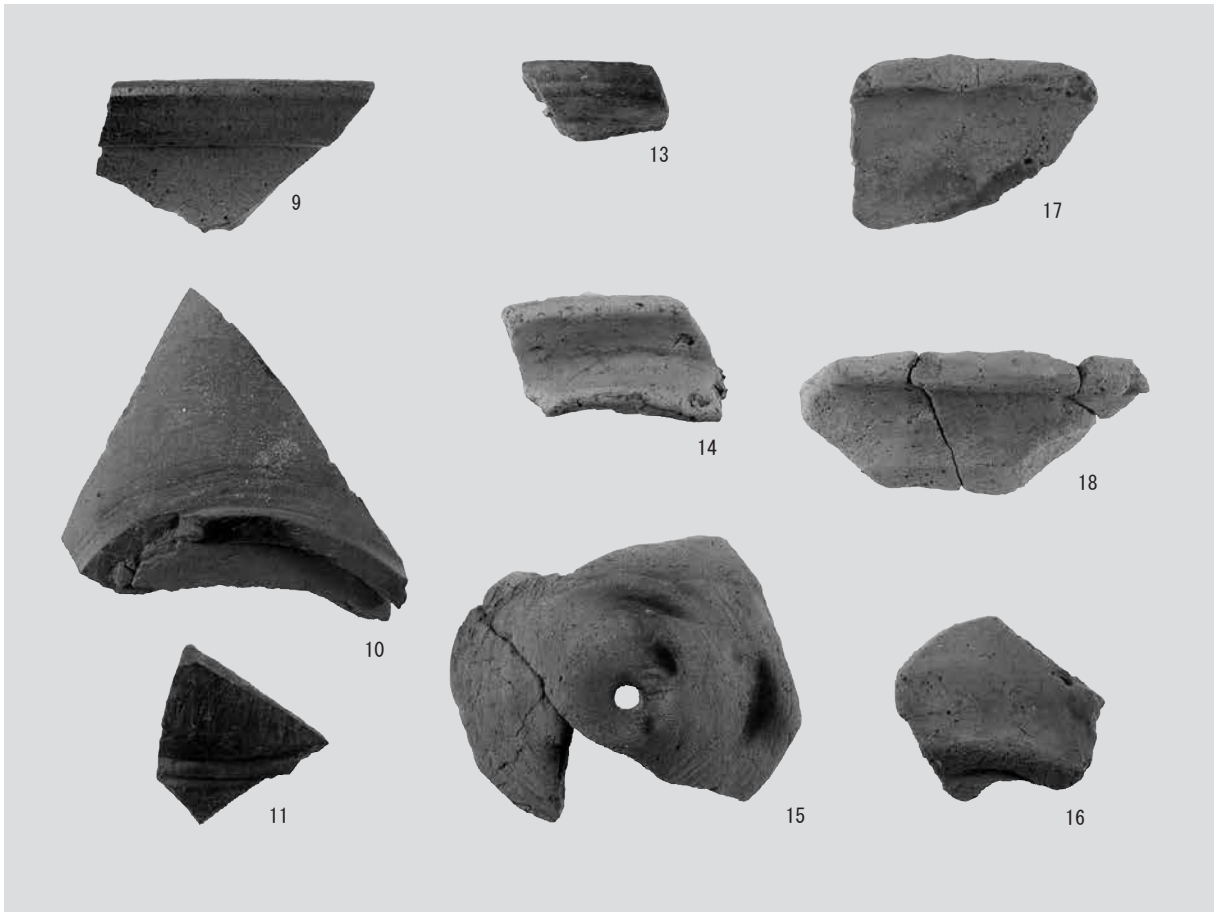
左）ＳＤ 204 断面②噴砂検出状況
（南から）
右）ＳＤ 204 噴砂断割断面
（南から）

左）ＳＤ 205 断面
（南から）
右）ＳＤ 206 断面
（南から）

調査区東西断割南壁断面
（北西から）

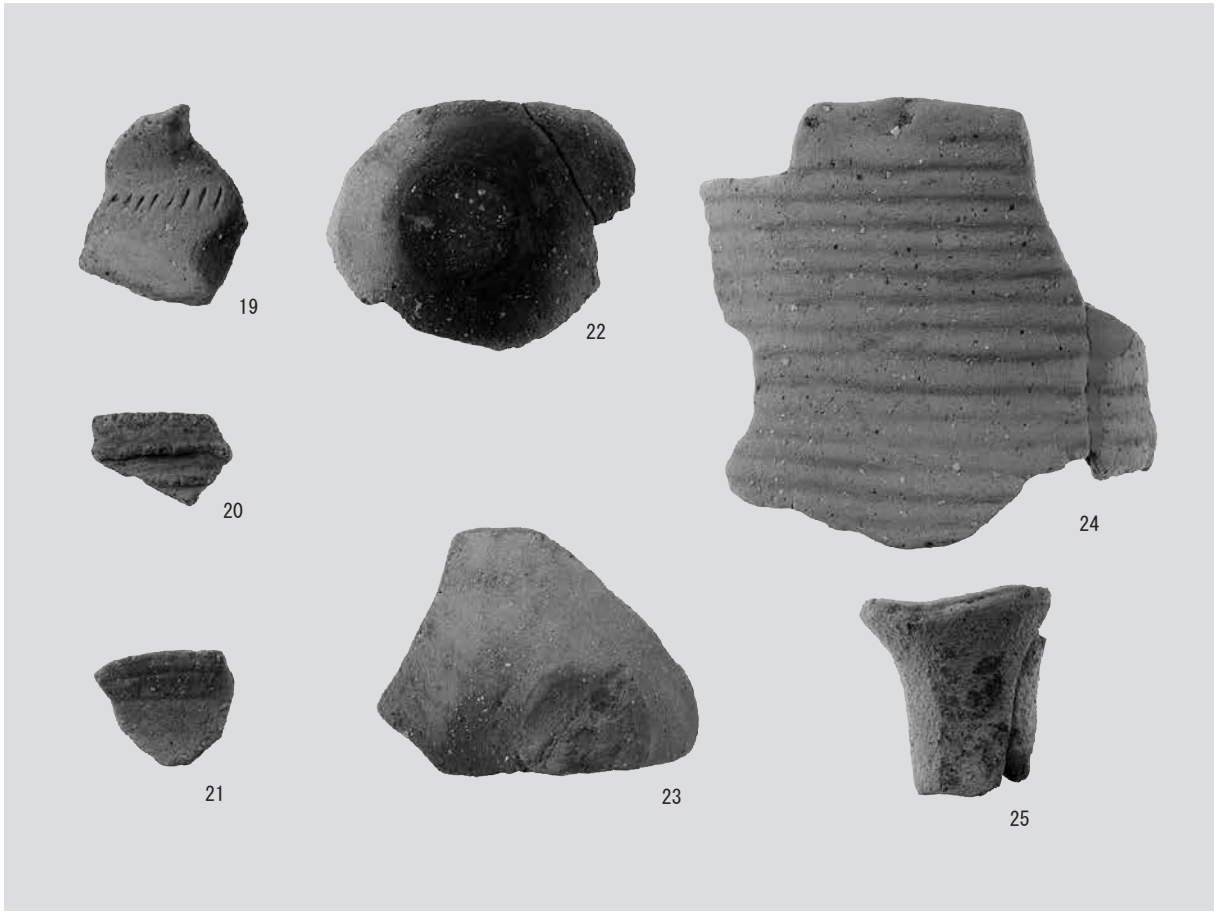
調査区南北断割西壁断面
（北東から）

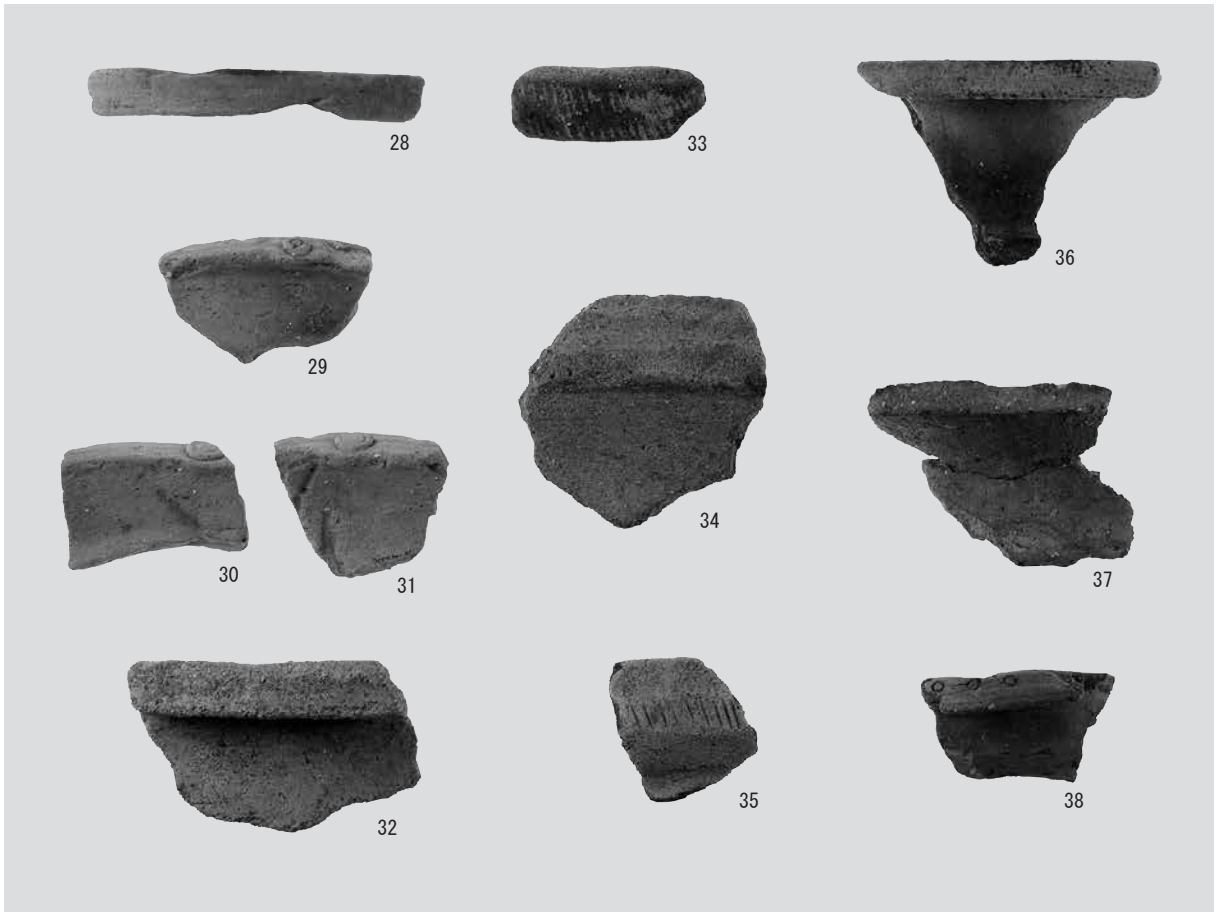
調査風景



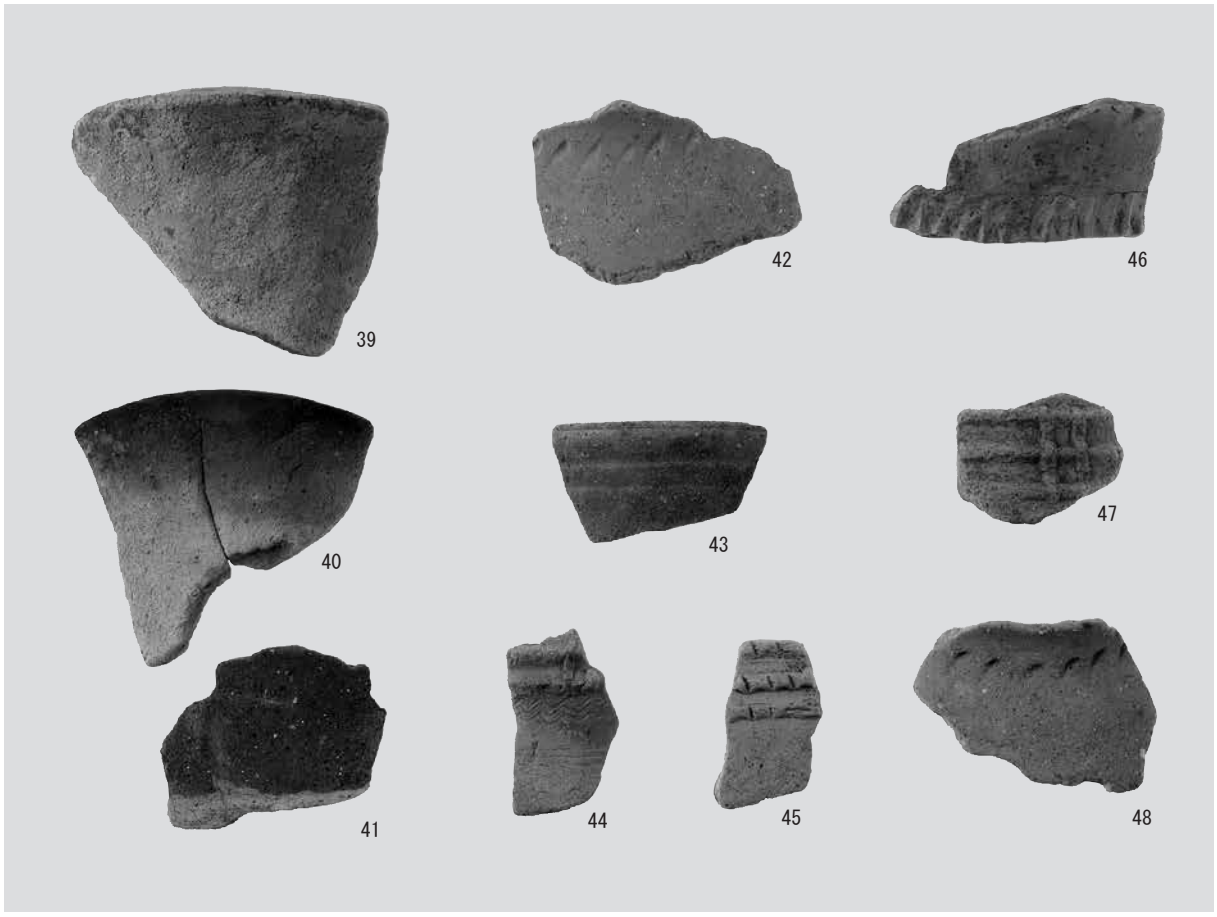
第 1 面　遺構出土遺物(1)

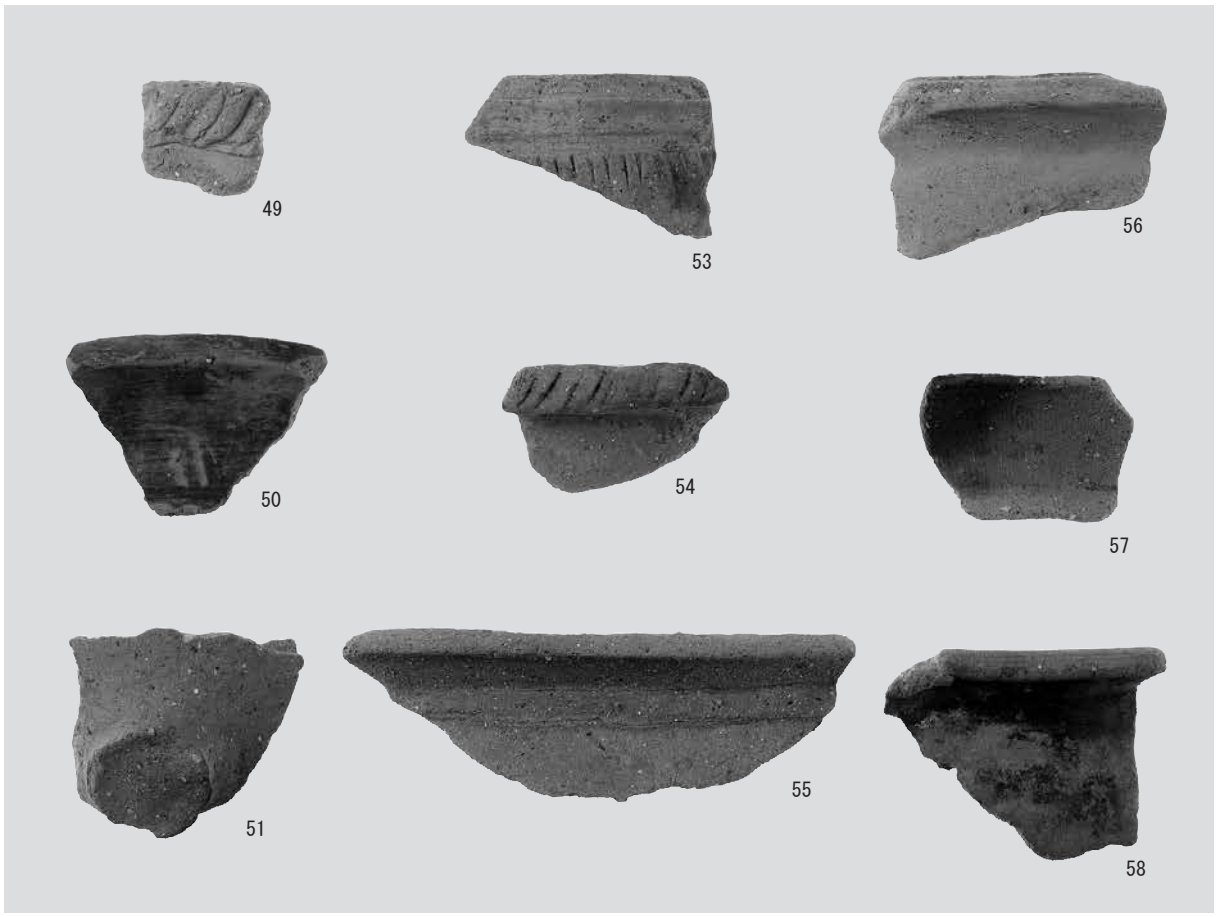
第１面　遺構出土遺物(2)



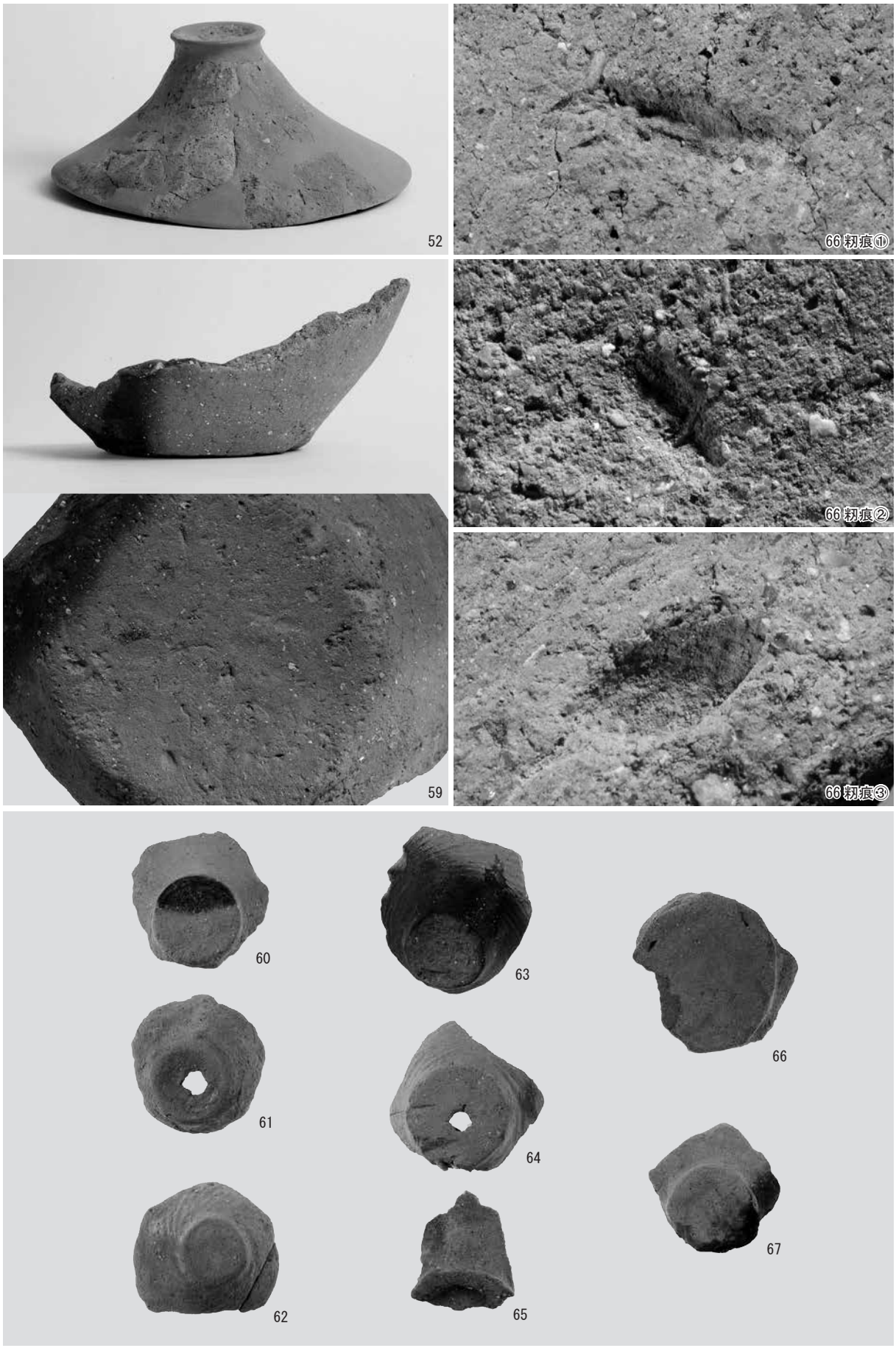


第 1 面　遺構出土遺物(3)

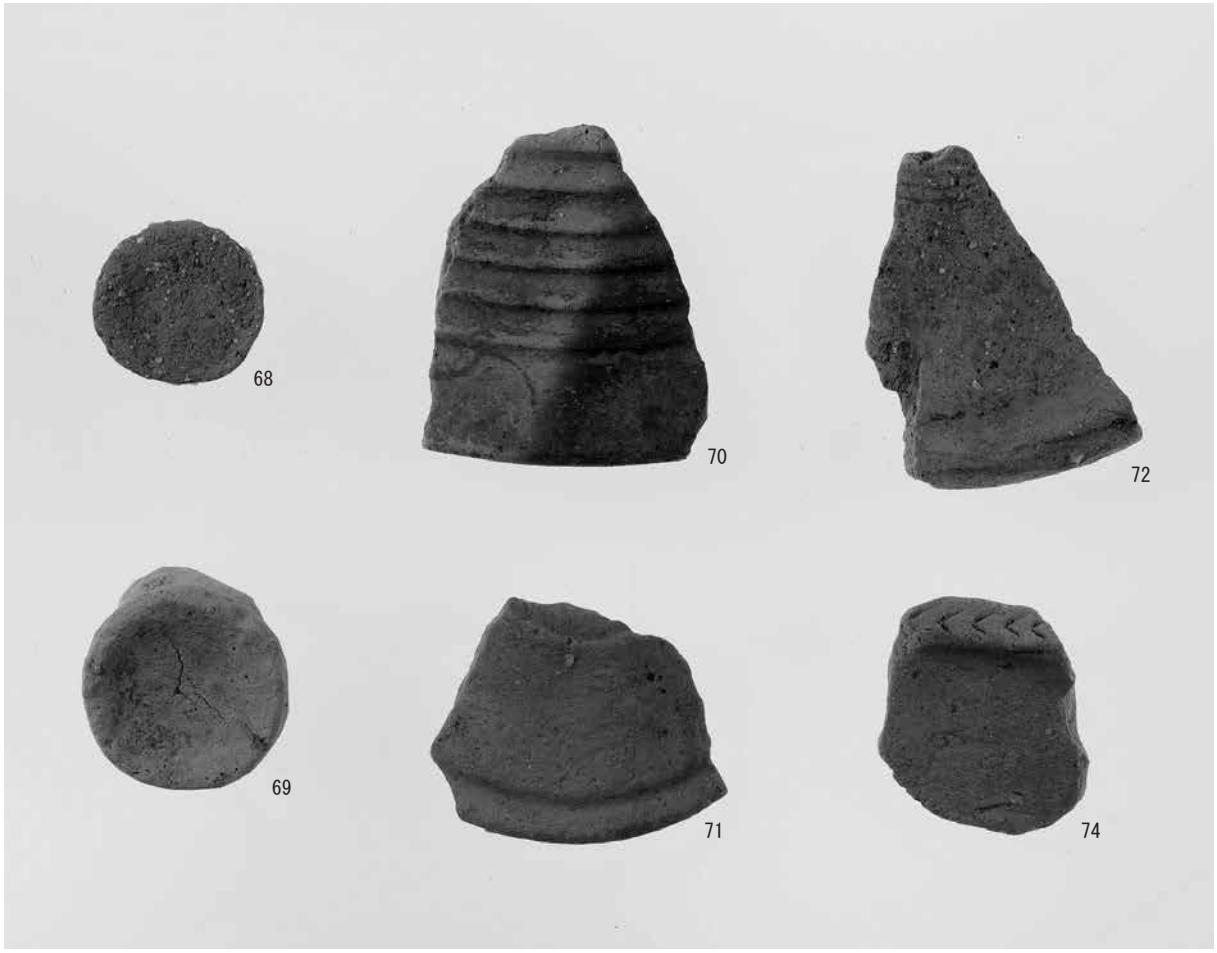




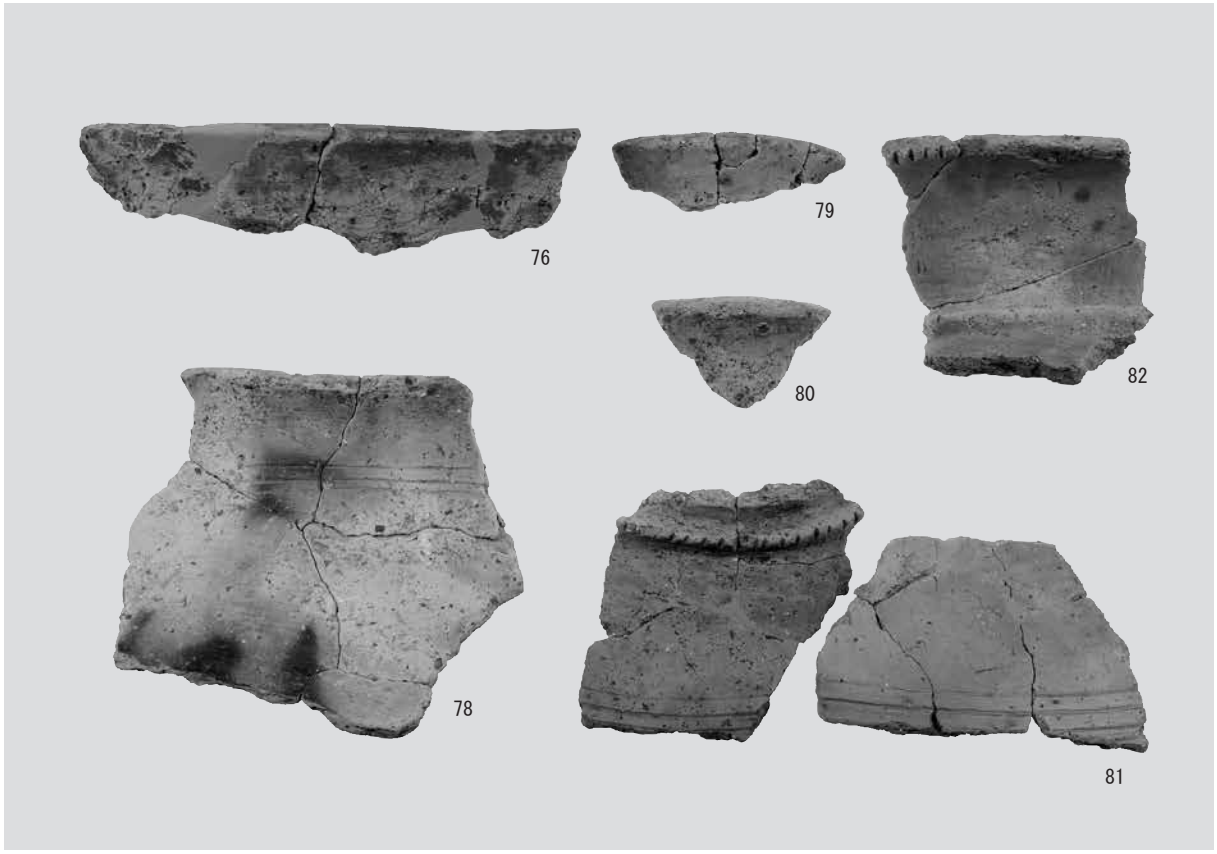
第 1 面　遺構出土遺物(4)

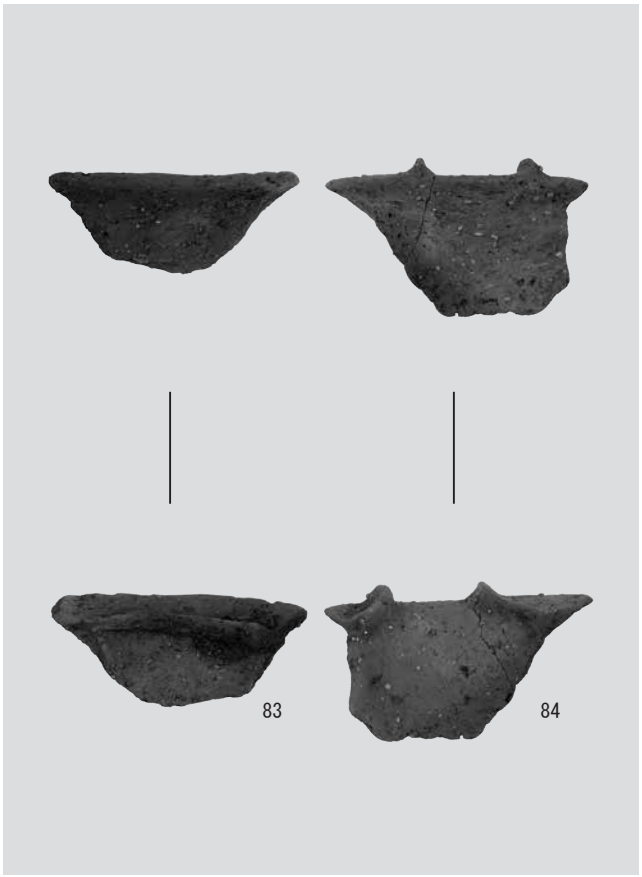


第 1 面　遺構出土遺物(5)

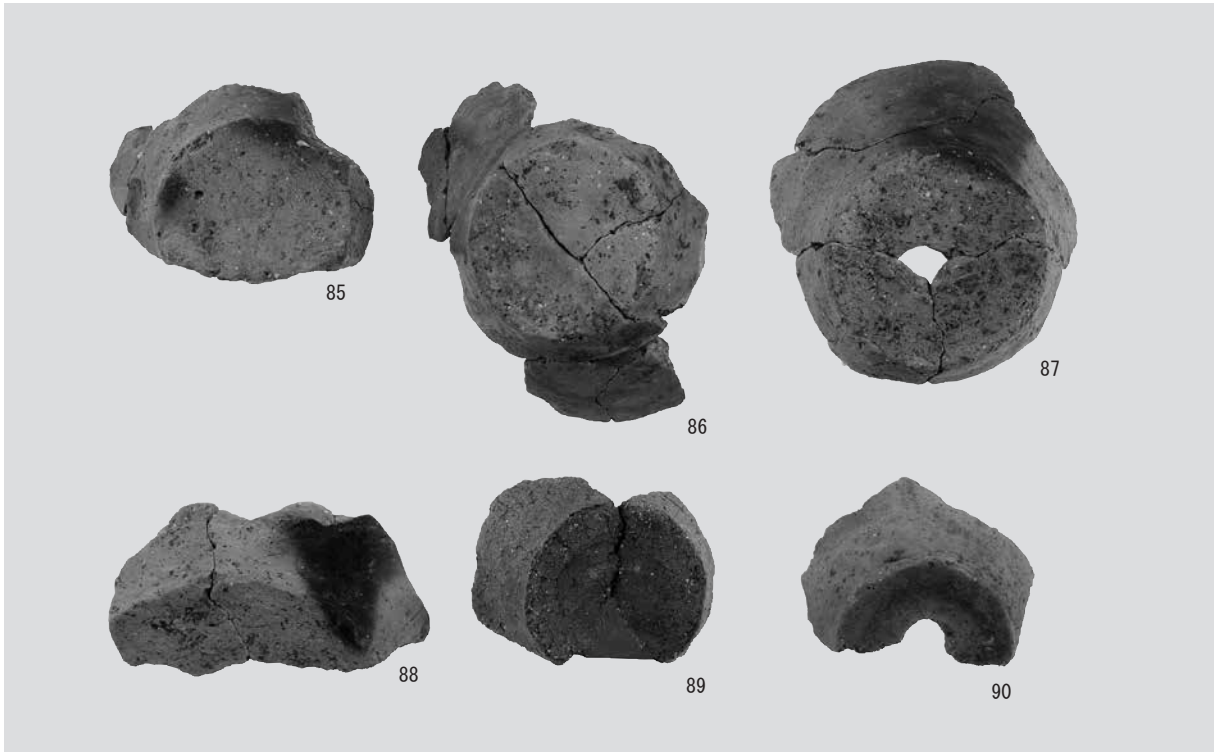


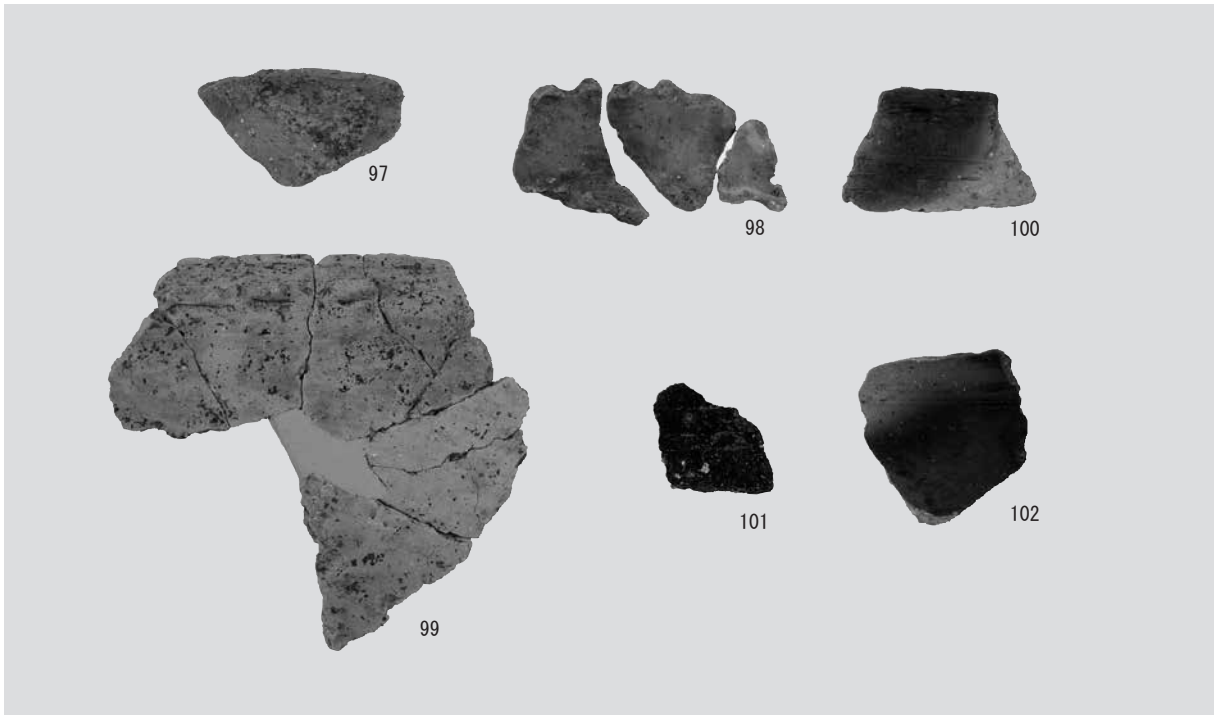
第 1 面　遺構出土遺物(6)





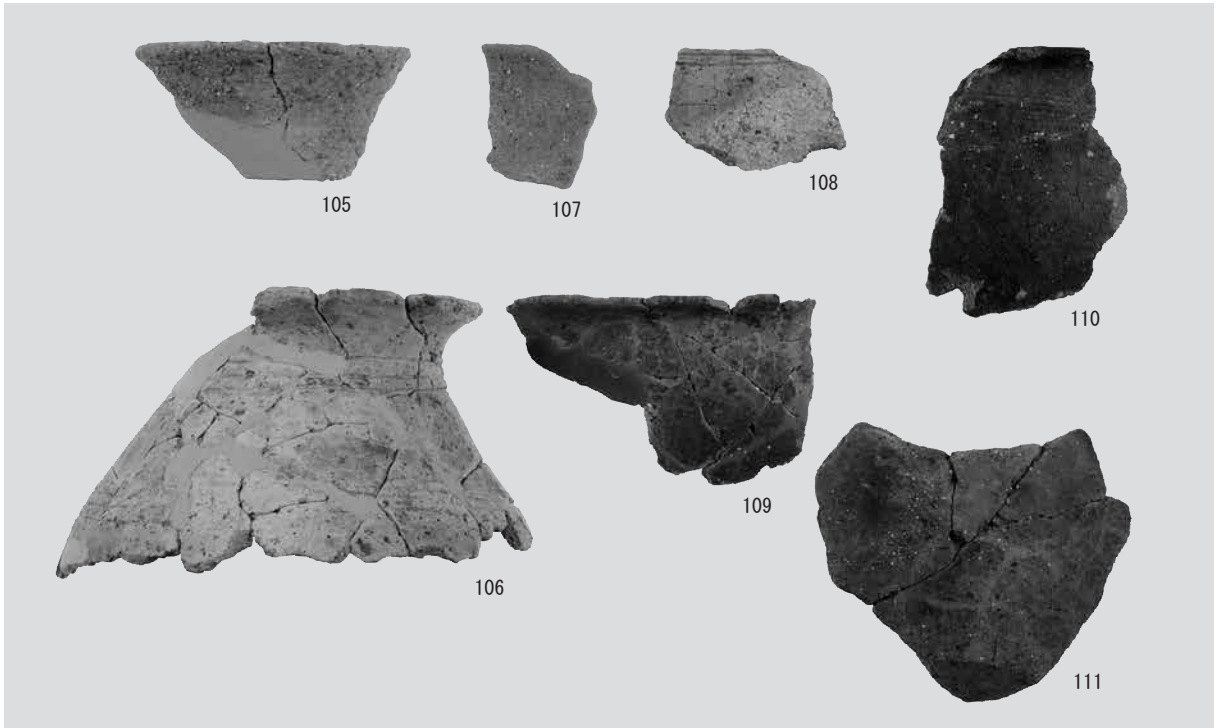
第２面　遺構出土遺物(1)



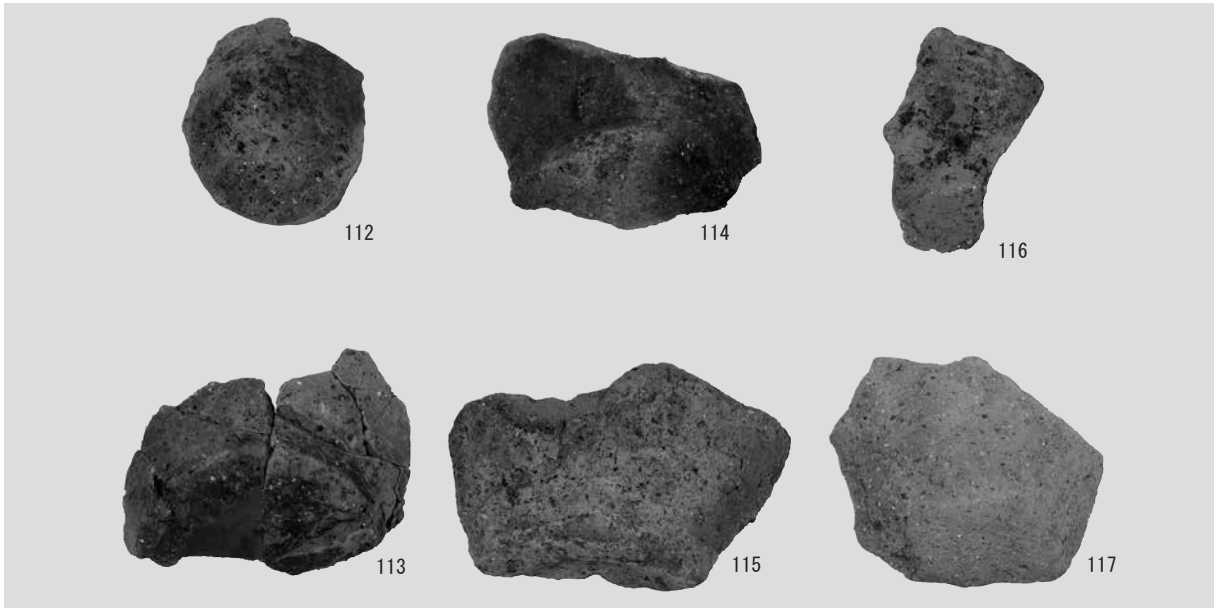


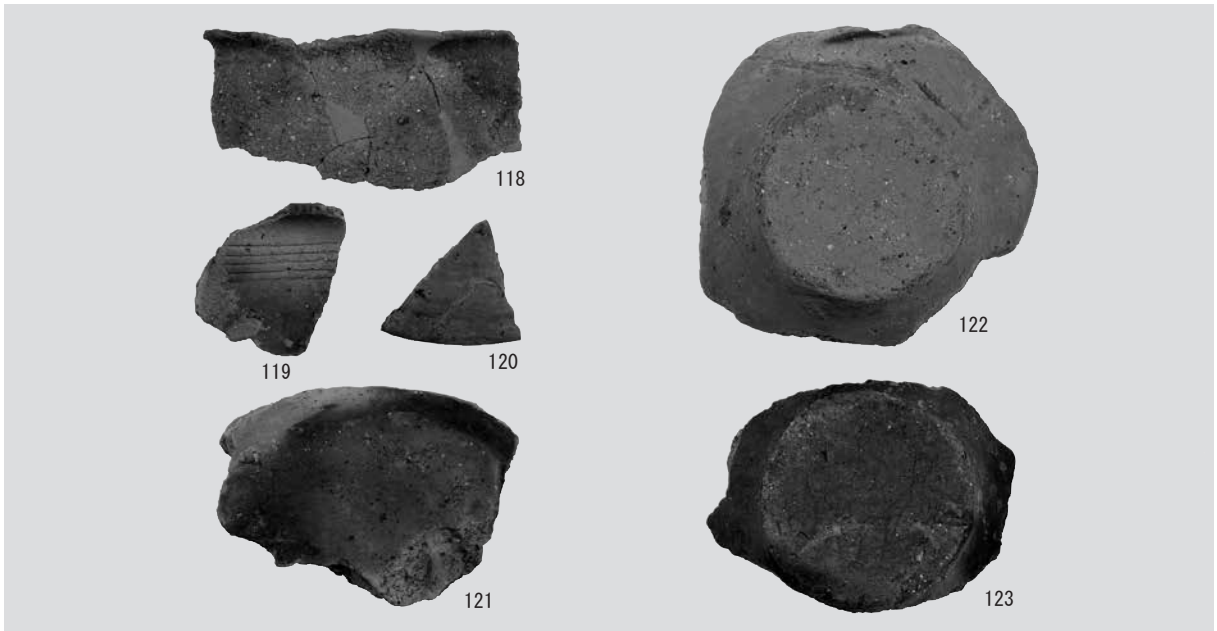
99 突帯部

第２面　遺構出土遺物(2)

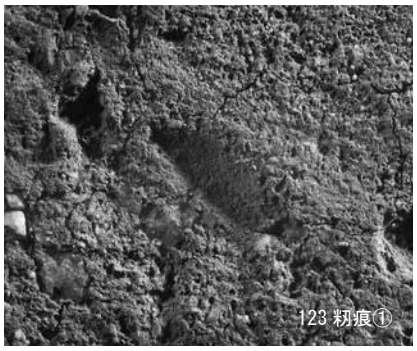


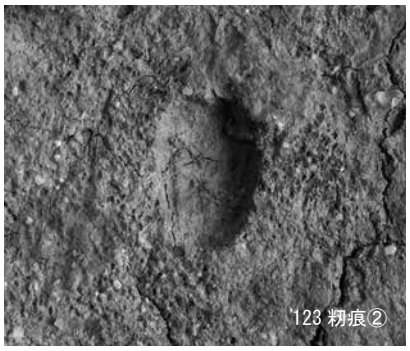
第２面　遺構出土遺物(3)





第２面　遺構出土遺物(4)


123 籾痕①


123 籾痕②

123 籾痕③

124

125

127

126

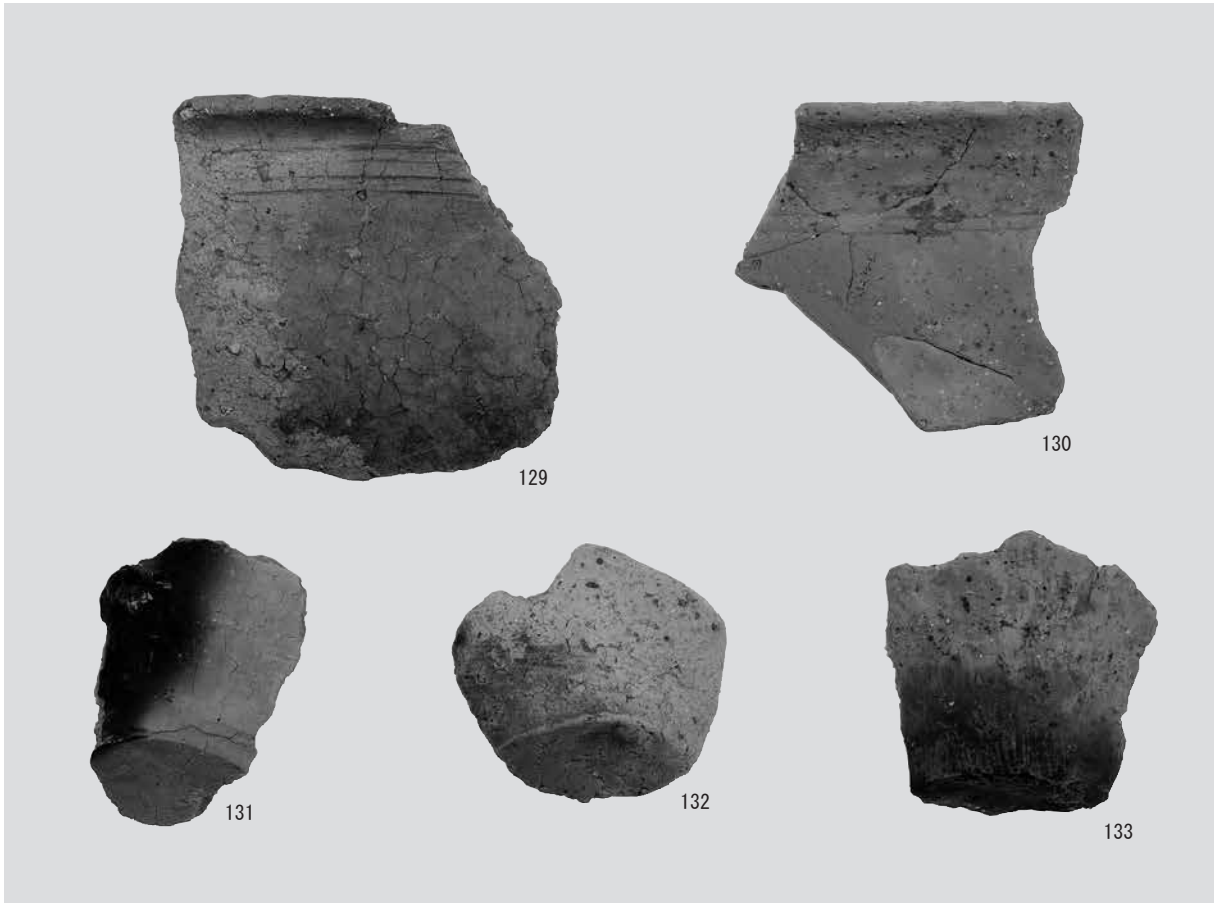
128

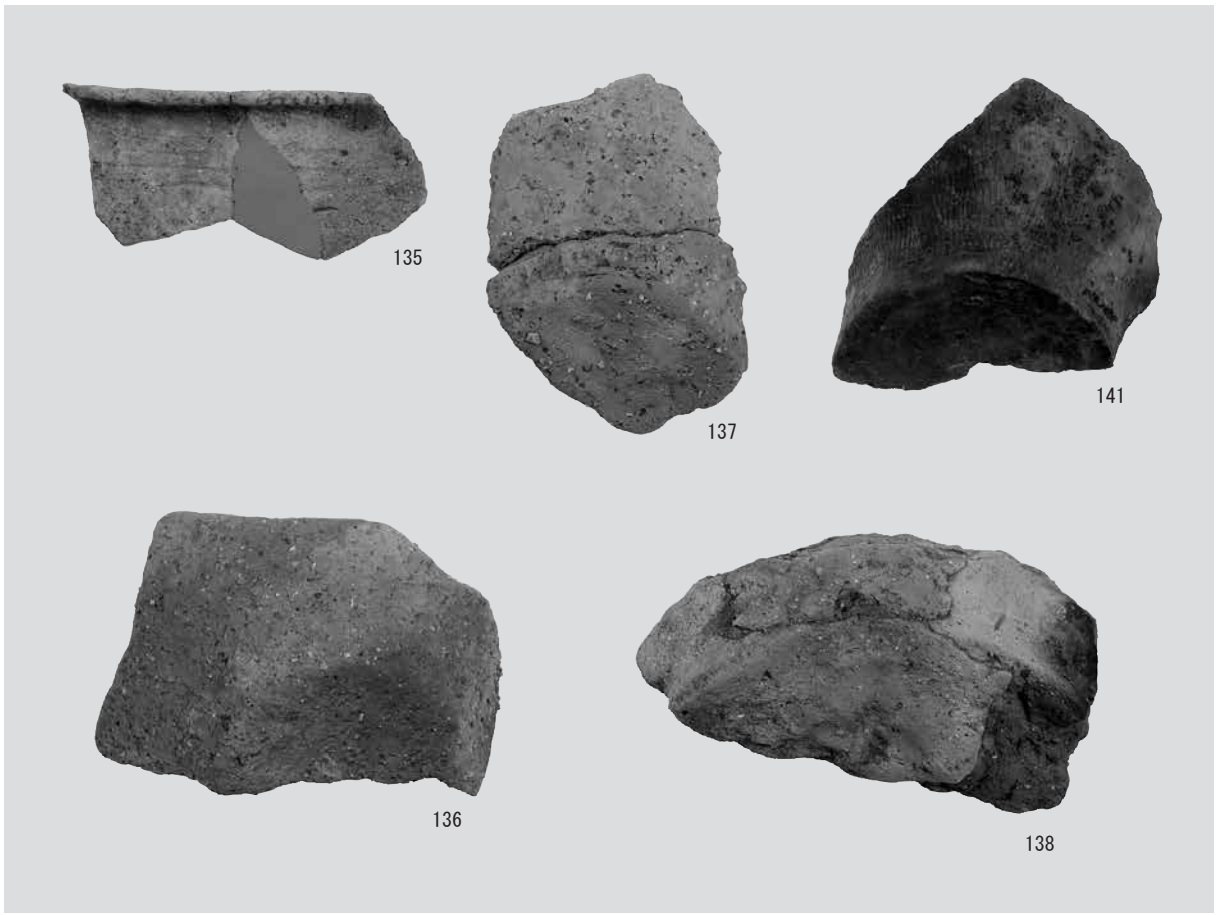
134

139

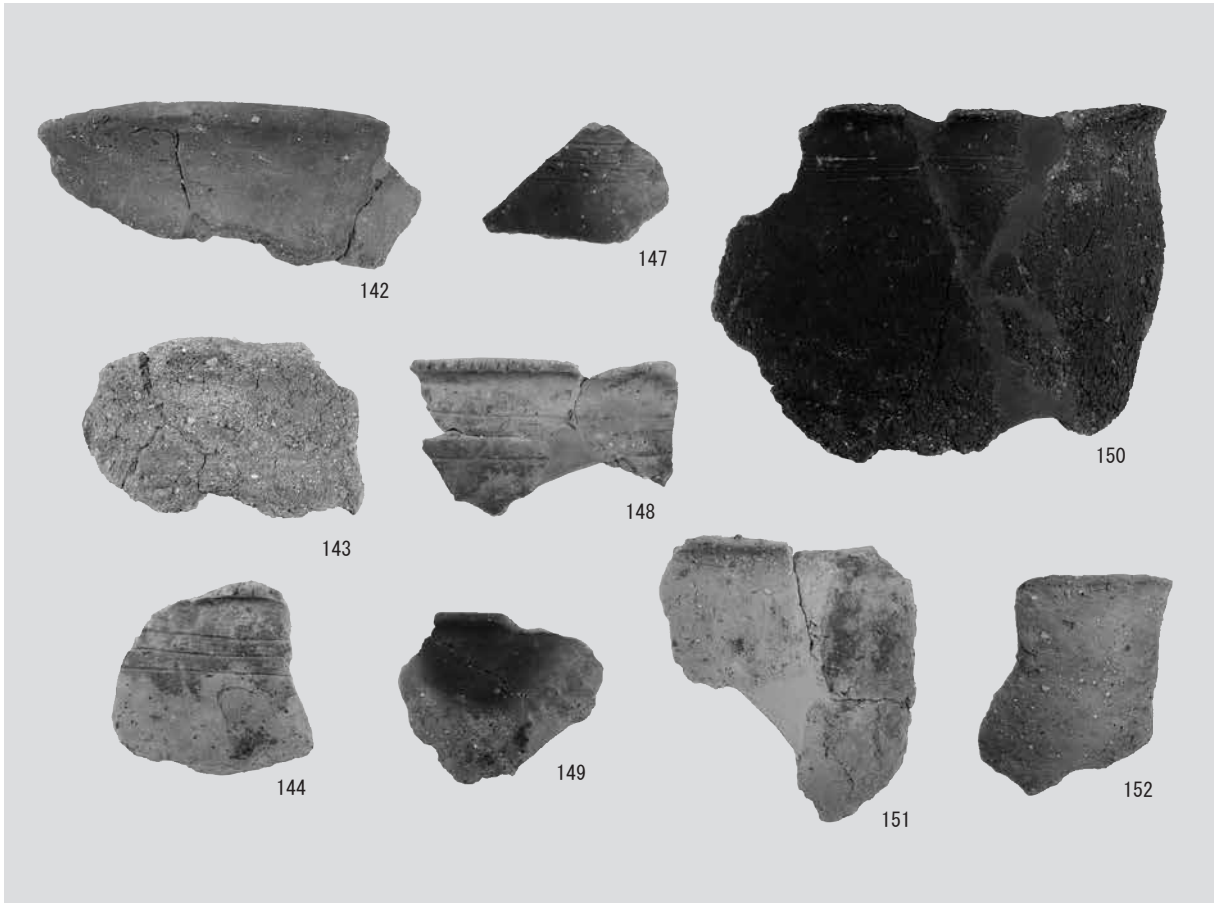
140

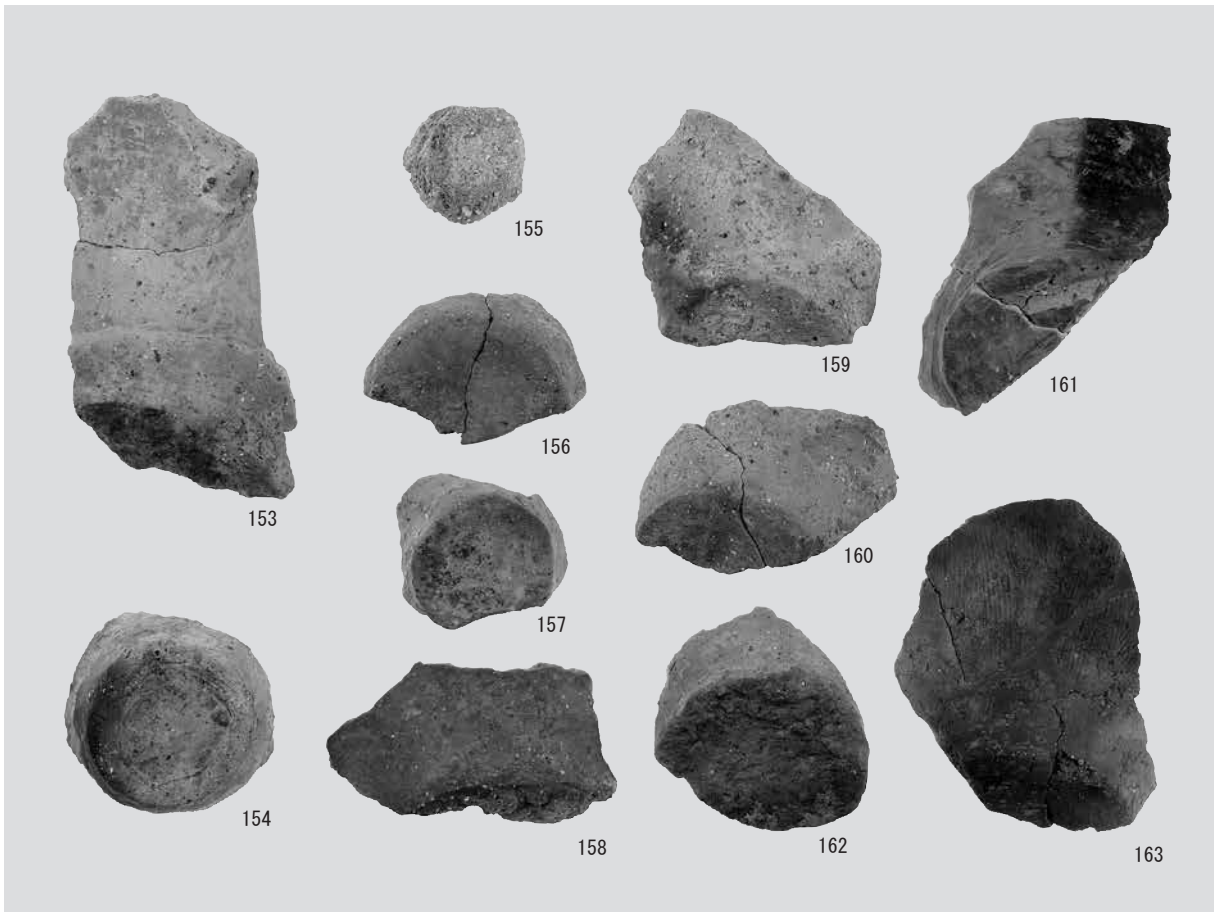
第２面　遺構出土遺物(5)





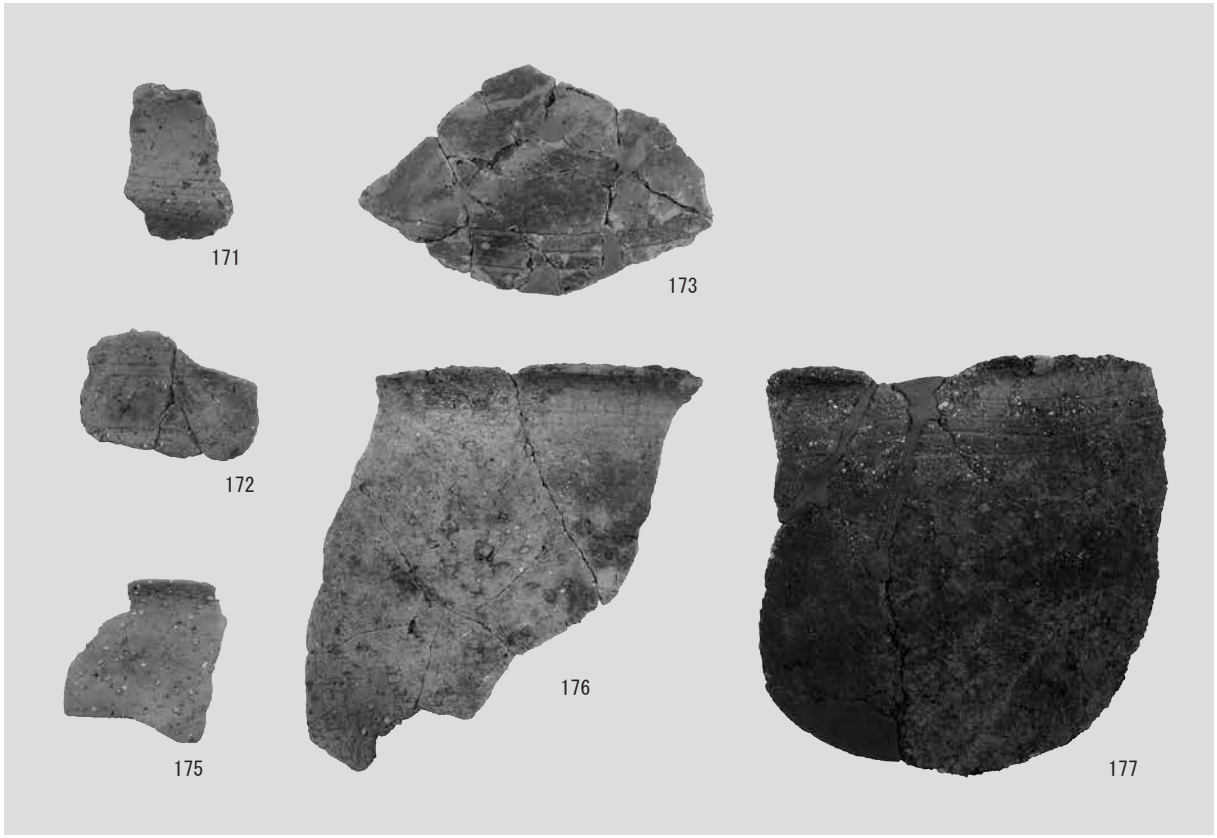
第２面　遺構出土遺物(6)

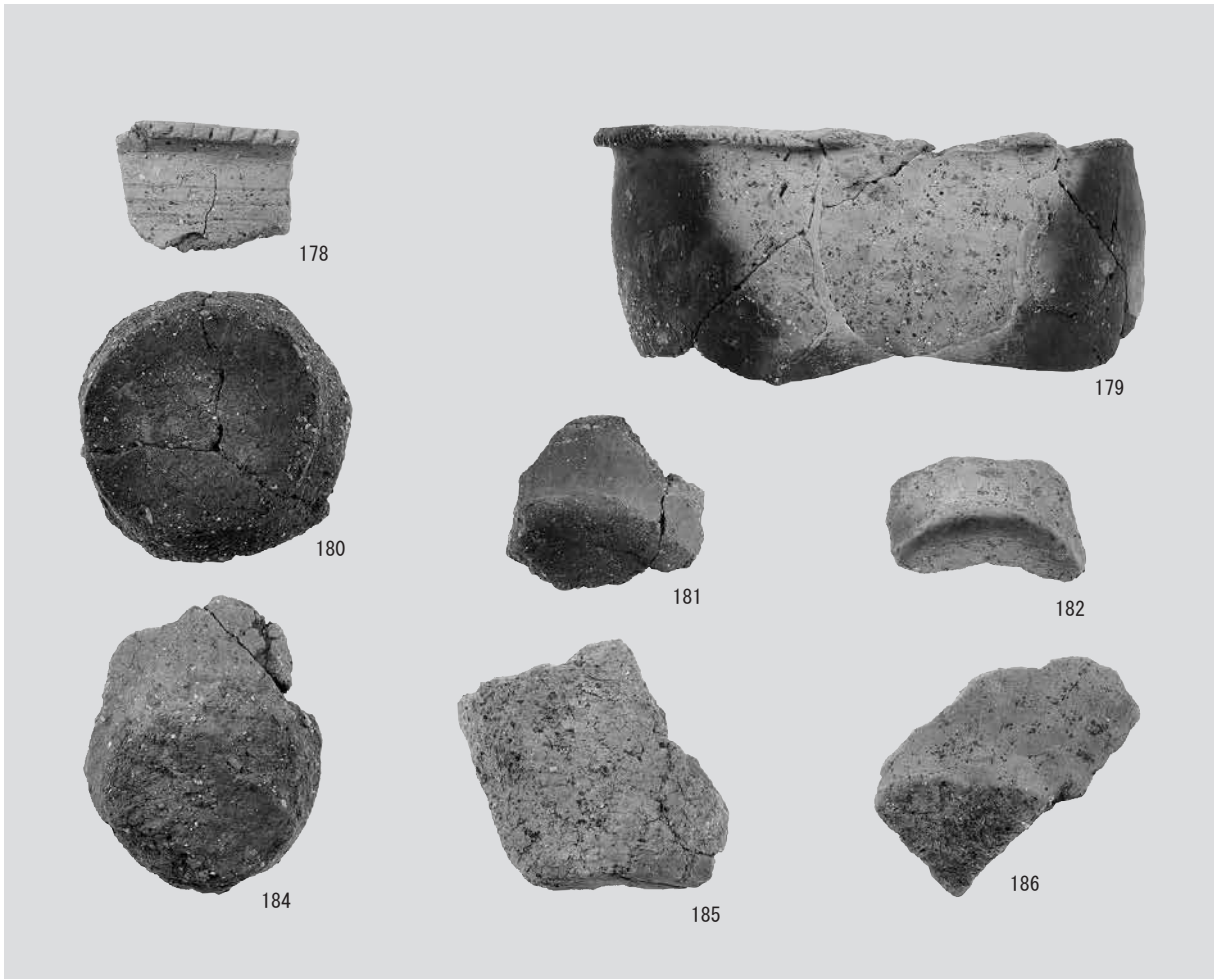

142
147
150
143
148
144
149
151
152


153
155
159
161
156
160
157
154
158
162
163

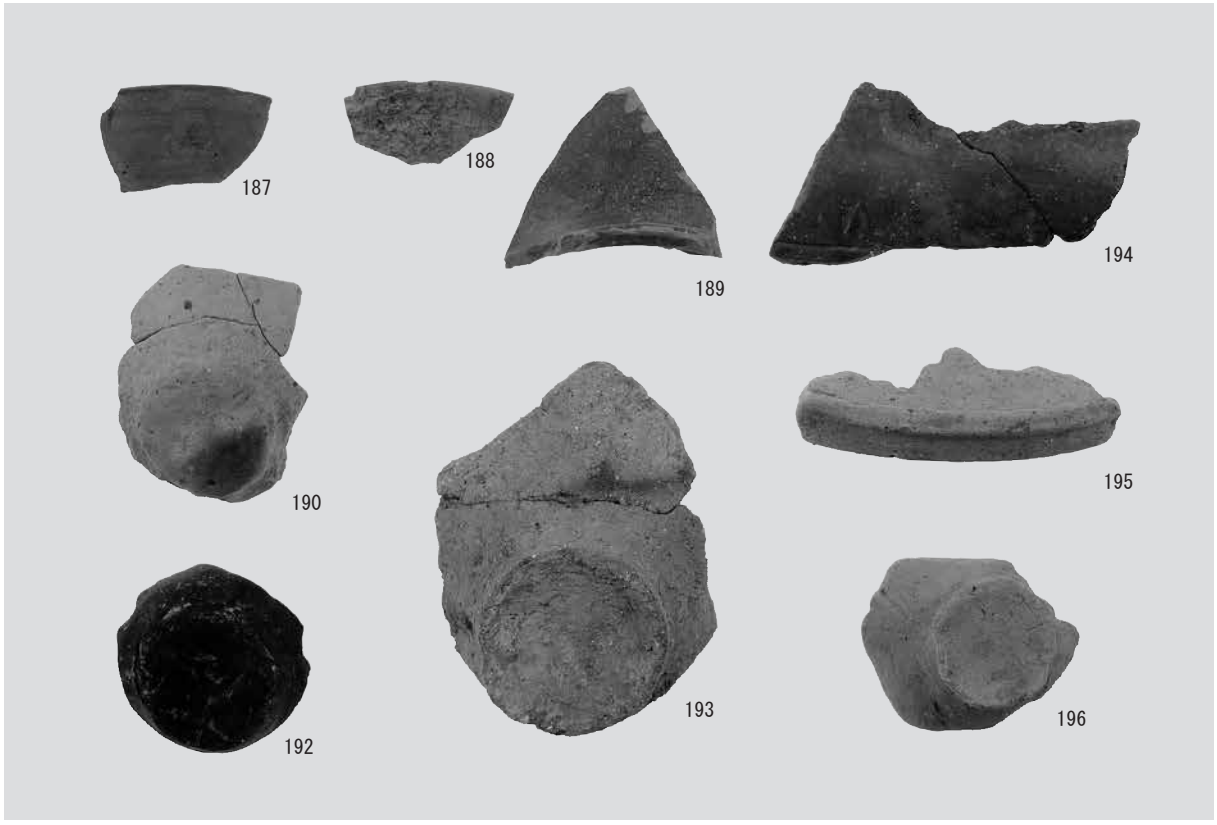
第２面　遺構出土遺物(7)

第２面　遺構出土遺物(8)

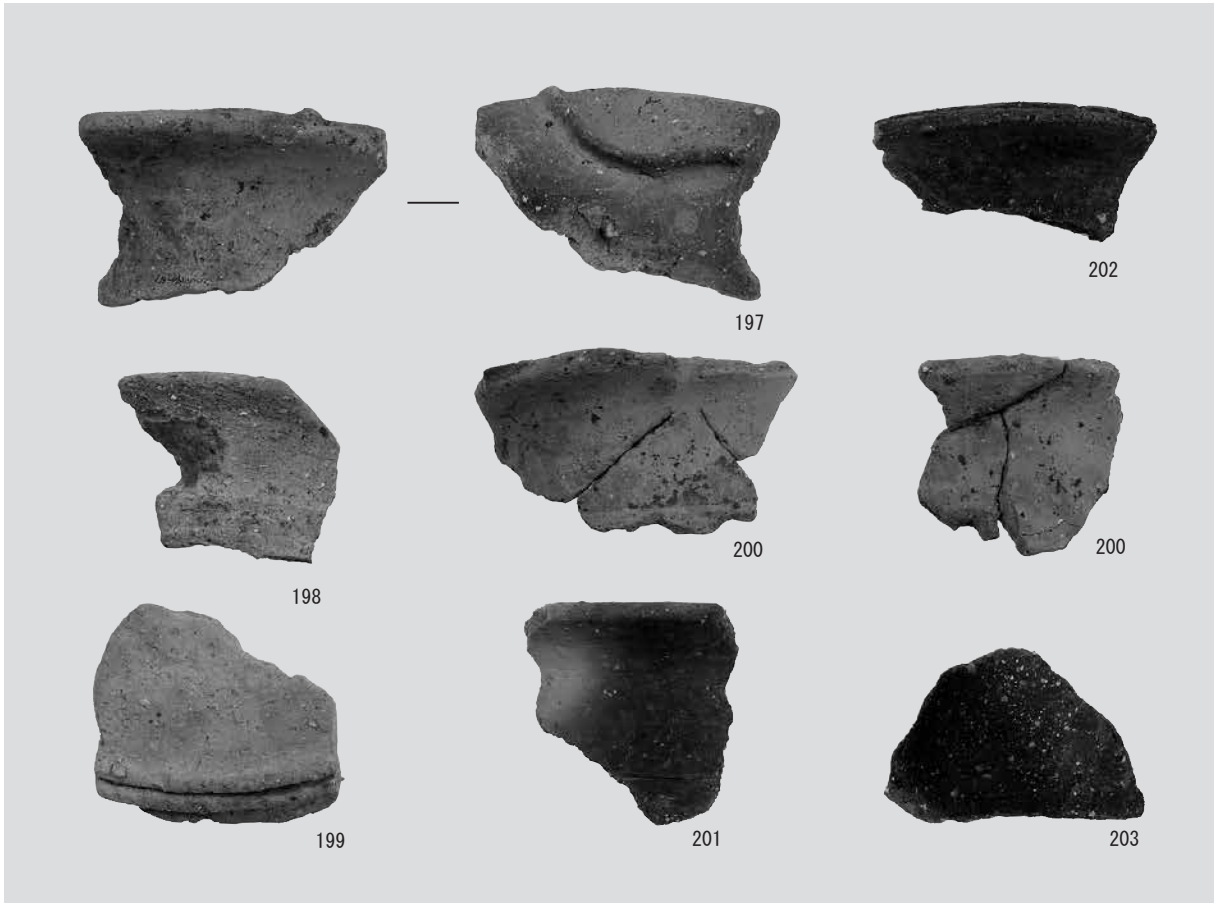


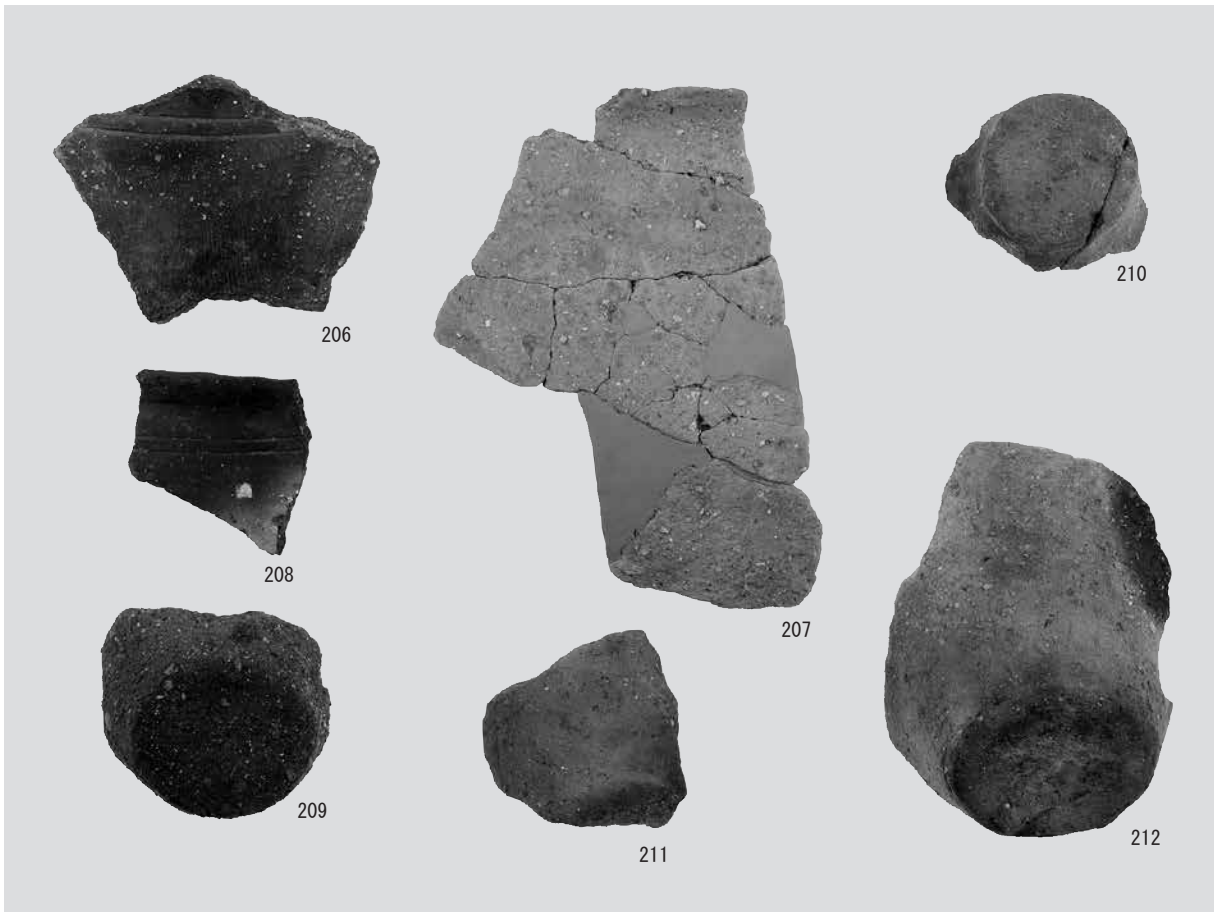


第２面　遺構出土遺物(9)

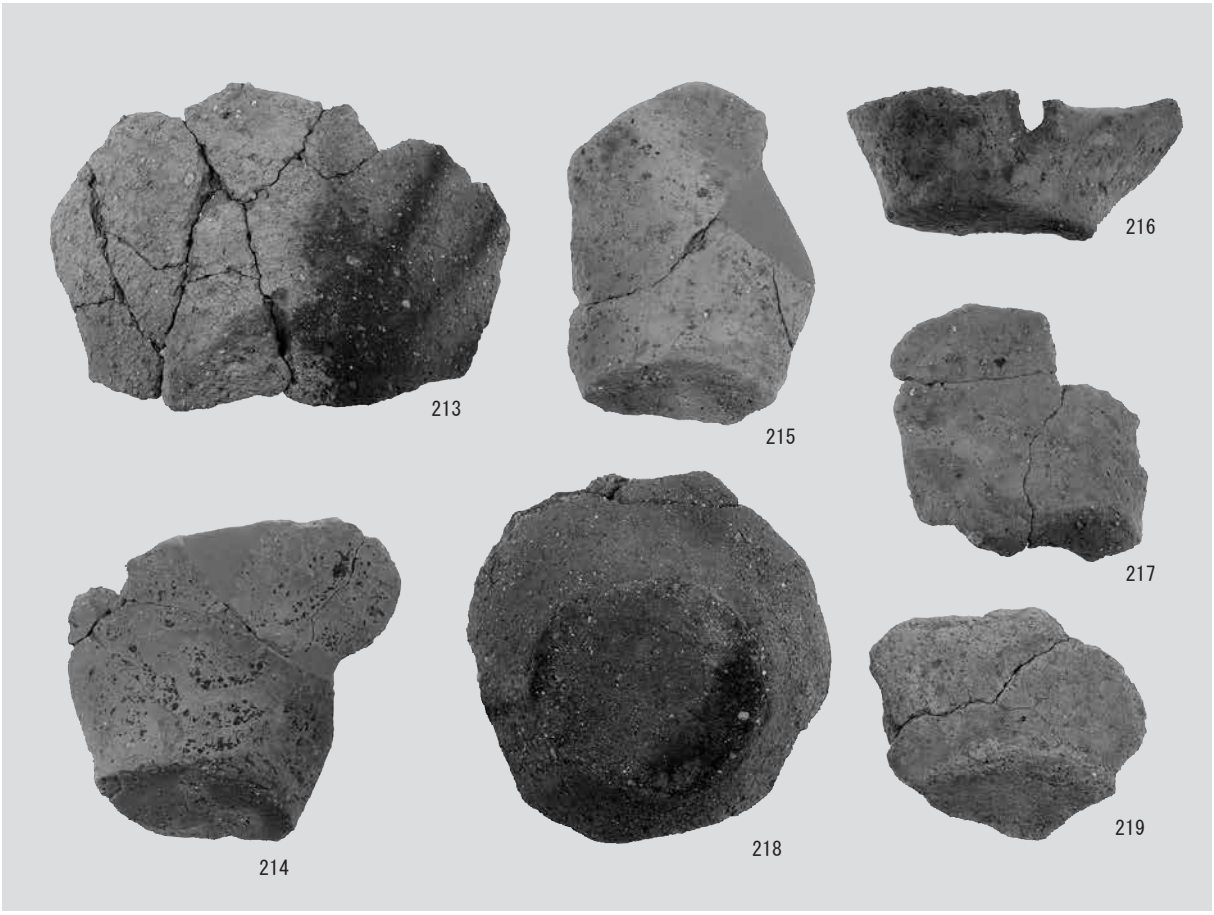


包含層　出土遺物(1)



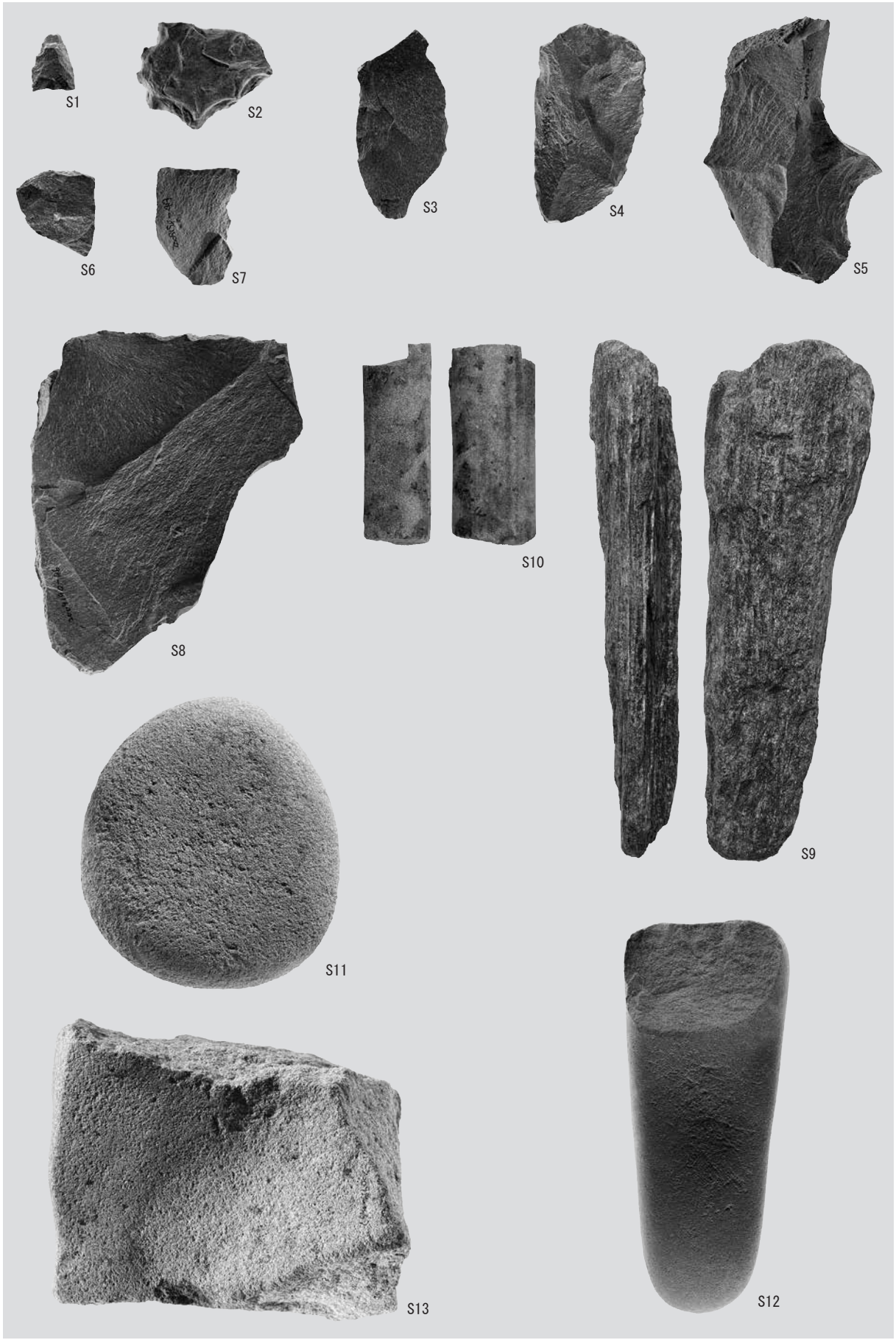


包含層　出土遺物(2)



包含層　出土遺物(3)

写真図版 32　遺物



出土石器

洲本市

兵庫県文化財調査報告　第 426 冊

馬 木 遺 跡

洲本物部住宅建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 24（2012）年 3 月 29 日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
Tel.　079−437−5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒 650−8567　神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号

印　刷　富士高速印刷株式会社